

緋弾のoutlaw

サバ缶みそ味

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

瑠璃色の少女にアホ犬が愛を叫ぶ物語…？

東京武偵高校、強襲科の犬塚信綱が巻き起こし、まき込まれるガン&ブレードアクシオン

笑いあり涙ありお砂糖ありのファイティングラブ？ストーリーである

追記

R-117. 5タグ、追加します

原作キャラ死亡有りタグ、追加いたしました

目次

四月バカ共の行進曲

1話	君と僕と桜日和	1
2話	ダイヤボーは突然に	8
3話	犬塚信綱はクールに去るぜ	17
4話	ジークと朝食&『暗殺者』っす!	24
5話	達人は保護されているツツ	34
6話	ダイ・ハード(笑)	43
7話	ひもきり	54
8話	踊る羽田線	65

五月のキャンデー

9話	激闘	75
10話	エピソード的なやつ	88
11話	本部が強くて何が悪い	100
12話	お宅訪問	111
13話	Toi Lavie	128
14話	Toi Lavie	138
15話	Toi Lavie	152
16話	Toi Lavie	152

	④	—	165
	17話	O Toi La Vie	
	⑤	—	176
	18話	キャンディ	
	19話	訪問者	200
	6月ヴァンパイア		
	20話	セロリ	215
	21話	悪魔城ドラキュラ (誤)	
224	—		
	22話	くっころ系姫騎士	235
	23話	激おこステックファイナリ	
	アリテイぶんぶんドリーム		247
	24話	泥棒大作戦 (誤)	263

	25話	ひと狩りいこうぜ (ゲス顔)	283
	26話	ブラドとの戦い、嵐の前の静	
	けさ		297
	7月クライシス		
	27話	予兆	316
	28話	再会	333

四月バカ共の行進曲

1話 君と僕と桜日和

朝日を照らすお天道さんの日差しは暖かく、桜は淡い桃色に咲きどこも満開、お空を駆ける雲雀はびよびよと飛んで、そよ風は気持ち良い。まさに春爛漫で上々である。

「こんな日は遅刻して登校するに限る！」

黒いシヨートヘア、学ランを羽織り、『サーモン』と書かれた黒のロゴTシャツ。皆さま初めまして、学生真つ盛りの私、犬塚信綱と申します。

「さてと、堅苦しい自己紹介はさておき……」

俺は背伸びをして大あくびをする。今から行く学校、東京『武偵』高校へ歩いていくことにします。武偵とは『武力探偵』の略であり、逮捕権はあるが警察とは違い武装を許可された探偵のこと。探偵らしくお金で動きますのでまんまですね。

その武偵校には色々な学部がありますが……長くなりますので省きます。高校生と同じような授業はありますが将来立派な武偵や武装検事とか目指すために銃だの刀だの振るい此れ日々鍛錬を行っております。

「……春だねえ」

気持ちいそよ風が通り、桜の花びらを散らしていく。今日は本当に暖かく春真つ盛りである。このまま歩きながら寝ようか、それとも河原まであるいて原っぱで寝転がろうか……

「うおおおっ！」

眠気を邪魔するように後ろから自転車を必死に漕いでいる生徒の姿が見えてきた。黒髪のさらつとした武偵高校の制服を着た男子。間違いない、あれは近所の……

「おいつす、キンジ！今日は寝坊かー？」

「ノブツナ！そんな場合じゃない、助けてくれ！」

まるで溺れて藁にも縋るように助けを求めて悲痛な叫びを出すキンジ。彼の名は遠山キンジ。金に次でキンジと呼ぶがたいていキンジで。俺の住んでる武偵専用のマンションのお隣さんである。一体何事かと目を凝らせば……なんだか物騒な銃器を付けたセグウェイが数機、キンジを追いかけているではないか。

「……」

俺はこっそりと木陰に隠れる。先に言っておこう、面倒です。キンジ特有のスキル『フラグ建築士』。彼は何かと面倒な事に巻き込まれる癖があるようだ。朝っぱから、しかもこんな暖かい日から面倒に巻き込まれるのはゴメンだ。

「ちよ、薄情者おおおつ!!」

「許してやキンジ?今日は桜餅を食べたい気分なのだ」

「知るかあああつ!!」

どうにでもなれとキンジはやけくそに自転車をこぐ。俺は気配を消して自動追尾の武装した無人セグウェイが通り過ぎるのを待つ。

「…行つたな。さて行くこうとしますか」

決めた。道中にあるいつも通っている和菓子屋さんでお団子と桜餅を買おう。

＊

「…なんじゃこりゃ」

俺が見たものは。葉莖があちこちに散らばり、破壊されガラクタと化したセグウェイがスクラップされていた光景だった。火薬と硝煙の臭いがたちこむ。どうやらここでドンパチしたのだろう。

「キンジか?いや、こんなことができるのは条件が限られるし…」

キンジがやったとすればこの有様は間違いなく女絡みだ。なぜ女だかつて?アイツは女がいると強くなるからな。何台か損傷が少ないセグウェイを見る

「…そうだ、これを直して通学用に使ってみるか」

残りの部品は売りつけれるし儲け儲け。俺はセグウェイを2台担いでのんびりと歩

みを続けた。

「20分後——(??^?)——

「うん、やっぱり帰ろうかなー」

去年まではバイクで通学していたから遠くねえと思ってたんだけど、意外に遠いな。え？そのバイクはどうしたかって？言わせんなよ。おとといの任務で悪い奴等にダイレクトアタックしておじやんさ。

「レインボーブリッジ到達できません！」

どこかのサンバデイトウナイしてる警察官っぽく愚痴っていると、爽やかな風が吹く。そしてほのかに香る草原のような優しい香り。ああ、今日も彼女は道中にある公園のベンチでぼーっとしている

「……」

ミント色のショートヘアに琥珀色の瞳。ゼンハイザーのヘッドホン、PMX990をつけ、SVDことドラグノフ狙撃銃を背負っている武偵高校の制服を着た少女。無表情で何を考えているかわからないポーカーフェイス(?)。俺はそんな少女を知っている。つか同じ学校の生徒だし。いつも見かけたり、会うたびに風が吹く。

「おいつす、レキ。こんな所で何してんだ？」

レキと呼ばれる少女は俺の呼び声に気づいてこっちを見る。うん、本当に無表情なの

よな。そんな彼女は生徒からは『ロボット・レキ』と呼ばれるほど。しかし、そんな彼女はドラグノフを使えば天才的なスナイパーになる。去年は彼女とバディを組んだから進学できました（ニッコリ）。

「…『風』の声を聞いてました」

あちゃー…：うちの忘れてたぜ。レキ、絶賛厨二病なんだよね。去年も『風』がどうのこうのでさいタイのよねー。

俺だけしか知らないからいいんだけど、他の人が聞いたらドン引くぞ。なので俺がしっかり治してあげなくてはな（・ω・）

「で、風はなんて言ってたんだ？」

『ここにいれば待ち人あり』と」

…神社のくじ引きですか？時折よくわかんないことがあって正直くじけそう。

「…もしかして俺がくんの待ってた？」

「？」

おおい、首を傾げるな、傾げるな。こつちが聞きたいわ！レキを待たせるとはけしからん野郎だ。懐から懐中時計を確認する。もう始業式は始まってんなあ。その待ち人Aはどつかで女をつるんで学校に行ってるに違いない。まったくけしからん！

「しゃあない、どつかでタクシーを拾うか。レキ、そんなとこで待ってないで俺と一緒に

行かないか？」

レキは俺とは別の方向を向いてじっとしている。うーん、これは考え中か？

「…そういう選択肢もありますね。わかりました、一緒に行きましょう」

お前は脳内でルート選択してんのか。まいいや、去年と変わらずいつものように俺だけ駄弁りながら一緒に登校するなら構わないさ

「和菓子屋で桜餅買ったんだ。食うか？」

「ありがとうございます」キリッ

あ、そこは素直なのか…

もつもつもつ…

「…かわいい食い方すんのな」

「？」

とりあえず撫でよう。とりあえずレキに駄弁りながらタクシー乗り場まで歩いていこう。一週間の間、師匠と一緒に日本アルプスに上って修行したこととか、その山の中にゴリラよりでえ猿とサバイバルしたり、『私は一向にかまわんツツ！』とかよく言う師匠の友達の人とごはん食べたり色々…

この日を境に、物語は始動する。リリカル…じゃなかった、『緋弾のoutlaw』、始

ま
り
ま
す

皆さま、遠山キンジと申します。まさか入学して早々今噂されている『武偵殺し』に襲われて、その道中に見つけた親友に見捨てられ、拳銃の果てには神崎アリアという見た目は中学生中身は高校生の女の子に助けられて、かくかくしかじかで俺はヒスツてセグウェイを撃退して…そして今に当たる

「…」

なんということでしょう。まさか同じクラスになってしまふとは。しかも隣の席になつてしまふとは。『アリアを守る（キリツ）』とか言つてたヒステリアモードの俺をぶん殴りたい。そんなもつて周りの野郎共は羨ましいとか愚痴るし女の子たちは女たらしだと愚痴るし…なんなのこれ、俺は普通にいたいのに出鼻をくじかれた気分だ

「…ところで」

こちらを不機嫌そうににらんでいた神崎が第一声を開ける。

「キンジの隣のその席、空席なんだけど。私、そつちの席がよかつたわ」

ザワツ

…え？なんでみんなぎよつとしたような顔をするんだ？…ちよつと待て。まさかと思うけど、嫌な予感がするんだけども…。近くにいた俺の親友2号の武藤に聞いてみる「…もしかしてこつちの席は…ノブツナか？」

「…ああ、『狂犬』ノブちゃんだ。」

「ご愁傷さまと武藤は肩を叩く。余計なお世話だつーの!! 項垂れる俺に神崎が興味津々な顔してこつちを見る

「誰? そのノブちゃんって人?」

「ノブちゃんについて教えて進ぜよう!」

悪乗りで話に入ってきたのは、金髪のツーサイドアップの童顔の女の子、俺の親友かつ腐れ縁の峰理子だ。周りからはロリ巨乳だと言われているが果たしてその通りである。

「本名、犬塚信綱!! マイペースな雰囲気醸し出すけど…授業は常にさぼる! 机の中に手榴弾、弁当と見せかけC4!! 昼寝の邪魔する輩は磔拷問!! 強襲科でもやることえげないことから『狂犬』と呼ばれる男、それがノブちゃんだ!」

「そして始業式も2年生初日も早々にさぼりやがった…」

理子は相変わらずオーバーに説明するが、8割方その通りである。しかも1年の頃俺は信綱と同じクラスだった。授業中、あいつの机の中に隠れていた催涙ガスプレーと唐辛子の粉塵が漏れて教室が煙に包まれて死にかけてのははつきり覚えている…まさか今年もそんな目にあうのだろうか…

「やべえ。キンジの奴、遠い目をしてやがる」

「よっぼどびどい目にあつたんだよねー」

ま、まあ信綱なら気を付ければなんとかなるだろうな……うん、頑張ろう……

「と、ところでさ、俺の後ろの席も空いているんだけど……誰かくんのか？」

ザワツ

……え？うそでしょ。まだなんかあんのかよ。またクラスのみんながザワツしているし、武藤はマジで……愁傷様とか哀れみを持った顔してるし、なんなんだよ！

「キンジ……お前の後ろは……ジークなんだ……」

「……マジで？」

信綱 side

本日は晴天なり。タクシーに乗って着いたものの、クラスがわかんないから結局は授業をさぼって屋上で過ごすことにしました。

「あは、こんなことなら枕を持ってくればよかったな」

チラツと隣を見る。レキは相変わらず外の景色をぼーっと眺めているだけだ。うーん、なにを考えているのかよくわからない。まあ見て愛でもこれまた一興……じゃねーよ。暇すぎんだよ。

「な、なあレキ。今日さ暇だったらラーメン食いに行かね？いつもの『一文字百太郎』っ

てとていじや」

「…」

はい、いつものスルーですね。と思う方、レキ観察検定3級は取れませんぞ？最近になつて瞬きの回数で yes か no かわかるようになった。奇数なので今日はOKということだ。もちろん俺のおごりで

「さーて、そうと決まればあ、今日はさっさと早退!!あとはまたーりしようぜえ!」

「…」

ん?レキが空を見上げたぞ?俺もつられて見上げると上空に飛行機が飛んでいるのが見える。まあ近くに飛行場もあるしごく普通なんだが…

アアアアアア…

…空耳かな?空から誰か叫んだ声がする。気のせいか通り過ぎた飛行機からなんか黒い点がこつちに近づいてきてねえか?

Y e a a a a a a a a a a a a a a a a ツ !!

あ、気のせいじゃねえや。明らかに誰か急降下してくるのが見える!しかもこの声聞きおぼえがあるぞ!

「Die y a b o o o o o o o o o o o o !!」

嗚呼、此奴は知っている。同年齢ながらも金髪で白と赤の袴を着た、日本かぶれのア

ホ!!

「シツプーケーン!!」

このまま屋上に落下してミンチになるかと思っただが、いつものようにあいつの手から出される風の気弾で相殺してうまく着地をする。おかげで目を覚ますような強い風が吹く。……あ、レキさん今日はグリーンなんですね

「H A H A H A H A !! 久しぶりだな! レキ、ついでにノブツナ!!」

「俺はついでおこの野郎」

紹介しよう。俺の腐れ縁のダチであるジーク・ハワードだ。アメリカ出身で、今や世界的有名な大企業『ハワード・コネクション』の副社長である。ちなみにジークの爺さんはサウスタウンとかいう町に住み、マフィアより恐ろしい存在だったとか。今は孫にぞつこんな好々爺であるらしい

「で、なんかようか?」

「どうだ? オレのかっこいい登場シーンは。まさにブシドーであろう?」

あと『古武術』を習っているのだがどこどう見たら『武術』なんだか。ブシドーのオモテナシだの色々と間違った日本の知識を持っている。こういうのは突っ込んだら負け。

「はいすごいすごい」

「フハハハ、もつと褒めてもいいのよ?」

「殴るぞ」

「シヨボーン」

しよぼくれんな。お前がシヨボーンしても可愛くねえよ。

「で、何の用だ?」

「どうだ? オレのかっこry」

「無限ループにはさせんぞ?」

此奴の悪乗りには毎度疲れる。レキに至っては退屈なのかうとうとしてるし、さつさと要件を言わして片づけよう。

「で、本当に何の用だ?」

「うむ。実はな…」

むむ。珍しくこいつが深刻な顔をしている。まあ世界的大企業だし、爺さんマフィアよりすげえしよつぽどなことなんだろう。内容によっては手伝えるか否かだが

「……忘れちゃった☆」

「……」

よし、片づけよう。俺はさっそくこいつを足払いでこけさせ両足を持ってジャイアントスイングの如くグルグルと回る

「そおおいっ!!」

そして屋上から思い切り投げる!

「Noooooooooooooooooっ!?!」

投げ落として大丈夫かって?地上から数百m離れた上空から着地して無事なんだし、大丈夫だろ。ん?ありえないって?そもそも高校生が銃でドンパチする時点でおかしいから気にすんなって

＼シツプーケーン!!／

＼キャアアアアッ／＼スカートがっ!!／＼親方、空から外国人が!!／

ほらな?大丈夫だった。:たぶん。さてとレキのほっぺをつついて起こすか。マシユマロみたいに柔らかいほっぺだな

「おーい起きろ、レキ。今日はもう帰ろうぜ」

「……」コクコク

無表情で無言ながらも頷いてついてきてくれる。1年もこんなやり取りだったが少

し進歩できて嬉しい今日この頃。

3話 犬塚信綱はクールに去るぜ

「絶対にいやなのだ！」

「なーそんなところ頼むよー」

武偵高校にはいくつかの学部学科がある。拳銃や刀剣など武装して強襲逮捕を行う強襲科、車輜や船舶、航空機の運転、整備に特化した車輜科、探偵術や推理学による観察、分析に特化した探偵科などがある。

で、俺達がいるのは武貞の装備品のメンテやカスタマイズを行う装備科ってところにいる。そして俺の頼みを断っているショートカットの小柄な女の子は平賀文。俺が知る限り一番腕のいい装備科の生徒だ

「だからさーちよいつと修理するだけじゃん？いい値を出すからさー」

「…とか言つて、以前修理してあげたドローン覚えてる？」

「あー、銀行に引きこもってる強盗どもに向けて爆弾装備して神風アタックしたあれか？」

「どうせハチャメチャに改造するつもりなのだ！」

「ままま、そう怒んなって。今回の代物は通学用に使おうって思ってるからさー」

うまいぐあいに機嫌をとらなくては話を聞いてくれない。なんとか宥めて話に乗ってくれた

「……で、直してほしいのは何なのだ？」

「ああ、このセグウェイなんだけども……」

ごとりとテールブルの上にセグウェイを2台置く。すると平賀の奴は驚いたように目を開いた

「ちよ、これって『武偵殺し』の証拠品じゃない!？」

「あ? なんじゃそりゃ?」

「見てないの? 最近話題になってる武偵を襲う殺人犯!!」

つまるところ今朝キンジを襲っていた無人セグウェイは武偵殺しの仕業らしい。さらには自転車に爆弾がしかけられていたとか。あいつの悪運は呆れるほど強いようだ。それで現場に行った鑑識科は残りの残骸を回収して鑑識しているところとの話だ。

「まさか勝手に現場から証拠品を持ち去ってたの!？」

「んー、知らね。奴さんの証拠が欲しけりややるけど、そのセグウェイはちゃんと修理してくれよ」

「仕方ない……値段はこれでいい?」

平賀は仕方ないと観念して、電卓に値段を打って俺に渡す。わーお、結構なお値段で。

「ぼったくつてねえよな？」

「何言っているの？当たり前前の値段なのだ！」ドヤア

仕方ないな。財布から払えるかどうか残金を確認するけども…やつべえ、足りねえ

「あ、後払いでもいいか？」

「まいど〜♪」

やつぱりぼったくられていているような気がする…。まあ腕は申し分ないし明日には完成しているとかいうからしつかりやつてくれるんだらうな。用は済んだしさっさと出よう。

「レキ、待たせちまったな」

「…」

装備料の棟を出て入り口の近くでレキは待っていた。しばらく待ちぼうけをさせちまったのに構わないと首を横に振ってくれた。

「おたく渋いねえ！」

そう言つてラーメン屋の店員は俺とレキに本日のラーメンを運んできてくれた。ラーメン屋『一文字百太郎』は俺がよく通う所である。つか、金髪、グラサンにダウンベストでジーパンの店員や厨房では「破壊力うううっ！」って叫び声が聞こえるし、こ

の『芽多留巢羅ツ具ラーメン』で大丈夫なのこのお店は…

「…替え玉ください」

「あいよー!」

はや!レキ食べるの速?!?そうだった、こいつは見た目に反する大食いキャラだということを忘れてた。お財布、大丈夫かな…

「信綱さん…」

「あ?ちや、ちゃんと食べるぜ?俺の分は…」

「最近『武偵殺し』が話題になっていますが、信綱さんはどうしますか?」

レキは寡黙なところが多いのだが、任務の打ち合わせや仕事の相談とかこういった時はやや饒舌になる。

「…私の友人はそれを追っています。他の生徒も調べているようですが…」

「うーん、俺は知ったこっちゃねえな。そいつとは関係ねえし。…まあ俺の私生活の邪魔をするなら絞めるけど」

「…」

あれま、俺が動くのか気になっていたのかな?動かないとわかった途端黙ってうなずいてるし…まあやられた連中にはドンマイとしか言いようがない。いつかは自分が死ぬかもしれない道を選んだんだ。それぐらいの覚悟はするべきだ

「あいよ、替え玉ひとつ！」

「…あと餃子を5人前」

「おたくよく食べるねえ！」

「レキさん、やめてください、俺の財布が死んでしまいます」

男子寮

「さようなら諭吉様…こんには小銭…」

なんとということでしょう、軽かったお財布が今やいっぱいの小銭で膨らんでいる。次からはレキとごはん食べに行く際はお財布に余裕を持たしていこう…

「あ、そうだ。キンジの奴はどうなったのかな？」

今朝会って以降あいつを見ていなかった。あいつは無事に学校に着いたのかまたは病院でまずい病院食を食べる毎日を送るハメになったか。俺は口笛を吹きながら隣のキンジさんのドアの前に立つ。そして腰につけてるポーチからピッキング道具を取り出して開ける。なんで持つてるか？武偵だからさ（ゲス顔）

とかいっつは本当に警戒心ないんだよなあ。あ、簡単に開いちゃった。さてと今頃何してるんですかねえ

「キンジ！あんたは私の『奴隷』になりなさい！」

「」

なんとということでしょう。キンジさん宅にお邪魔すると部屋にはピンクのツインテールのガキンチョと元気にぴんぴんしているキンジさんがいらっしやるではありませんか

「…マジカ」

「!?ちよつと!?あんた誰よ!?」

「ゲッ!?ノブツナ!」

俺のとつさの一言に気づいたピンクツインテロリは驚いたような顔をして、キンジさんは『げえっ!?関羽!?』みたいに絶望した顔をして俺の方を見た

「…ま、まあキンジさん。世の中にはいろんな趣味や趣向があるんだけどさ」

「ま、待ってくれノブツナ！これは誤解だ！」

「…さすがに幼女と『奴隷』プレイはアウトでしょ…」

ちよつと引くわー。マジで引くわー。だが人にはいろんな思考がある。共感はあるがそれを否定することも肯定することもできない。なのでキンジのこの先を案じながら犬塚信綱はクールに去るぜ

「ま、待ってくれー!!」

「達者でな。あと教室、隣の席だったら…とりあえず殴るわ☆」

キンジも男だから仕方ないんだ。…でも幼女はねえわ。俺はそそくさと部屋を出ていく。嗚呼、明日からアイツは『女たらし』から『幼女たらし』になっちまうのか…

その夜

「……」

眠れん。今日は疲れたから早く寝ようと思っていたのだが…

バン!!バン!!\風穴ああああっ!!/バン!!バン!!\ちよ、アリア…ギャーっ!／

隣からアリアという子が起こりながら銃を乱射している音とキンジの悲鳴が聞こえる…

「…銃声とか、あいつらどんなプレイしてんだよ…」

4話 ジークと朝食&『暗殺者』っス!

なんということでしょう。目が覚めたのは朝の9時ですよ。結局寝付けなかったかな。お隣のおバカ共がドンパチするわけで耳が痛い。

「どーしよ…さぼろっかなー」

掲示板じゃテストもねえし、ろくなクエストもねえし強襲科にいつてもすることねえし、今日は寝過ごそう!と思った矢先に携帯が鳴る。

「もしもし?」

『ユーキャンノツ』

速攻で切る。なんでジークの野郎にモーニングコールされなきゃなんねえんだよ! てかまた鳴ってるしよ!

「んだよジーク!なんのようだ!」

『H A H A H A! ノブツナ、おはよう!』

「5秒以内に言え。切るぞ」

『なに、頼み事を思い出したのだ。朝食も用意しているぞ』

「…仕方ねえな。ちよっと待てっろ」

『40秒で支度しな!』

「やかましいわ!」

言われるもなく、40秒以内で支度はしました。

「で、どこで待ってんだ?」

『このままペランダまで来てくれ』

指示通りにペランダに出てみると、ジークがクルーザーに乗ってドヤ顔で待っているのが見えた。豪華なクルーザーを見るところさすがは『何でもやるわよ』をコンセプトとしたハワード・コネクションだな。

クルーザーへと飛び乗っていざ学校があるメガフロートへ。ジークの部下の人が朝食を運んできた。牛乳にトーストにシーザーサラダとハムエッグ。うん、コメントするまでもない

「朝食セット、590円でございます」

「とるのかよ!」

安くもなく高くもねえ料金だなおい!…まあおいしいけどさ

「頼み事はなんだ? 碌でもねえことだったら今すぐ金返せよ?」

「そう急かすな。話は簡単だ。『武偵殺し』の共犯者を捕まえるのを手伝ってくれ」

また『武偵殺し』か。気になったから昨日ちよろつと調べたけども、犯人はとつくの

前に逮捕されている。…まあ昨日の朝にキンジを襲った輩が『武偵殺し』だとすれば模倣犯か共犯者かもしくは…

「…世間様は犯人は捕まったと思っっているが、あれは明らかなフェイクだろう」

「だよなー。手がかりはあんのか?」

「サウスタウンで爺様が似た様な事件に襲われてな。まあ無事なんだけど」

「お前の爺さんが死ぬ姿は思い浮かばねえよ」

「それで爺様が調べたところ、『マッドギア』の残党の仕業ときた」

マッドギア。たしかサウスタウンの隣町、メトロシティとかいう街であれこれやってた犯罪組織。市長の娘を攫ったことで市長の逆鱗に触れてしまい、筋肉もりもりマツチヨの市長に潰されたというお茶目な組織だったな。

「てか、お前の爺さん狙うとか命知らずだろ」

「オレもそう思った。で、爺さんが残党の一人をとちめて問い詰めたらジャパーンで『武偵殺し』とつるんでいることがわかった。爆弾の手口もそいつに教えられたようだ」

「ようはその奴さんに雇われたってところか」

「良く調べないとわからんな。偽名で依頼を出している。Sランクだ。頼めるか?」

さて、報酬はあまり期待しないがどうしようかなー。こちとら退屈はしているが…

「とりあえずは乗ってやるよ。」

「うむ。助かる。…ところで、学校はどっち方面だっけ？」

「え？」

この後めちやくちや迷つてめちやくちや遅刻した

職員室

「あー、やつぱり乗るんじやなかった…」

学校に着いたものの、まさか先生たちがスタンバっていたとは…案の定捕まり職員室へ連れて行かれたンゴ。ジークの野郎は笑顔で俺を囮にして逃げやがった。会ったら殴る。

「犬塚あ、始業式早々さぼるたあいい度胸してんじやねえか」

「あ、犬塚君は2年A組ですよ？」

「いやー教室わからんかったんですよねー、高天原先生、かんぴよう先生」

「蘭豹だ！ぶつ殺すぞ！」

俺を心配してくれる眼鏡の笑顔を絶やさないうるやかな女神なのが高天原先生、『ぶつ殺す』とかぶつそうなことを言うのがらんぴよう先生。てか教師が物騒な事言っているのかいな

「よかった、教室が分からなかったんですね。これで来てくれますね？」

「あー、どうしよっかなー…」

「ゆとり、こいつを甘やかすな。去年なんか半年も授業をさぼっていたアホだぞ?」

「ままま、そう怒らないで下さいよ、伝票先生」

「蘭豹だ!」

ウガーと俺に怒鳴る信憑先生。そんな怖いから彼氏が…おっとその話はやめておこう。マジで殺されるかもしれない

「どうせお前は2年生になっても屋上でさぼるんだろ?」

「さつすが蘭豹先生。わかってるー」

「そこで、罰としてお前に課題を与える」

「あ? 課題ですと?」

「今月中にSランク任務を最低3つこなしてもらおうぞ」

あ、なーんだ余裕っすよー。それならゆっくりやつても怒られはしねえし、存分に屋上で寝過ごせる。

「それだったらお茶の子さいさい。軽くジャブ程度で片づけてやりますよ」

時は金なり。俺は早々に去って屋上でシエスタでもしたいのだ。職員室を後にしようと思ひ出したかのように蘭豹先生が付け加えた。

「あ、今週中に1つやらないと退学にするからな」

「鬼！悪魔！バツイチ！」

『誰がバツイチだ！ぶつ殺す！』と叫んでS & W M500を発砲する寸前に俺はダツシユしてその場を離れた。スマヌ高天原先生、あの野蛮人を止めてくれ。つか今週かよ!?今日は木曜だし早くやらねえとやべえ！こうなつたら：頼めるのはあいつしかいねえ！俺は走って屋上へ向かう。そして扉を蹴り開けて、いつも屋上で景色を眺めているあの子に話しかける

「レキイイイツ!!手を貸してくれえええっ!!」

俺は三回転半・空中スピン・ジャンピングスライディング土下座をレキの前でやった。去年はトリプルアクセルフライイング土下座をしたんだっけな。

「…」

あれ?無言?あれか、レキの前まで滑り込んでの土下座はまずかったのか!?恐る恐る見上げると…あ、やっぱり無表情ですね。というか驚いたり、苦笑いしたり、養豚場の…それはいいや、なにかアクションしてくれないとこつちが困るんだが…

「…ノブツナさんが早かったですね」

「ん?それはどういう…」

「…わかりました。手を貸しましょう」

「嗚呼、なんというご慈悲! さすがはレキ大明神! いや女神さま!」

まさかすんなりOKとは。まあ去年もこうやって組んだんだけど。それにしても…俺が早かったってどういうことだ?

「『武偵殺し』の捜査ですか?」

とりあえず、今週中にSランク任務を適当にやるのと並行してジークの頼み事である『武偵殺し』について調べることがレキには話した。ジークの言う通り、偽名で依頼をはつつけてあるけども…『しょうゆ・ハワード』は明らかにバレバレなんですけどねえ。「おう、親友の頼みだ。真犯人とその協力者をとつちめる」

「そうですか…それで今はどこへ向かっているんですか?」

レキも気になったか。今は学園の離れの教室、いわば空き室と特進クラス『X組』がある棟の3階の端っこにある『文学部』とかいう教室の前に着いた

「まず捜査するには情報と証拠が必要だ。『虎穴に入らざれば虎子を得ず』、ということ『虎穴』をよく通っている奴に会う」

いわゆる同じ穴の貉? そっち側に詳しい奴に協力を要請するところだ。俺は古い木製のドアを押し開ける。鍵もかかってない上に入れば誰もいない空き部屋に見えるが

…

「おーい、いるんだろ？隠れてねーで出てこいや」

俺の声が虚しく響く。けどもそうしないとあいつは出てこないんだよな

「いやー誰もいない教室で男女が入ってナニをするか楽しみにしてたんっすけどねー」

ほら来た。誰もいない教室に第三者の声が響く

「んなアホな。お前に用があるんだっての」

「はいはいっと。ノブちゃんがうちに会いに来るのは遊びじゃなくて仕事の話だけなんっすよー。レキレキは羨ましいっす」

俺とレキは近づいてくる声の方に視線を向けばそこにそいつはいた。いや、最初からそこでじーっと見ていたといった方が正しいのかな。レキより慎重は低く、ツンとしたアホ毛が目立つふんわりした金髪のショートに赤い瞳。彼女は武偵の生徒とは違う制服を着た少女。

「よっす、鳩（にお） っち。おひさ」

「はーい、皆さんこんにちわーっす！強くて可愛い、走り鳩ちゃんっすよー！」

走り鳩。俺の腐れ縁2号。去年まではミヨウジヨウ学園とかいう学校の生徒で生徒会長とかやってたとか聞く。でもそのミヨウジヨウ学園、実のところ暗殺者とかがよく集まる学校である。前までは何かチートじみた能力を持つ学生をターゲットに暗殺しろとか物騒な事をしていたらしい。で、その走り鳩も案の定、暗殺者でもあるのだがど

ういう風の吹き回しか武偵に入学してきた。

鳩の業なのか、彼女を知る人は教師陣とごく一部の生徒だけのようだ。

「それでノブちゃん、ウチに協力要請っスか?」

「話が早くて助かる。『武偵殺し』と『マッドギアの残党』について調べてくれるか?あと手伝え」

おっと、これを聞いた鳩のやつすんげえグスイ笑みをだしやがった。どうやったらバイマンみたいなギザギザな歯になるんですかねえ

「へー、ノブちゃん。いきなりハードな頼みをしてくるっスね」

「文句を言うならジークに言え」

「仕方ないっス…でもそれ相応の報酬は頂くっスよ?」

「ほれ、メロンパン。お前の大好物だ」

「yes、マイロード。うちに何でも任せるっス!」

ちよろい、大丈夫なのかこいつ…

「…情報は早く欲しい。んで確実な証拠は集めれそうなら集めてくれ」

「ラジャーッス!」

「…犯人お前じゃねえよな？」

「やだなー、そんなことしたらウチ、ノブちゃんに『ブチ☆コロ』っスよー」

「あははははははは!!」

「……」

……やっぱ不安だ。

5話 達人は保護されているツツ

「さてと…次はつと」

あちら側の情報と証拠の方は鳩に任せてお次は自分なりに捜査してみるか。というわけでレキを連れてやってきたのは警視庁。

「警視庁…？」

レキが珍しく首を傾げた、かわいいな。たしかに警察と武偵じゃほとんどが違うし、武偵の方が武装してあちこち動けるから武偵庁とは仲があまり良くない。だから捜査としてここに来るのは誰もがお門違いだと思っただろう。

「なに俺の師匠の知り合いに会うだけだよ。アポなしだけど…」

あの人は物好きだから大丈夫だと思っ…。さっそく中に入って手帳を見せる。時折師匠と一緒に遊びに来ているからすんなり入れた。そして、いつもの場所、警察官の柔道場へ向かう。柔道場では警察官の方たちが柔道着を着て柔道の組手の真つ最中だ

「はへへ、やっぱ気合入ってんな」

俺は感心しつつ目的の人を探す。いたいた、背の高く筋肉質な警察官の中にちよこんと身長が低く、袴を着た分厚いべつ甲の眼鏡をかけたご老人の姿が。

「やつはろー！ 渋川さん、こんにちはー！」

俺が大声であいさつすると組手の真つ最中だった警察官達が一斉にこちらを見る。渋川さんはくるりとこちらの方を見て分厚い眼鏡をくいつとして確認するとまじめだった顔が和らいでニツと笑った

「おお、誰かと思えば犬塚か！」

「渋川さん、お久しぶりです」

俺はぺこりとお辞儀をする。この人の名前は渋川剛気。年齢75歳にして今も尚警視庁で逮捕術を指導している。渋川流合気柔術の使い手で実戦合気道の達人で、「近代武道の最高峰」とか言われる行ける伝説ともいわれる方だ。東京ドームにある地下闘技場で大健闘したとか誰かが勝手に放った凶悪な囚人と戦ってたとかいろいろ俺の師匠からいろいろ聞かされた。

「おや？ 犬塚の隣にいる子は初めてみるな？」

「…レキです」

レキも俺と同じように渋川さんにお辞儀をする。それを見ていた渋川さんはにやにやと俺の方を見て小指を立てる

「もしかして…犬塚のこれかい？」

「いや、ちよ、もー、渋川さーん」

「?」

俺はにやけながら渋川さんを小突く。悲しいかな、レキは意味を分かってくなくて首を傾げている…

「どうだい、今日も見学した後じっくり組手でもするかな?」

「あいや、今日はちよつと聞きたいことがあつて…」

さすがに警官の前で『武偵殺し』の話をしたら睨まれるよなあ…。とりあえずきよろきよろしてここでは話しにくい雰囲気をだしておく。

「…よつしゃ、わかつた。わしらだけにしよう」

さすがは渋川さん、わかつてらつしゃる。警官の人たちに出てもらつて、柔道場内は俺達だけにしてもらった

「で、話つてのはなんだい?」

「実は…親友の頼みで『武偵殺し』のことを調べてさ」

ぴくりと渋川さんは反応した。まあ武偵殺しの事件は警察がもう一月前にその犯人を逮捕したんだもん。今さらぶり返しても警察の面潰れになり兼ねないだろう

「…犬塚も警察が逮捕した犯人は違うと思うのだね?」

「ええ、不自然というぐらい証拠が揃っていますからね。今逮捕されている人の名前はたしか…」

「神崎かなえ。わしも一度見かけたが、一目でわかるよ。あの人はシロだ。人を殺めるような性じゃない」

「やっぱりわかるんだ。と俺は感心しつつ渋川さんに資料を渡す。一昨日の朝にキングが襲われたという自転車ジャック事件の資料だ。」

「武偵が調べてるチャリジャック事件です。共通点があるとすれば爆弾が仕掛けられたことぐらいですけどね」

「ふうむ、爆弾か…わしはそっちの方は詳しくはないが、警察の方は密かに武偵殺しの事件を調べていたな」

「え?どんなことですか?」

「たしか、可能性事件とか…資料室に詳しく載っている。見るかね?」

「とうかわいしも参加したいと言いつつ渋川さん。うん、あなたが出ちやうとワンパンで終わってしまいます。見るだけでいいですとなんとか宥めて資料室に向かう。さすがは達人、警視庁の上に話すとすんなり入れてもらえるとは。さっそく資料室に入ると、渋川さんはびたりと止まった」

「…犬塚、お前さんもわかるかい?」

「ですね、俺達しか入ってないのに誰かいる気配がもんもんと」

「…右奥に潜んでいます」

レキはドラグノフを構えていつでも撃てるようスタンバっている。渋川さんは右へ、俺は反対方向から隠れている奴を追いこむ。最初は悟られないように気配を消して忍び足で、そして一気に駆けて相手に虚をつかせる。

「うひゃあっ!?!」

「な、理子!?!」

資料室に潜んでいたのはなんと理子でした。なんとというかこのまま気配を消して潜んでいれば逃げれると思っていたのか本棚の後ろで座って伺っていたのか。

「も、もー、びつくりするじゃない!理子、心臓が止まるかと思ったよ!」

「いや、なんででめーがいるんだよ」

理子は探偵科でトップクラスの情報操作、収集に長けているけどさ…

「おやおや、お嬢ちゃんや。気配バレバレでうちに黙って忍び込むなんて無理があるんじゃないかい?」

「うそ、理子誰にもバレてないと思ってたのにー!」

「お前の潜入じゃ渋川さんにはバレバレだ。あと俺も」

「がおーっとほほを膨らませる理子を無視してレキに武装解除の合図を送る。まあ武偵が渋川さんにバレずに潜入するのは無理ゲーだな。さてと改めて聞かなくては

「それで、お前は どうしてここに いるんだ？」

「えーと、キーくん に頼まれたんだよー！ 『武偵殺し』について調べてくれて」

なんだお前もか。確かに 当被害者の キンジも 気にはなる だろうしな。

「だったら 話は 早いな。俺らも 調べてんだ。」

「げっ!?! ノブちゃん とレキュモ?!」

おい、なんだ その嫌 そうな 顔は。こちとら 今週中に Sランク 任務を 済まさなくちや 退学される かもしれねえ なんだぞ

「丁度 いいじゃないか。えーと 資料は…これだ」

洪川さんは 孫をあやす 様に 笑いながら 宥めて 資料を出して きた。『可能性 事件』という のは今 起きた 事件が 前にあつた 事件と 関連性がある かもしれない 事件のこと である。

「警視庁が 『武偵殺し』の 事件と 関連性がある かもしれない っていうのが 一年前に 起きた 『豪華船舶 沈没事故』だ」

一年前の 12月、豪華 客船アンベリール号に 爆弾が 仕掛けられ 爆発を 起こし 沈没した 事件。乗客は 全員 脱出できたが、彼らを 脱出させて 爆弾の 解体をしよう としていた 武偵が 1人 犠牲になった。確か 名前は…

「遠山 金一…キーくんのお兄さんが 亡くなった 事件だね」

「あー、確か そんな 名前だったな。俺、男女？ 女男の イメージし かなかった」

金一さん、結局男なのか女なのかわからないままになっちゃったもんなんー。キンジ、あの時はまいってたよな。あいつを叩くマスゴミがあまりにもうるさいんで俺が消火器を噴射させまくって爆竹と腐った卵を投げまくって追い払ったことしか記憶にない。

「警察の方は一年前に起きたこの事件とこれまでの『武偵殺し』の事件を関連のある物として神崎かなえを取り調べているようだぞ」

「つまるところ、一年前の事件と武偵殺し、それでチャリジャック。関連するものは……」

「……乗り物？」

「おおっ、レキユ鋭いね！」

確かにこれまでの事件を通してみると乗り物に爆弾を仕掛けているところだろう。手口が同じだとすればチャリジャックの犯人は1年前の豪華客船を爆破した野郎だな。

「船ときて、車にバイク、そして自転車とくる。次に仕掛けるとしたら……」

「次はタクシーかバスだったりしてな!!」

渋川さんが笑いながら答える。うん、冗談どころじゃないですよ。マジで起こりそうで恐いんですけど

「よし、レキ。明日から徒歩で登校するぞ」

「……わかりました。一緒に行きましょう」

「いや二人とも用心しすぎだよ!」

「いやー、ノブちゃんのおかげでスムーズに調べることができたよ!」

「今度はアポ取ってから来やがれ」

ばいびーと手を振りながら理子は走って去る。それにしても理子の奴、いつから警視庁に忍び込んでたんだ? 気配を探ればすぐに見つけてたけど、入るまでそんな気配はなかった。まあいいや。あいつがいることでもう一つ聞くことができなかつたし

「渋川さん、もう一つ聞きたい事があります」

「なんじやい? あれか、レキちゃんをおとすテクかね?」

「だから茶化さないでください!」

「?」

悲しいかな、やつぱりレキは分ならず首を傾げている…

『『マッドギア』っていう犯罪組織を調べてんですけど…最近、やたらと強い武器で武装している強盗集団を捕まえるのに手を焼いている事とか聞かれてませんか?』

その話を聞くと渋川さんにはやりと笑って頷く。そして俺に耳打ちして話す。

「…ということじゃ。いいなく、犬塚は。わしも久々に大暴れしたいわい」

「これ以上暴れちゃうと怒られますよ? 渋川さん、今日はありがとうございました」

俺とレキは渋川さんにお辞儀をする

「なに構わんさ。久しぶりに犬塚の顔を見れてよかったわい！お前さんの師匠にもよろしく伝えてくれい！」

じゃ、またと渋川さんは手を振って警視庁へ戻る。…たぶんあの人絶対いつか乱入してきそうな気がする。

＼ツツパルコトガオトコーノノ／

おっと携帯が鳴っている。電話の相手は鳩からだ。

「もしもし、鳩か？」

『はい♪みんな大好き鳩たんっすよー』

「…早かったな。どうだった？」

『うーん、証拠は消されてたんっす。でも、マッドギアについてはマシマシっす!!』

6話 ダイ・ハード（笑）

「と、いうことがこれまでわかったことだ」

『そうか、ご苦労』

『いや、うちがとつても頑張ったっすよー!!』

『……』

『お、おーいレキレキ？回線繋がってるっすか？』

『…大丈夫、聞こえています』

各々下宿と自宅に戻ったその夜、スカイポを通して報告を行っている。

『すいません、この使い方がまだわからなくて』

『全然OKっす!!そのうち慣れるっすよ』

「それで、鳩はどう思うんだ？」

『そうっすねー、爆弾犯は単体っす。ノブちゃんが聞いた神奈川港で不法入国した武装集団を警察が取り逃がした事件の前日にチャリジャックが起きたことから、そうとう準備をしていたとみるっす』

その爆弾犯がマッドギアと関連があるとすれば、次は手を組んで仕掛けてくるだろ

う。準備をしていたのすれば明日にでも事件を起こすに違いない

『…でも、今回の『武偵殺し』の狙いはなんでしようか?』

「確かに気にはなるな。武偵をターゲットにするんなら一人での犯行で十分だ。」

『ましてやマッドギアと手を組むなら武偵の大量殺害? いや、ありえんな』

たくさん殺したいのならバスとか電車で爆弾を仕掛けて爆発させればいい。

『ウチの推測だと、ターゲットは一人だと思っスよ?』

『ほほう、そのところは?』

『去年、ウチのクラスでも一人の生徒を狙うためにクラス全員を巻き込んだ生徒がいたッス。似たようなもんッスよ』

となると…チャリジャックの件から考えて、ターゲットはキンジ、もしくはそれ以外の誰か。一年前の豪華客船沈没事故が関連すればキンジの可能性が高いが…

「まだそう決めるのは早いかもな。手を組んでるマッドギアの方を捕まえばわかる」

『明日、探しますか?』

「ああ。と、言うわけで明日はレキと一緒に学校さぼりまーす。鳩は引き続き情報と証拠集め、ジークは…適当にしててくれ」

『任せろ!…ごろ寝してて待つ!』

いや、ごろ寝して何を待つんですかねえ…。とりあえず解散してひと眠りつこう。銃

と刀のメンテと準備も終わったし明日に備えて寝る！

＊

＼ツツパルコトガオトコーノー／

ああ、五月蠅い。この電話は鳩からか…何時だと思ってるんだ。朝の8時じゃねえか、またモーニングコールかよ。

「どしたー？こちとらねむry」

『ノブちゃん!!起きたツスよ!』

「いや、お前のせいで目が覚めたんだけど?」

『違うツス!!バスジャックツスよ!』

ハア!?さっそく起きたんですかい!?あれか、俺がフラグびんびんに立てたせいとか!?俺はキンジのようにフラグを建築するような輩じゃなかったのに…

「都合がいいな、おい。現状は?」

『バスに爆弾が仕掛けられているのと、ZUIをつけた無人ルノーに追い回されてるツス』

セグウェイの次はルノーか。壊した後、拾えるかな?証拠としてすぐに回収されるだろうし拾うのはあきらめるか

「武偵の応援は来てるか?」

『今のところ、遠山とアリアが向かってるみたいツスよ?』

「あいつらか…キンジがターゲットなら寄ってくる可能性はあるな。…鳩、その任務はSランクか?」

『え、まあ緊急のSランクがたった今ついてツスけど?』

今日は金曜だし…丁度いい。ちやちやつと片づけてやるか。

「鳩、俺の名義で書いといて」

『あ、まさか遠山達から横取りツスか!?せこいつス!』

「勝てればよかろうなのだ!!」

電話を切つてすぐさまジークに電話を掛ける

『ふがほは!!ひつひやいふおいあしたこわ!!(訳:おはよう!!一体どうしたのだ!!)』

「…飯食いながらでもいいや。すぐにヘリを用意してレキを乗せてつてくれ」

『ふおうひやい!!ふおふおへへ、ふあひふおへry(訳:了解した!ところで何の話r
y)』

「うっさい、詳しい事はレキに聞け!」

何言ってるのかわからないので速攻で切る。そして黙々と電話をかけた

『ノブツナさん、どうかしましたか?』

「レキ、今すぐ出れるか?」

キンジ side

*

「アリア!! しっかりしろ!」

状況はまずい。爆弾はバスの機体の下に仕掛けられアリアはその爆弾の解体を試みている。だが、俺がバスの屋根に取り付けられていた通信装置を外していたところ一台の無人ルノーが来てUZIで俺を狙撃。そしてアリアが俺を庇って負傷した。

「アリア、アリア!!」

アリアの身体を揺らすのが氣を失っている。アリアが捨て身で撃ち無人ルノーを落としましたが未だ爆弾は解除されていない。

ブロロロロロロ…

「!!まさかもう一台いたのかよ…」

本当にヤバイ。今度はフェラーリか。今の俺にあれを撃ち落とす腕はないし、バスに乗っている生徒たちも負傷していて応援要請することもできない

「このままじゃあ…」

／ギヤバ／ソ!!アバヨナーミダ!!／

…ん?なんか遠くから特撮ヒーローの曲が聞こえてくるぞ…。目を凝らして視るとフェラーリを追うように何か来ている。あれは…セグウェイ?そしてそれを運転しているのは…

「ノブツナ!」

武偵庁指定の防弾制服を着ないでCIRASというボディーアーマーを着て、左腰に刀を提げ、大音量で曲を流しながらこちらに向かっている。あれ、ノブツナが腰のポーチから何か取り出したぞ?あれは…M24型柄付手榴弾!?さっそくフェラーリに向かつて投げやがった!

「みんな、伏せろ!!」

すぐさまバスの中にいるみんなに叫ぶ。その後、手榴弾はフェラーリに当たり爆発を起こす。爆風が通り過ぎ、アリアを守りながらしゃがんでなんとか事なきを得る。顔を上げて様子を見ると、ノブツナはセグウェイを加速させこちらに近づいてくる。

「よいしょーっ!!」

セグウェイを踏み台にして大きくジャンプをし、俺がいるところまで着地した。

「おいおい、なんだその顔は?」

「ノブツナ…助かった」

「助かった?バカヤロウ、運が良かったただけだ。UZIとか普通殺傷力が高いからミン

チよりひでえことになってんだぞ？ポソコツでよかったな。」

ノブツナは俺とバスに乗っている生徒たちにゲラゲラとゲスな顔で笑いながら言う。

「で、爆弾は？」

「バスの下に仕掛けられている。アリアが解除に試みてたんだが……」

俺はアリアが負傷する経緯まで話した。ノブツナはため息をついて呆れるように俺をみた

「そういう時は先にアリアに伝えとけ。独断の行動は時に死にも繋がんだぞ？」

「……すまない」

「じゃあねえ……ここいらはレキに任せるか」

そうつぶやいたノブツナは無線機を取り出した

「レキ、行けるか？」

『……ノブツナさん、いつでも行けます』

通信が終えてトンネルを抜けると、ヘリが飛んでいる音が聞こえた。大型ヘリがレイ
ンボーブリッジの横を飛行している。ドアが開いており、そこからドラグノフを構えて
狙いを定めているスナイパーの姿が……

「あれは……レキ？」

レキサイド

『それじゃあ頼むわー』

ノブツナさんの軽い感じがするけれど私を信頼してくれる声を聞く。私は何も言わず無線を切り、狙いを定める

標的はバスの下に取り付けられている爆弾：見つけた。照準を更に絞り込み狙いを定める

「私は――発の銃弾」

銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない――

――ただ、目標に向かって飛ぶだけ。

引き金を引かれ、銃弾は飛ぶ。風のように速く飛ぶ銃弾は、バスの下にしかえられた爆弾の留め金を貫通。爆弾は転がってそのまま海の方へ落ちていく。そして、水中で爆発を起こし大きな水柱を立てた

「…任務、完了」

無線で伝えてスコープで覗くと、ノブツナさんはいつものような笑顔で私に手を振る。

ノブツナさんの笑顔を見ると時折感じるこの感覚：何なのだろうか…

『サンキュー！じゃあ次に備えてくれ』

「わかりました。…ジークさん、お願いします」

「合点承知の助!!」

キンジ side

大きな水柱が起きて雨のように海水が降りかかる。気を失っているアリアにも当たり、彼女についている血を流してくれる

「…」

なんとか爆弾を解除し、バスに乗っている皆を助けることはできた。…だが、俺とアリアの初めての事件の結果としては最悪だ。結局、俺は何もできないまま、アリアを傷つけてしまった…

「おい、武藤！なにぼさつとバスを止めてやがる！走らせろ!!」

ノブツナが運転席にいる武藤に怒号を飛ばすのが見えた。

「なんでだ、ノブツナ？もう爆弾は取り除いたし、大丈夫だろ？」

「武藤の言う通りだ。やることは終わったんだ」

「バカ、アレが見えてねえのか？」

ノブツナが指さす方には黒のハイエースバンが3台近づいてきている。ノブツナは

LRグリーズリーを抜きリロードをした後、バスの中にいる生徒に指示を出す

「いいか！死にたくない奴はしゃがんで頭と上半身を撃ち抜かれんようにしとけよ！」

そうしているうちに3台のバンは窓からアサルトライフルを覗かせ乱射してきた

「あぶないっ!？」

俺はアリアを守りながらとっさに身をかがめる。

「HK416か。なかなかいいもん持ってんじやんかよ！」

ノブツナはにやけながら狙いを定めて拳銃を撃つ。銃弾はバンのタイヤに当たり、バンはピンして転倒した。ノブツナはすぐさまリロードして2台目のバンも同じように撃った。3台目のバンはしつこく乱射してくるのでノブツナは身をかがむ

「しつかり目を隠して耳塞いで、口を開けとけよー!!」

ノブツナはそう言つてバンに向かってスタングレネードを投げた。道路に大きくバウンドしたスタングレネードは閃光と爆音を発した。バンは大きく左右に揺れて柱に衝突して止まった。

「さてと、キンジ。バスの方は頼むわ」

「え？ちよ、ノブツナ、どうするんだ!？」

「殿は任せとけ。お前は頑張った、けが人をちゃんと手当しておけよ？」

ニツと笑ったノブツナはそのままバスから飛び降りた。転がってうまく着地。あい

つは振り返らず俺に手を振る。…ほんとに無茶苦茶するやつだ

ノブツナside

さて、餌につられて本当にやってきた連中のお顔を拝見する前にもう一度確認しよう。残数6発、予備カートリッジ3つ、スタグレ4つと俺の愛刀『八房』、まあ十分かな？

転倒した車2台、衝突した車1台から、幾人のチンピラ共がドアを開けて出てくる。鳩が調べたリストに載っている顔とほとんど一致する。

「ようこそ、マッドギアの皆さん。俺と一緒にドンパチしましょ♪」

7話 ひもきり

「リストに載ってる奴等ばかり…これは儲けだ」

出てきた面子はもう覚えた。ブレットにダグにジェイク、ツーピー、アンドレにアンドレの弟、アンドレの兄、アンドレの父、アンドレの祖父、アンドレの伯父…つてアンドレ多すぎだろ!?

「…おう、兄ちゃんや。まさかてめえ一人で俺達を相手しようと思ってるんじゃねえよな？」

おい言わせんなよ。バスから一人降りてお前らの前に立ってんだぞ?ベたすぎるシチュエーションだね。言っても無駄だろうから、黙ってへつらいの笑みで返す。チンピラ共はあざ笑う顔が一変して睨み付けさっそくHK416を構える。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、クソガキイイっ!!」

連中は乱射してきた。突然話は変えるけど、豚に真珠、猫に小判という諺はご存知だろうか?いくら価値があるものでも価値を分らない者に与えても意味はない事。いくら性能がいい銃をチンピラ共にあけても戦闘力は上がるけども、それ以上の相手に挑むには無駄である。

蛇行するように駆けて飛んでくる銃弾の間を縫うように躲す。L A Rグリズリーで相手の肩、腕、足を撃ち抜く。一番威力の低い武偵弾だけでもその中でもマグナム系だからそうとう痛いので相手はのた打ち回る。命あつての物种、死にはしねえし後で処置してやつからそこで寝てなさい。

「あと16」

「このやろおおおっ!!」

すかさず狙つてくるはアンドレファミリー。あそこでごちやごちやされてはなあ：かっこうの的なんですけど。残りのスタングレネードの全てピンを引き抜き一気に投げつけバンの後ろへ隠れる。

／うわああああつ!?!／目が、目があああつ!?!／バルスつ!?!／

「あと10」

はい、アンドレファミリー終わり。そこでゴロゴロしてなさい。

「うてうてうてえええつ!!」

あぶねつ?!連中もしつけえな。あ、さっきのスタグレ全部使うんじやなかった。テハペロ☆…じゃねえよ!面倒くさいなあ、突撃しますか

「ひでぶつ!?!」

「あべしつ!?!」

「な、なんだ!?! 狙撃!?!」

「一体どこから……」

「あ、あの向こうに飛んでるへりか!?!」

あと9、8。レキ、ナイスアシスト。遠く離れたところで飛んでるへりからの狙撃に連中は驚いている。聞いて驚け、俺のパートナーは学園最強の天才の狙撃手、『殺傷可能範囲（キリングレンジ）』は2051mだ。

『ノブツナさん、突撃してください』

「ありがとうございます。ぱぱっと片付けるぜ」

拳銃をホルスターに納め、愛刀『八房』を引き抜き駆ける。距離を詰めればこっちのモノ。相手の銃を斬り、横腹を峰打ち。ナイフに取り換えて襲ってくる奴の攻撃を躲して背を峰打ち。もう一人と峰打ちして乱射してくる奴には倒れている奴のナイフを拾って膝小僧を狙って投擲。呻いてる隙に回し蹴りをお見舞い。

「あと4」

刀を投擲。相手の股間を掠め相手がちびびっている隙に踵落とし、あと3。アサルトを撃つ寸前に間合いを詰めて腹パン、あと2。めんどい、LARグリーブリーで肩、足を撃つて寝かす

「あと1」

俺はグリズリーをホルスターにしまふ。あと一人、俺めがけて撃ってくるけど、もう詰み。レキが狙撃でアサルトを撃ち落とし、俺は相手に顔面パンチ。チェックメイトです

『標的、鎮圧です』

「ナイスアシスト、助かったぜ。後は片づけておくから戻ってくれ」

俺は背伸びして地面に突き刺さっている愛刀を引っこ抜いて鞘に納める。さてと、後他の武偵が駆けつけて後片付けしてくれるまでここで待つておこうか。

「なかなかやるじゃねえか」

ふと凶太い声が聞こえたので振り返る前に、殺気がしたのでしゃがむ！あぶない、筋肉が結構ついたがたいのいい太い腕が頭上を掠める。身を翻して何うと目の前が迫っていた。痛つてえパンチだな、両手で防いで下がる

『『あいつ』の言つてた通りだ。面白い奴が本当にいやがったぜ』

金髪でグラサンをかけたレゲエ風な筋肉質の大男。リストには…たしかダムドとかいう男だったかな？

「隠れてみてるたあ随分といい身分で。」

「はっ、このダムド様をそこらへんの雑魚と一緒にしないでもらおうか！」

見た目に反して速い拳を打ってくる。しまったな、レキを帰らすんじゃないか。ま

いた種だ、責任もって片付けておこう。んで、頑張ったとレキに撫でてもらう
「そらそらあ！ぼさつとしてんじゃねえぜ!!」

そんなことを考えている間にダムドの素早いフックが体に当たる。そして力いっばい込めたパンチを叩きこまれた。俺は吹っ飛ばされてバンに叩き込まれる。

「いたたた…思ったほどやるなあ」

ダムドは大声で笑い、近くに堕ちていたHK416を両手で握りしめてバキリと二つに折った

「はっはっは!!どうだ、このスピード、このパワー!!お前ら武偵なんぞ敵じゃねえ!」

確かに、ダムドは速くて、力強い。…でも、ただそれだけでそれ以上ではない。俺は見てきた…ホツキョクグマを素手で惨殺する男、餌に餓えた虎を空手技で屠殺した男…自分が強いと豪語してきた奴を軽々しく葬る男たちの強さを。そんなん見てたらこんな奴は…低レベルだ。

「…敵じゃないのは、お前の方だ。」

ダムド side

「ほぎきやがれええっ!!」

生意気を言うガキだ。歴戦のダムド様を舐めた様な事を言いやがって。他の武偵が

来る前にこのガキをぶちのめして戻ろう。俺はこのガキの顔面に向けてストレートの拳を見舞った。だが、このガキは軽々と躲しやがった。

カウンターで奴の手刀が目の前に迫る。顔を横へそらして避けてもう一発：
プツン

なんだ今のは？首筋に痛みを感じた瞬間：俺の右目が真つ暗になって見えなくなつた

「な、なんだ!?み、右目が見えねえ!?右目が真つ暗で何も見えねえ!?」

そして首から激痛が後から来る。手を当ててみるとそこから血が流れている。首に親指が入るほどの穴が開いてやがる!?

「て、てめえ!?一体何をした!？」

「それぐらいの痛みで喚くな」

真つ暗な右側から奴の声が聞こえる。右へ右へと向くがあのガキの姿が見えない。

「自業自得さ。レイプ、麻薬、暴力、殺害、積もるほどの悪行を重ねたんだ。右目が見えなくなっただけでありがたく思えや」

それと同時に右側の顎に強烈な激痛が走る。脳が揺れる感覚がする。気が付けば目の前に地面が近づいてきている。：いや、俺が倒れているところか。目の前が真つ暗に

「ま、右目の方は知り合いの医者に頼むっからよ、そこでおねんねしとけ」

＊

ノブツナ side

「いやー、なんとかか？バスジャック阻止して武装集団を捕えたんですよー？」

「確かにな…一応Sランクの任務も熟したし、良しとしよう」

「ですよね、ですよね？だけど…」

はい、今俺はいるところは武偵校の事務室。近くには蘭豹先生の親友、綴梅子先生がいらっしやる。んで、俺は机に座って目の前に置かれている白紙を目の当たりにしています

「始末書を書くことはないんじゃないですか？」

「確かにバスジャックを阻止して武装集団を捕えた…でも、レインボーブリッジを封鎖してどうするー！」

あ、そうだった。ドンパチして彼方此方壊しちゃったからレインボーブリッジは交通不可能になって通行に大きな痛手を与えちゃったんだ（笑）

二十分後

「おい、20分で書いたのが『ゴメンヌ』だけかよ」

「いやー、その一言しか思い浮かばせんね」

綴先生はため息をついて座る。とういかその一言しか言えねえんだけど

「わかったわかった。あとはあたしがやっつくからよ。どうせ『ちゅどっ』で逃げるんだろ？ 部屋中を煙幕だらけにすんのは勘弁だ」

「さっすが綴先生！ わかつてらっしやる！」

俺は一礼して颯爽と部屋を出る。あーよかった、ちゅどる準備してたし怒られる覚悟でいたから安心したぜ。さてと、そそくさと携帯を取り出し電話を掛ける

『はい、こちらら鳩ちゃんっス!!』

「よう、証拠の方はどうだった？」

『鑑識科が全部回収したみたいっスね。でもそれといった手がかりは見つけられなかったようっス」

まあそうなるわな。犯人はよほどの完璧主義のようだ。

『でも、うち面白いものを見つけたっスよ？』

「おっ？ どんなの見つけたんだ？」

『ハイエースバンは爆弾魔が用意したものだどわかったっス』

「そう判断したのはなんだ？」

『一台のハイエースバンの運転席に一本だけ、金髪の髪の毛が落ちてたっス』

「おいおい、バンに乗ってたのはチンピラ共だろ？ 金髪の奴なんて一人や二人いたんだ

「ぜ？」

『ふっふっふ、聞いて驚けツス！その髪の毛、DNAで調べたら女性のものだったんっス
!!』

女性：？今日戦ったチンピラ共は全員男だったな。リストには女性は載っていないし、となると武偵殺しの犯人は女性、しかも金髪。そうだとすれば、神崎かなえがクロではなくなる

「よっしや、鳩。次は捕まえたチンピラ共を尋問にかけてくれ。連中の頭を掴むぞ」

『ラジャーツス!!』

そのまま携帯を切る。今日の晩飯何しようか考えながら校舎を出ると校門でレキが待っていたのを見かけた

「ノブツナさん、ご苦労様です」

「待たせたな。：：：アリアの奴はどうだった？」

「額に傷がついた以外大きな怪我もなく無事の様子です」

「そっかー、まあ聞きこむのは後にすっか」

「それと：：：まだ武装犯が残っていたのならちゃんと私を呼んでください」

：：：あれ？レキさん、なんか怒ってます？無表情でよくわからないんだが：

「あなたは今、私と手を組んでいます。それは自覚するように」

「ア……めんぬ」

???
side

『話が違うではないか』

電話がかかってきたからかけてみると第一声がこれ。嫌になるよねー

『貴様は『オルメス』を狙うよう我々に指示した。しかもオルメスと組んでいる奴は大したことはないと言っていた』

「……」

『だが、現状は違った。あんな男がいたのは聞いていないぞ。おかげでダムドや我が同志たちがやられた』

責任を取ってことかなー?……ばかばかしくて反吐が出る

「……バカじゃないの?組織が壊滅され残党になったあんた達は今、私の部下なんだよ?多少の被害で喚くんじやないよ」

『……貴様、我らマッドギアを当て馬に使うつもりか?』

「当て馬?面白いこと言うのね。所謂私の兵士、それふらい覚悟がないとイ・ウーには入れないよ?」

『……アルセーヌ。我々マッドギアを甘く見るなよ?』

そいつはそう言い残してぶつりと回線を切る。そんなこと言われてもあんた達のが知れてるよ

「…それにしてもノブちゃん、やっぱりえげつないな。『紐切り』まで使えるなんてやっかいだわ」

紐切り…指を皮膚の下に貫通させ、血管・リンパ節・神経などを直接断つというえげつない技。相手の首筋に指を突き込み、視神経をつかさどる神経を切断させ見えなくさせた。そんな技を使える人物は1人か2人ぐらいだけど、まさかノブちゃんも使えるなんて…ますます厄介な奴だ

「ま、そのためにマッドギアを雇ったんだけどねー」

ノブちゃんはマッドギアに任せて私は目的を果たすために計画を実行する。

8話 踊る羽田線

チンピラAさん side

「うう……」

痛みに目が覚める。ここはどこだ？暗くて蒸し暑い部屋だ。身体を動かすが動けない。歯科治療の椅子に手錠や足かせ、鎖が巻き付かれています。

「おはようございませすッス」

部屋がわずかに照らされる。椅子のすぐそばにふわりとした金髪の少女が立ってこちらを見ていた。ぎざぎざの牙がちらつく。

「な、なんだてめえは……」

「はい、今からあなたに尋問するッス」

その少女は楽しそうに笑いながらそばに焚いたお香を置く。このきついニオイ、まるで腐った海のようなだ。

「正直に答えてくれれば助けてあげるッスよ？」

「……はっ、面白いことを言うぜ。」

無駄だ。俺達がそう簡単にペラペラしゃべると思うなよ？

「知ってるぞ？武偵は犯人を殺しちゃいけないんだってな。どんな尋問をしたってむだや」

「…ふーん」

そんなことも気にせず少女は両手にゴム手袋をはめてメスとニツパーを取り出す。そしてゲスな笑みでこちらを見た

「貴方の言う通りツス。武偵は殺しちゃいけない決まり…でも、死ななきや構わないツスよ？」

ゾクリ、自分の背筋に冷や汗が垂れた。やばい…こいつは脅しじゃあない、ガチだ…。身体をふるわして暴れようとするが身体がピクリとも動かない

「あ、このお香、ウチの特性のお香ツス。意識はあるけども動かすこともできず、痛覚もさほどないツス。なのでしゃべってくれるまで拷問にかけるツスよ」

「な、なにをするんだ…っ!？」

少女の笑みから恐怖を感じてしまった。少女は絵に描いたようなギザギザの歯を見せて笑う。

「去勢手術って知ってるツスか？」

ノブツナ side

「ぬー…次の犯行がわからんなあ…」

あれから2日経つ。バスジャック事件以降、さっぱりと爆弾犯の事件はなくなつてしまつた。マッドギアが関連してそんな件もなく、ただ暇な時間が過ぎるばかりだ。

「後は鳩からの情報を待つだけか…」

部屋でごろごろすんのも飽きた。コーヒを淹れて啜りながらパソコンを開いて情報をまとめる。爆弾犯は女性、一年前の豪華客船沈没事故と関連、仕掛けるところは乗り物、ターゲットはキンジ…

「…いや、キンジがタゲなのはおかしいな」

改めて考えると少々おかしい。言つちや悪いがあいつは腑抜けている。女絡みになると強いが…武装組織などに狙われるほどでもねえ。一年前の豪華客船沈没事故で死亡したあいつの兄、遠山金一と関連性があるかもしれないからピックアップしてたが、それ自体がフェイクの可能性がでてきた。

「と、なるとターゲットは別。本当の狙いはなんだろうな…」

そんなことを考えている間に携帯が鳴る。鳩か、いいタイミングだ。

「ずいぶんと長かつたな」

『もー、ウチの苦勞を知らないからそんなこと言えるツス！全員あつさりゲロツた後、潜入捜査して、情報操作、証拠採取そして整理するなどして結構かつたんつすよ！』

電話越しじゃあたぶんものつそい怒ってらっしやる。まあ俺推理すんの得意じゃないし？突撃バカだし？

「で、どうだった？」

『残りのマッドギアの残党のアジトに行ってみたけどもぬけの殻ツス。何処かへ移動したツスね。』

「殴り込みはできないか…後は？」

アジトへ殴り込みしてトリガーハッピーしたかったけどなー、残念だ

『幻覚を使つての尋問は大成功ツス！爆弾犯が誰かとは最後まで言わなかったけど爆弾犯が狙っている人物は即ゲロったツスよ』

鳩は相手に幻覚や暗示をかけるのが得意な元暗殺者だからな。奴さん、そうとう嫌な幻覚でも見せられたんだろう…

「そのターゲットは？」

『オルメス。そう言つてたツスよー』

…オルメス、ねえ。俺でもわかるわ。あいつが祖国に帰るとか教室で話題だったようだし、時間も場所も明かしていた。だとしたら…急がないとまずいな

「ありがとうよ。鳩、悪いけどもうひと頑張りできるか？」

『やっぱりノブちゃん人使い荒いつす…一応、準備はできてるツスよ』

プンスカと鳩は言いながら電話を切る。さてと、俺は黙々と支度をすませた後、電話をかける。

キンジ side

もし俺の推理が正しければ…アリアが危ない！

理子のおかげでヒステリアモードになり、頭の中で整理ができた。過去の武偵殺し、兄さんの事件、そしてチャリジャックやバスジャック…次に狙うとすれば飛行機、アリアが乗る7時のチャーター便だ。

「急がないと…」

今から乗り換えで走っていければぎりぎり間に合うか…いや、武藤に車を借りていくか…

＼カメーンライダーブラアツ！！／

…特撮ヒーローの曲を大音量で垂れ流しながら道路を走行するバカはたった一人しかいない。音が聞こえる方を見ればノブツナが大型バイク スズキ H A Y A B U S A (隼)に乗って俺の近くに止まった。

「よっ、探したぜキンジ。乗れよ」

なんで俺を探してたのだろうか。聞く前にヘルメットを投げ渡される。

「羽田空港まで行きたいんだろ？連れてってやるよ」

「!?どうしてそれを…」

「お前、アリアと組んで『武偵殺し』の真犯人を追ってんだってな。やるなら最後まで芯を通せ」

ノブツナはニシシと笑いながら俺を見る。…こいつの言う通りだ。俺は頷いてヘルメットを被り、ノブツナの後ろに乗る

「いいか、国際線までぶつとばしていくからな。放すんじゃないぞー!」

そういつた途端、ノブツナはバイクを猛スピードで飛ばす。赤信号、遮断機が下りる線路、車が行き交う交差点、高速のインターを全部無視して強引に突っ切る。

「の、ノブツナ!?飛ばしすぎじゃないのか!?!」

「バーロー、こちとら急いでんじやい!神風だこらあ!!」

ああ、やつぱり乗るんじゃないやなかった…。警察沙汰どころではない、この事件終わったら絶対に先生たちに怒られる。そんな時、バイクに搭載していたのか無線機がかかる

『こちら、ジーク!!応答せよ、オバカ』

「おバカじゃなくてオーバーだ、オーバー」

『H A H A H A、そうだったなオーバードオーバー』

「いやそういうのじゃなくてオーバーな!?!オーバー」

『あ、これが所謂オーバーリアクション?』

「やかましいわ!」

なんでこんな時にこいつらは変なコントをしているのか。：突っ込むのはやめてお
こう

「で、どうなんだ?」

『指示通り、湾岸線を封鎖はすでに完了した!もちろん我が社ハワコネの力でな!!』

「ナイス。さすがはハワコネ」

は!?首都高速湾岸線を封鎖しただつて!?なにしてんだこいつらは。さらに別の無線
がつかがる

『犬塚、警察に頼んで国道の交通規制をやっておいたぞ!』

「いやー、渋川さん、助かります!!」

渋川さんつて誰!?というより警察使つて道路規制するとか本当に何考えてんだ!?

「気になるか、キンジ?」

「いやというほど気になるんだが」

「お前の邪魔をしようとしている輩をふるいにかけて誘き寄せているのさ」

「俺の邪魔…?」

そんなやついたのか?と問いかけようとした時、俺達の両サイドに黒いハイエースバ

ンが2台並行する様に走ってきた。窓が開いた途端、HK416の銃口が覗かす。

「なっ!?!」

「しっかりしがみつけよおっ!!」

乱射される寸前にノブツナがアクセルを強く握って回し猛スピードで切り抜けた。2台のバンは俺達を追いかけけるようにスピードを上げる

「何だあいつ等は!?!」

「えーと、お前とアリアをぶちのめす武偵殺しの下っ端…だったけど、今はそうじゃなさそうだな」

ノブツナはミラーで様子を見て、すぐさま腰のポーチからM24型柄付手榴弾を取り出す。何事かと気になって後ろを振り向くと、一台のハイエースバンの屋根が開いて、そこからRPG-7を撃とうとする男の姿が見えた

「マジかよっ…!!」

RPG-7が発射される寸前にノブツナは手榴弾を投げる。RPG-7が放たれて俺達の所へ飛んでくる途中に手榴弾は爆発を起こす。爆風によって軌道が反れ、RPG-7は京浜運河の方へ落ちていき大きな水柱を上げて爆発を起こす。

「ほ、本当に危なかった…」

「どうやら武偵殺しと仲間割れを起こしたようだね。連中、飛行機ごとぶっ飛ばす様子

だ」

仲間割れって…しかも連中もアリアを狙っているのか。このままじゃ追われるままで埒が明かない

「レキ、2台ボツシュート」

ノブツナが無線でそう伝えた瞬間、俺達を追いかけている2台のハイエースバンのタイヤが狙撃されスピンを起こす。そして次々に玉突き事故を起こし追いかけてくるバンは止まった。

「レキ、ナイス」

「ノブツナ、レキも来ているのか？」

ノブツナはバイクを止めて向こうを指をさす。はるか向こうに警察の装甲車が2、3台横にして止まっておりの車の陰から顔を覗かせドラッグノフで狙いを定めていた

『ノブツナさん、サポートをしますので対戦車擲弾の方をお願いします。』

「あいよー」

ノブツナはそう言ってバイクから降りた。LARグリスリーを引き抜き、リロードをする。腰にはノブツナの愛刀『八房』が提げている

「キンジ、なにしてんだ。早く行け」

「え？…まさかあれをレキと二人で止めるのか!？」

ハイエースバンから軍服、特殊部隊のような武装をした連中が出てきている。後方のバンから次々に降りてくる連中を合わせてざっと50人…無茶だ

「気にすんなって。そんなことより…お前がアリアの所に行かねえとこの事件、終わんないぞぞ?」

「しかし…」

「キンジ、武偵何条だっけ?仲間を信じろって。お前がこの事件に決着をつけるって信じてる、だから俺を信じろ」

「…」

「自分の信じた道を突き進め。…それでアリアを助けに行つてこい」

「ノブツナ…死ぬんじゃねえぞ?」

「バーロー、俺を誰だと思つてやがる」

俺とノブツナは笑いあつて拳を合わせる。拳が離れた途端、ノブツナは敵陣に駆け込み、俺はバイクを走らせた。…ノブツナ、レキ、すまない。ありがとう

9話 激闘

遠くなるバイクの姿を確認する。あっちの方はキンジに任しても大丈夫そうだ。俺があとやることとしたら、こいつらを倒して、何人たりとも空港には行かせなことだな
「それじゃあやってやろうかねー！」

相手はカーキ色の防弾服に防弾メット、HK416を持ってこちらに突撃…この人がガチだし。どこのアーミーですかつての。圧倒的な数の差、この戦場は滾るな。

「いくぞおらあああつ！！」

LARグリスリーで狙いを定めて撃つ。全発フルに使い切つて数人倒す。ざつと8人ぐらいか…補充分の弾は残り3ダース分、足りないぐらいかもしれんが十分だ。飛んでくる弾丸を身を屈んで躲し、転がって横転しているバンの陰に隠れる。

「前のチンピラ共より少々手ごわいな…」

弾丸を補充しスタングレネードのピンを抜き、アンダースローで敵陣に向けて投げる。閃光と爆音が巻き起こる数秒後に飛び出して駆ける。連中の方は前線に立っていた数人を盾にしてお構いなしに乱射してきているか。俺は腰の愛刀『八房』を抜く

「今宵の愛刀『八房』は一味違うぜ！」

これ、言ってみたかったんだ。弾丸を躲しながら体に当たりそうなどころは刀で切り落とす。一発ならまだわかるが数百発もの弾丸をすんごい早さで切り落として駆けているから奴さん物凄く驚いているんだよね

「なっ?! 弾を斬っているだっ!」

「あいつ、化け物か!」

「怯むな、撃ち続けろ!!」

怯まずに放たれる弾丸の雨を避けて懐へ迫る。相手の銃を真つ二つに斬り、一人、二人、三人と息継ぎをしないまま間を縫うように駆け、首筋、脇腹、背、腰を峰打ちで叩きのめす。通り過ぎた後はバタバタと倒れていく。

「安心せい、峰打ちじゃ…なんちゃっ」

『て』といい終える隙もくれずに新手による乱射が入る。そこは攻撃したらいけないルールでしょ! 俺は慌ててバンの陰に隠れる

「いててて…背中に鉄板しこんでよかった」

防弾ジャケットを脱ぎ見事にへこんだ分厚い鉄板を抜き取る。反撃を与え中の如くしつこく撃ってくる。奴さん、容赦なく乱射してくるね。またスタングレネードを投げた後に突撃するか。

— チュインツ

「ぎやつ!？」

—— チュインツ

「ぐぎやつ!？」

おつと？ 死角に潜んでいる奴さんが次々と撃たれていくぞ？ 狼狽している様子がよくみえる

「な、なんだ今のは!？」

「狙撃か!? ど、どこから撃ってきた!？」

『ノブツナさん、気を抜きすぎです』

レキが無線で俺に注意して引き金を引く。はい、見事に陰に隠れている奴を一人当てる、ナイスショット。

直線状からの狙撃でどうやって車の陰に隠れている奴を射抜くか。答えは跳弾。レキが撃つのは『跳弾狙撃（エル・スナイプ）』と言って、障害物などを利用して跳弾させて狙撃する技だ。また複数の障害物を經由して跳弾させて狙撃する『二重跳弾狙撃（エル・エル）』もレキは撃てる。

「レキ、サンキュー。助かったぜ」

『ノブツナさん、そのまま突撃してください』

レキの跳弾による多方向からの狙撃に狼狽える隙に一気に突撃する。数人叩き伏せ、

まだこちらにやってくる連中には刀を地面に突き刺し奴さんが落としたHK416を拾い上げ足と手を狙い撃つ。

『ノブツナさん、RPG来ます』

レキからの伝言で前方を見る。あからさまに前に立ってRPG―7を構えてこちらを狙って撃ってきた。地面に突き刺した愛刀を引き抜き、飛んでくる弾頭に集中する。刀身を横にして薙ぐ。弾頭をなぞる様に沿わせ、微妙に押しつけていき機動をずらしていせる。当たると爆発するところが過ぎれば力を込めて振る

キンツ

乾いた金属音とともにRPG―7の弾頭の軌道を右上へ大きくずらして躲す。当たることなく弾の軌道がはずれたことに相手は驚愕する。装填させる隙は与えない

「レキ、シユート」

『了解』

バンに当たって跳弾する音が横から聞こえそれと同時にRPG―7を持つた野郎は倒れる。さっきの技、すつごく集中力があるんだよねー。だが愚痴をこぼす暇はない、まだ敵はいる。俺はそのまま駆けて刀を振るう。

「どうした、こんなもんか!」

――何十分刀を振るつたろうか、すでにこの道路には横転したバン、散らばる葉莖、

数々の弾痕、そして倒れているマッドギアの連中。さしずめ3/4は片づけただろう。もうそろそろ終わるかなと思っていた時だ。俺の方に円形の手榴弾が投げ込まれてきた。愛刀とLARグリーリーの弾丸で手榴弾を弾き、周りが爆発する。その刹那、爆炎を突き抜けて数本のナイフが飛んできた。ギョツとした俺は顔を逸らして避けた。

「あつぶねー…」

「ほほう、それも巧くないですか」

スタツと横転したバンを飛び越えて出てきたのは先ほどまでの連中より筋肉でカキ色の軍服と赤いベレー帽、顔には斜めに切り傷がついた屈強な男だ。軍服には手榴弾を何個か着け、片手には黒色のロッドを握っている

「見た感じ、あんたがマッドギアの残党を束ねる親玉だな？」

「いかにも、吾輩の名は『ロレント』。今のマッドギアを束ねている。」

ロレントは倒れている自分の部下たちを見る。悔しそう、いやむしろ今の状況を満足しているのか？

「…今は壊滅状態だがな。憎らしいを通り越して貴様たちは称賛に価する」

「そうかい、それでどうすんだ？」

「貴様の戦い方を見ると…よほど戦闘に餓えているらしい。どうだ？殺しを禁じられている武偵なぞ離れて我がマッドギアに来てみないか？」

…これはあれか、アイドルなんちやらみたいなスカウトってやつか。でもこれに至っては愚問だろ

「生憎、潰れかかっている組織を立ちなおす気力はねえよ。それに…レキっていう先物がいんだ。一昨日来な」

「ふっ、断ると思っていた！貴様らを打ちのめし、連れ帰って調教してやろう！」

ロレントはロッドを構えて迫る。調教とか、そんな趣味はないんだけどと言っている場合ではない。気迫で分かる、生半可でやつたらこちらが死ぬかもしれない。愛刀を振るいロッドとぶつかり火花が散る。ロッドをバトンのように回して次は下段から打ち上げてきた

「そいつ!?!」

ロッドの攻撃を躲して上段から叩き込む。ロレントは後転して避けると同時に目の前に手榴弾を投げてきた。やべえ、すでにピンがとれて数秒経ったやつじゃん!?爆発す
r…

— チュインツ

跳弾して飛んできた弾丸に弾かれて手榴弾は遠くへ飛ばされ爆発を起こす。

『ノブツナさん、油断しすぎです』

「わるい…気を抜いてた」

レキは跳弾狙撃でロレントを狙撃する。跳弾した弾を見切っているのかロレントは軽く躲していく

「どこで跳弾したか音さえ聞こえればすぐにわかる！」

「…これはマジで厄介だな」

俺は軽く苦笑いをするがそんなことも気にせずロレントは向こうの方を見ていた

「…ふむ、やはり狙撃は面倒だ」

あいつ、何をする気だ…？やられる前にやる！駆けて刀を振るう。ロレントは攻撃することなく後ろ後ろへと下がっていく。LARグリーズリーで狙い撃つがそれもちよこまかと後ろへと避けていく

「このっ…！」

もう一発撃ち込んだ時、ロレントはにやりとして後ろへ跳躍し横転しているバンの上に乗るや否や窓を割って何かを取り出す。あれは…カールグスタフ!?ということはっ！急いで無線を飛ばす

「レキ！走れ!!」

「もう遅い!!」

バスンと砲弾が放たれた音がして弾頭が遙か向こう、レキが狙撃していた場所へ飛び、爆発を巻き起こす。無線からはノイズしか聞こえない。

「……っ」

「ふん、その程度で狼狽えるのならまだまだ小童よ」

俺が狼狽えているように見えたのか余裕かまして俺の方を見て不敵に笑う。

「…おっさん、何か勘違いしてねえか？」

「…っ」

足を軽く屈んで力を込める。最大限までに縮めたバネを放して飛ばすように目一杯に跳躍してロレントの目の前に迫った

「っ!?!はやつ…」

「俺は今プッツンしてんだぜえっ!!」

刀で叩き込む方がよかった。ブチギレてるとついつい殴ってしまう。左拳で鳩尾に叩き込む。前へ仰け反らせ二キックで顔面へ一発。刀で叩き込みを入れるがロレントは大きく下がって俺の方を睨む

「このっ、一等兵があああっ!!」

ロレントの野郎はありったけの手榴弾を俺へ投げ込む。バウンドしたり、転がったり、宙へ投げってきたりと様々だが、激おこポンポン丸の俺には

「…無駄」

ゆらりと前へ倒れかけるように体重を入れてそして駆け出す。ドンドンと横で爆発

しているが爆炎より速く、そしてロレントに迫った

「ぬううっ!!」

ロッドを振るってきたが、それを真つ二つに斬り、峰を向けフルスイングで叩きいれた。

「おおおらああっ!!」

プロ野球選手がホームランを打ち込むようにぶつ飛ばす。少し遠くへ飛ばされたロレントはコンクリに大の字になって倒れた。相手が動かさず気を失っているのを確認し、愛刀を鞘へ納める。パチパチと燃える炎以外、音は静寂だ。

「そんなことより、レキを探さねえと…無事でいてくれよ!」

戦闘を終了させ、レキがいるであろうその先へ向かう…

「もらったぞ!」

「!!」

一瞬の気が大きな隙となった。地面にワイヤーが仕掛けられており、足をとられその勢いでワイヤーが首に絡まる。

「ハアツ!!」

ワイヤーを持ったロレントは高く飛び上がり、柱に取り付けたフックにワイヤーを掛ける。首に巻き付いたワイヤーを必死に解こうとするが堅く取れない。こうしている

うちにワイヤーに引つ張られ宙吊り状態に。冷静に解説してるけどすんげえやべえの。
「がっ……」

首が一気に締まり、呼吸が苦しくなってきた。

「ほほう、首の筋肉で力付くで耐えているようだがそれはいつまでもつかない？」

今必死に耐えているがそろそろ限界に近い。力を振り絞って愛刀に手を伸ばす。あれだ、ワイヤーをピーンされたら確実に死ぬ！

「よく頑張ったがもうこれで終わりだ！」

俺が愛刀引き抜くよりも早くロレントがワイヤーを弾こうと手を伸ばす。ヤバイ、マジでヤバイ！

——キーンツ

その時不思議な事が起こった……じゃねえ、どこからか飛んできた弾丸が取り付けられたフックに直撃しフックが外される。ワイヤーが緩み、ずるりと落ちる。今の狙撃は

：

『……ノブツナさん、決めてください』

この声はレキ！無事でよかったという前に……着地した俺は解いたワイヤーを握り思い切り引つ張る。力が押されロレントが無防備のままこちらへ一気に引つ張られてく

る。もう手加減はしない！

「せーっっ！！」

腹部と胸部に強烈な掌底をお見舞いする。ロレントはビクリと全身が痙攣し前のめりになる。この技は『打振』と言って人体に含まれる水分、血液を振動させ筋肉や臓器に衝撃を伝わせる。俺の行きつけの医者がよくやる。そしてトドメに踵落としてフィニッシュ。

「ズ……」の……吾輩……が」

ロレントはそうつぶやいて気を失う。まだあつたんかい、本当にしっこいおっさんだった。念のため足と手に手錠をかけて置いておく。これで戦闘終了、そんなことよりやることがある

「レキ！無事か!？」

急いでレキがいるであろう方向へ走る。

「ノブツナさん、ここです」

レキの声が聞こえ、手を振る姿が見えた。丁度離れたバンの後ろにいた。

「怪我はねえか!？」

「多少は大丈夫です。ノブツナさんのおかげで少なく済みました」

無表情で何事も無い様にいうけどさ……服は焦げて敗れている箇所もあつたり、顔に擦

り傷、火傷はなさそうだが、右足を怪我しているし大丈夫じゃねえだろう。こんな状態でここまで駆けてくれたのか…

「ほらよ」

俺は上着をレキに羽織らせ、おんぶする。

「ノブツナさん…?」

珍しくレキが今の状況に困惑している。

「もつと俺に甘えてもいいんだ。もつと自分の身体を大事にしろ。…か、仮でも俺のパートナーなんだからよ」

イタイ！こういうのもなんだけどイタイ！俺が言うようなセリフじゃねえ！ま、まあパートナーを気遣うのは大事だけどさ？それにレキには無茶をさせちまったしな

「…ありがとうございます」

レキがきゅつと肩を握る。遠くでパトカーのサイレンが聞こえる、後は警察と他の武偵に任せよう。ポツポツと雨が降ってきた…今夜は荒れるって言ってたな。とりあえず救護班も来るだろうからそっちの方へ行くか。

そんなことを考えていると携帯が鳴る。鳩からか

「もしもし、こっちは片付いたぞー」

『ノブちゃん、レキレキ、お疲れっス！そんなノブちゃんに速報っス。飛行機ジャックが

起き、キンジ&アリアが真犯人と戦闘中ツス!!』

どうやらあっちも頑張っているようだ。キンジ、頑張れよー

10話 エピローグ的なやつ

「よっし、これでダイジョブだ」

今は救護班の車の中でレキの傷の手当。怪我の方は大丈夫そうだったのでひとまず安心。うん、なかなかのおみ足：ゲフンゲフン、のちの活動に支障はないそうなのでよかった

「ありがとうございます。ノブツナさん方こそお怪我は大丈夫ですか？」
「俺か？俺の方は唾でもなめときゃ治るさ」

俺達がドンパチして倒した連中は警察と応援にきた武偵達が連行、証拠品などの収集をしている。まあこっちは一件落着つてことで。疲れを癒すかのようにひたすたにレキを撫でる。そんな時にずかずかとジークが駆けつけてきた

「なにい!?!もう片付けただど!?!」

「ジーク、来るの遅せえよ。俺とレキで済ませたぞ」

「んんんんん！許さーん！俺も大暴れしたかったぞー!!」

プンスカしているジークをほっといて、レキの様子を見る。彼女はただただ土砂降りになってる外と真つ暗な空を見ている。声を掛けようとした時に携帯が鳴る。なん

だ、武藤からか

「武藤、どした？」

『ノブツナ！お前も羽田の方で大暴れしてたんだな！』

「それだけか？切るぞ？」

『いや、ちよ、待てよ！今、キンジが乗ってる600便がエンジントラブルを起こしたら
しいー！』

「ぬ？キンジ達は無事なのか？」

『ああ！それでキンジが600便を空き地島に緊急着陸させるんだ!!』

空き地島か…高度とか云々聞いてりやギリギリ、もしくはアウトなのだが…空き地島
には照明はないし飛行機から見りや真っ暗だ。さしずめ不時着で最悪の状況になるだ
ろう

「状況はよくないな…」

『ああ！だから…俺はあいつを死なせたくなえ！』

「…武藤、やることはわかってるな？手を貸すぜ？」

『!!…さすがノブツナ!!ありがたうよ！』

携帯を切って一息入れる。

「レキ、ジーク。悪いがもう一仕事だ」

空き地島

「嵐の中がかがやいーて♪」

「そのゆるめを……って歌っている場合じゃねえっ!!」

武藤はジークに蹴りを入れる。豪雨と暴風の中で俺とジーク、武藤はモーターボートと船と車輛科の車や照明も無許可で持っけていき空き地島にて飛行機が安全に着陸できる道になるよう設置している。

「おらてめーら急げ! 時間がねえぞ!」

「見えました。あと数分でこちらに来ます」

「オラオラア!! レキがもう見つけちまったぞ! 急げ急げ!」

「おう! ってノブツナも手伝えよ!」

俺はちゃっかり車でくつろいでいた。だって車全部俺が動かして終わったし?

「車担当は全部片づけたからな! 動け動け!」

「ちよ、きたねえぞ!」

「嵐のーなかで……ノブツナ!! 設置、配線終わったぞー!!」

「よっしゃ、点灯っ!!」

照明と車輛のライトを全部一気につける。明かりが灯されて一本の道が出来上がった。武藤が持っていた無線でキンジに繋ぐ

「キンジ!!聞こえるか!!お前が死ぬと白雪ちゃ…じゃねえ泣く人がいるからよお!俺…ノブツナとジークと一緒に車輛科のモーターボートもつかい照明も無許可で持ってきたんだ!だから…アリアと一緒に無事に着陸してこい!」

「武藤、お前ほんつと熱い奴だなあ」

「ちなみにこの船は我がハワコネの船だ!!」

「…ところで、私たちがこの道にいたら飛行機の着陸に巻き込まれるのではないですか?」

「「…走るぞおおおっ!!」」

俺達は急いで避難する。そうしている間に、600便は空き地島になんとか着陸を成功した。…暴風にジークは巻き込まれて海へドボンしたようだ

「一時はどうなるかと思ったな」

昨日の嵐がウソのように晴れた今日。俺はレキと一緒に屋上でのんびりとしている。結局、武偵殺しの事件はキンジの話によると飛行機内で真犯人がいて、もう一息のところで逃げられたらしい。でも、俺が捕まえたマッドギアの残党、警察と武偵の共同の捜査によりアリアの母親の神崎かなえの公判は延期。なんやかんやで無事に事件は終

わったようだ。

「ノブツナさんは始末書を書かなくて済んだんですか？」

レキが声をかける。そうだ、その後、勝手に道路封鎖したこと、応援も呼ばず道路での戦闘、そして空き地島へ無許可でライトなどを持ち出したことにより俺とジーク、武藤は蘭豹先生に捕まり始末書を書かされていた。あ、俺は面倒なので『ちゅどつ』をしてこの屋上まで逃げてきたんだけどな

「面倒だから逃げた。そういえばレキ、怪我の方はもう大丈夫なのか？」

「…はい、狙撃にも支障はないとのこと。ノブツナさんはどうしてそこまでして私を心配してくれるのですか？」

うーん…俺は考えながらレキの頭を撫でる

「ま、俺の大事なパートナーだし？それにもっと自分を大事にしなさいな」

「…」

ん？うつむいてしまったな…悪い事言ってしまったか？

「…ノブツナさん、話があります」

「お、おう？なんだ？」

レキ、珍しく真剣な眼差しだな…ちよつと焦った

「風が…選べと言ってきました」

「か、風？何を選べって言ってきやがったんだ？」

「どちらか二つの道のうち一つの道を選べと」

み、道？…これはもしや、レキの脱厨二病のチャンスかもしれない!!レキは今、厨二病を止めることを考えているはず！

「ど、どういう道かわかるか？」

「一つは『ある人』の事を好きになり子を作れと」

「すんげえどストレートだな!？」

「でも…『ある人』を好いている人が既にいて私はその人から奪わなければならないんです」

おうふ…レキさん、それなんていう昼ドラ？このままだとレキがヤンデレなことをやらかすかもしれない…

「れ、レキ？聞くけど『ある人』って言う野郎はお前の好意に気づいているのか？」

「いいえ。気づかないようなのでこれからもっとやるつもりです」

あかん、それマジであかん。
「レキ、それはやめとけ。『ある人』だけじゃなく、そいつを好いている奴にも迷惑をかける。お互い嫌な思いをするだけだ」

「ですが…」

「じゃ、じゃあもう一つの道は？」

「もう一つは…よくわからないのですが、さっきの道より孤独で、険しく、危ない道を歩むことになります」

…風さんよ、あんたなんてとんでもないことをレキに言わすんだと思つてしまった。

「レキ、お前さ自分の道を自分で歩いたことはないだろう？」

「…全部、風の言う通りにしてきました。この学園に来たことも、銃も、生き方も、風の声に従っています」

「…よっしゃ、わかった。どの道もやめとけ」

なんだろうな…レキは、ずっと誰かに言われたままにしてきたんだろう。だから、孤独だ

「どの道も？…だとすればどうすればいいんですか？」

「道が無ければ作ればいい。第三の道さ」

「第三の道？」

「そう、『自分の道は自分で切り開け』つてな。誰かにひかれた道を行くんじゃなくて、自分のやりたいことを自分で歩くんだ」

レキは一瞬目を見開いたように驚いたが、すぐにうつむいた

「私は…自分で考えたことがあります。それが正しいのかどうか…怖いんです」

「確かに怖いだらうな。でも安心しろ、お前の歩く道に俺がついてる。俺が助けてやる」

そう、レキの脱厨二病のためなら俺が手伝つてやろう。

「それは…ノブツナさんと共に歩むんですか？」

「ま、まあな？い、一緒にいてあげることぐらい容易いもんさ」

うん？俺間違つてないよな？それを考えているとレキは真剣な眼差しで俺の前に跪き、俺の手を握つた

「…決めました。ウルスの一族は…ウルスの姫は…貴方に従い、貴方と共にあることを今ここに誓います」

「お、おおう？…え？え?!」

ウルス？…あれか、邪気眼的なあれか！レキの脱厨二病の道はまだまだ遠いなあ…

なんかかんやあつて、無事に帰宅。今日はレキが心開いたことが唯一のいい出来事だったかなー。自分から言つて来たんだし、十分な進歩だ。さてと鳩にあれ以降、マツドギアの残党から何かイ・ウーについて聞きだせたか聞いてみるか。と思つた矢先にインターホンが鳴る

「はいはい、うちは新聞お断りだよー」

と適当に出て返そうとドアを開けると…なんとということでしょう、そこにはキャリーケースを引いたレキがいるじゃありませんか

「れ、レキ!？」

「ノブツナさん、遅くなりました。これからよろしくお願いします」

「え…え!?!もしかして居候か何か!？」

レキは無言でうなずいて俺の部屋に入ってきた。

「貴方と共に歩むと決めましたから」

「いや決めすぎだけど!?!つか寛ぐの早つ!？」

入ってきたレキは部屋の壁にドラグノフを抱くように座つてもたれ掛るように寝ようとしていた

「あ、あのー…晩御飯は?」

「大丈夫です。もう食べてきました。後は寝るだけです」

「そうじゃなくて…無許可で居候とか…怒られるんじゃないかね?」

「安心してください。すでに許可は頂いてます」

「わーお、計画的!?!…つかもう寝るのか?」

もうつつこむのはやめた方がいいや。レキは制服を着たまま寝るのか…

「はい、明日に備えて早く寝ます」

「そ、そうならいいけど…：やつば寝るなら制服じゃない方が…」

ま、まあ人それぞれだし？でも、制服じゃない方がいいかなーなんて考えていたらレキが制服を脱ぎだそうとしていた

「イヤイヤイヤ!?!だからと言って脱ぐ必要はねえよ?!」

「そうですか？制服以外は持つていませんし…」

「む、無理にしなくてもいいんだぜ？」

「ですが…：ノブツナさん、どういった感じがいいでしょうか？」

なぜ俺に聞く…：しゃあない、ここはひとつ冗談こめて…

「…：裸Yシャツをお願いします！」

「」

あ、やべ、レキが一瞬固まった！でもロマンがあふれる…：じゃねえよ！

「い、いや、冗談だよ冗談！今のは聞いてなかったことに…」

「こうですか？」

なんとということでしょう、視線を逸らして改めて戻すとそこには裸Yシャツのレキが…：いや一度でもいいからやってほしいと思っただけだよ!?!いきなりはだめでしょう!?!窓から照らされる夕陽が白いシャツを照らす

「ふあっ!?!」

「…ノブツナさん？」

据え膳食わぬは男の恥!!俺はさっそくレキを姫抱っこしてソファアヘポイした

「あ、あの…」

あかんなこれはキンジだけの特権かと思ったがラッキーだぜ…キンジモード（笑）入りまーす!

「レッツ、もっこりイイイイツ!!」

そういつてルパンダイブしようとした時だった

ガツシャーン\テンチューー!! / ガツチャーン

「……」

俺は動きを止めた。隣、キンジの家にヤンデレ巫女こと星伽白雪が帰ってきやがったか!ええい、折角の雰囲気をぶち壊しやがって!!

「の、ノブツナさん？」

心配そうにレキが俺を見る。そうだな、お隣なんか気にしている場合じゃない!

「モ…もっこりy」

ガシャーン\風穴ーっ!! / バキューン\テンチューー!! / ガチャーン

「……」

ああ、そうだった。ヤンデレ巫女だけじゃなくて喧しいツインテピンクがいたな…。

隣で窓が開く音がする。キンジの野郎、逃げやがったな。そこで俺の堪忍袋の緒が切れる

「やかましい！ダボガアアアアア」

——ノブツナ、怒りの隣訪問

五月のキャンデー

11話 本部が強くて何が悪い

キンジ side

あれからひどい目にしか会っていない。アリアが日本に残り、俺と組むようになったのは良かった。だが、合宿から白雪とアリアがドンパチして部屋が荒らされ、更にはノブツナがガチギレして部屋に入乱しさらに状況が悪化。ここは戦場かと嘆くぐらいの惨状になってしまった。

「ホント、散々な目にあった…」

その後白雪が女子更衣室から出ていくのを見かけて声を掛けよるがスルーされてどこかへ行くし、白雪も機嫌が悪いようだ

「キンジ!!無事だったか!」

「お、武藤。おはよう」

…ん?今武藤の奴『無事だったか』とか言ってたな。なんかあったのか?

「よくノブツナに見つからずにこれたな」

「…ノブツナがどうかしたのか?」

なんだろうか、これは嫌な予感しかない。

「今朝、ノブツナがチェーンソーを持って教室に入って来るや否やキンジを探し回ったぜ？」

しかも激怒したままうろついていたようだ。今日も少し遅れて来てよかった！

「と、とういかなんで俺を探し回ってんだよ」

「ノブツナ曰く、『俺のもっこりを返せ』と言ってたな」

「…わけがわからねえよ」

ノブツナ side

「誠に遺憾である。」

実に不愉快だ。折角のチャンスをキンジ達に台無しにされてしまうとは。しかもレキは『裸Yシャツは朝がまだ寒く感じるので昨日だけにして』とやってたので当分はレキの裸Yシャツが拝めなくなってしまった。

「…」

今日もレキと一緒に屋上でサボタージユ。朝から一緒に登校したり実に嬉しいのだが、まさかレキファンに敵視されるとは思ってもなかった。まあ蹴散らしてやったけど…今後はまさかの敵襲もありそうなので注意しなければ

「そういえばアドシアードで話題がいっぱいだったなあ……」

アドシアード、学校で言う『体育祭』か『文化祭』みたいなもの。でも武偵校じゃあそれぞれの技能を競う大会でもあるし、外部の人間や武偵局からの人もくる。注目もされるし優勝者にはすごい単位ももらえるからこそ皆張り切っているのである。

「レキは狙撃競技に出場するんだよな？」

「……」

レキは無言で頷く。去年のアドシアードの狙撃競技でレキは優勝し、新記録も作ったしな。今年もレキの優勝で間違いないだろう。

「ノブツナさんは今年も出場するんですか？」

「俺か？俺はアドシアードは休日と思ってる」

閑話になるが去年のアドシアードではお弁当配りなどして小遣いを稼いでいた。ぶっちゃけ、師匠の親友達や『地上最強』と呼ばれたあの人を見てたらアドシアードも凄ainだけど、ただレベルが下がっちゃうんだよね。

「今年の狙撃競技も応援してるからな！」

「……」

そういつて撫でているんだが反応がいつもと違うなあ？これって照れてんのかそれとも嫌がつてんのか？そんなことを考えていると携帯のメール音が鳴る。

「……これは……」

「?どうかしましたか?」

「ちよいつと師匠の所に行つてくる。レキ、来るか?」

いつものように学校を抜けて東京の街中を通つていき、ひときわ静かな町の端にある小さな道場へ行きつく。

「ここが俺の師匠のいる道場さ。さき、遠慮なく入つて」

師匠の道場だけどね!道場に入つてみるといつもと変わらず道場に通う生徒なんて一人もない静寂な空間。その空間のど真ん中に瞑想して座っている茶色のスーツにズボン、ぼさぼさの髪型の口回りに髭を生やしたおっさんがいる。

「……」

「…師匠、人を呼んでおきながら寝てるのはちよいつと頭に来るんですけどー」

静かに瞑想しているように見えるのはウソ。この人静かにいびきをかいて寝てる。ちよつといたずらで顔に落書きしてやろうよマジックペンを取り出して顔にペンを近づけた。その途端ぱつと師匠は起き上がり俺の腕をつかむな否や背負い投げして床に叩きつけた

「…おいおい、師匠に対するあいさつがそれか?」

「あつはつは、ジョークつすよ。…ただいまです、本部師匠」

この人の名は本部以蔵。実戦型柔術『本部流柔術』の師範であり、俺の師匠でもある人。見た目は柔術が得意なおっさんに見えるけど、『地上最強』と呼ばれる男と共にいたり、その息子と数々の戦いを潜り抜けたり戦ったり見てたりとすんごいしめちゃんこ強いから。俺は武術、体術、柔術といたりけりと戦鬪をこの師匠に叩きこまれた。

「ところで、犬塚。そこにいるお嬢さんは誰だ?」

「師匠、紹介します。俺のパートナーのレキです。それでレキ、この人が俺の師匠の本部以蔵さん」

「…はじめまして、レキと申します」

レキは深々と頭を下げたお辞儀をする。師匠は納得するように優しくうなずく

「…今はノブツナさんと一緒に住んでいます」

その一言で師匠はカチリと固まる。うん、レキ、それは言わなくてもよかつたんよ!? 師匠はゆっくりと俺の方を見る。

「だ、大丈夫つすよ? まだナニもしてないつすよ?」

「ま、まあそれならいい。レキさん、どうかこのバカ弟子をよろしく頼む」

「はい…ノブツナさんから色々教えてもらいました。女性は『裸Yシャツ』で寝るとか」

その一言で、俺と師匠の道場内での鬼ごっこが勃発した。

30分後

「…まったく、お前は何を考えているんだ！」

激闘の末、道場で無様に大の字に倒れている俺の姿が

「し、師匠の教えの賜物です」

「はあ…どうしてこうなったのやら…」

「ノブツナさんは師匠と仲がいいんですね」

レキ、これは違うと思う。まあ仲がいいけどさ、師匠は刀振り回すわ鎖鎌振り回すわ、クナイを投擲するわで一步間違えたら死にかけるから

「ところで師匠、俺を呼んだのはなんでですか？」

「そうだったな…実はお前にやってもらいたいことがある」

「やってもらいたいことですか？」

師匠の頼みだ、嫌な予感しかしない。師匠は時計をちらちら見ていて誰か来るのを待っているようだ。

「うーむ、そろそろ来てもおかしくないのだが…道に迷ったのかな？」

そうこうしているうちに車の大きなエンジン音が近づいてきて道場の前で止まった。音からして高級車…リムジンだろう。のっしのっしとゆっくりこちらに近づいてくる足音がする

「イヤースマナイネ、この街は小さく入り組んで道に迷ってしまったよ！」

まず一言言わせてほしい。筋肉すげえ!?! 気さくに入ってきたのは体格もでかく、筋肉もりもりのマツチヨマン以上の筋肉がついたうつつすらと口ひげのあるアフリカ系アメリカ人。アロハシャツやズボンで全体は見えなくても見た目で分かる。この人は強いと直感でわかる。もちろん隣で見えていたレキも目を見開いて驚いていた。

「ホホウ、Mr. 本部。彼がMr. トクガワやかの『地上最強』を領かせた少年かい?」「ええ。犬塚、紹介しよう。彼はビスケット・オリバ。『ミスター・アンチエイン』と呼ばれる男だ」

「こ、この人があの『アンチエイン』ですか!?!」

ビスケット・オリバ。全米の凶悪犯罪者が集う『ブラックペンタゴン』ことアリゾナ州立刑務所に収監された『囚人』でありながら警察が手に負えない凶悪犯を自らの手でハントしたり、刑務所内でビップ待遇、今現在ではアメリカ全州の刑務所を牛耳ったりと、囚人なのに自由奔放である。

その自由さ、誰にも抑えることのできない怪力から繋がれざる者と呼ばれる。そしてその名故に、武偵局は彼を目の敵にしている。『囚人』が『自由』にしていることが気に食わないらしい

「ど、ども初めまして…犬塚信綱って言います」

「ハツハツハ、そう硬くならなくてもいい。気安くしてくれたまえ」

オリバさんと握手をしたんだが…マジででかい手だ。こちらが握りつぶされるんじゃないかってぐらいデカイし力強い。

「それで…そちらのお嬢さんはどちらかな？」

「あ、俺のパートナーのレキです」

「レキ…ホホウ、いい名前じゃあないか。よろしくネ」

「…」

レキはオリバさんと握手をするが少し怯えているように見える。そりやそうだ、自分よりデカイ人にでかい手で握手されたら少しビビるわな

「そ、それでオリバさん、俺に頼み事ってなんでしようか…」

「そうだったネ…率直に言うところある人物を捕まえてほしいのだ」

「ある人物？」

「うむ、『ドリアン』が脱獄してこの東京に潜んでいるのだよ。」

『ドリアン』という名を聞いて師匠はピクリと反応した。俺も師匠から聞いたことがある。かつて東京ドームの地下で行われた地下格闘技の主権者、徳川光成が呼び集めて師匠の友人たちが戦った『敗北を知りたい』と豪語した最凶死刑囚と呼ばれる五人の囚

人のひとり。暗器、爆弾、中国拳法などを駆使して苦しめたと言われていたが…

「それはおかしい、『ドリアン』は敗北し精神が退行してもう戦うことはできないとされていたはず…」

師匠の言う通りである。最終的には自分が敗北を望んでいたにも関わらず一度も勝っていないと告げられ、戦いに完全敗北し矛盾した人生に耐えきれず精神が幼児退行したと言われていた。

「それが…突然治ったようですね。『もう一度戦いたい』と置手紙を残して日本へ渡っていったんだヨ」

「そんなことが起こるのか…?」

「で、でもそれと俺と関係あるんですか?」

「ドリアンはもう高齢で、幼児退行した身体はもうボロボロに近い。彼らと再びファイトをしたら次は間違いなく死ぬだろうネ。だからこそ、Mr. トクガワや『地上最強』を領かせた武偵の君に『ドリアン』を捕まえて欲しいのだヨ」

確かにあの人たちからの信頼があると聞いているのだが…俺にできるのか? 元とはいえ最凶と言われた死刑囚を捕まえることができるのだろうか? そう深く考えているとポンとレキが俺の肩を叩く。

「ノブツナさん、私も手伝います」

…そうだな。お前がいるとなんだかできそうな気がしてきた

「…わかりました。できるだけやってみせます」

「そうか、それは助かるネ」

オリバさんはニツコリと満足そうに笑う。隣にいる師匠は少々驚かれているようだ。嗚呼、逮捕できるかな…

「犬塚…油断はするなよ？ 相手は元最凶の死刑囚。様々な手を使って殺しに来るぞ」

「…わかつてます。師匠の教え通り、『慢心』と『油断』はしないですよ」

「依頼の方は私が回しておく。それでは失礼する」

オリバさんは満足げに帰ろうとした。途中、ピタリと止まってレキの方に顔を向けた

「ところで…レキの名前は漢字で『蕾』と『姫』と書くんじゃないかな？」

「!!」

レキはどうしてそれを知っているのかと言わんばかりに目を見開いて驚いていた。

「なにか…直系の名前と聞いたのだが、違うかね？」

「…っ!!」

「レキ、ちよ、タンマ!!」

レキがとつさにドラグノフの銃口をオリバさんに向けようとしたので急いで止めた。彼女の手と身体に振れると物凄く震えていた。

「お、オリバさん、あまりレキをおちよくらないてくださいいよ」

「ハツハツハ、ジヨークだよジヨーク!! ノブツナくん、成果を期待しているよ? それではまた会おう」

愉快愉快とオリバさんは笑いながら去っていった。ほんと自由奔放な人だなと思う。それよりもレキの震えが止まらない。とりあえず優しく抱きしめてやるか。

「レキ、もう大丈夫だぞ? 俺がいるし安心しろ」

「…すみません、取り乱してしまいました…」

アスナ口抱きしてそんなでもって撫でて落ち着かせる。さてと、とんでもない依頼を受けてしまったけどもこれからどうしようか…ジークや鳩にも伝えておくか。特にジークは喜んで受けそうだしな。

「…犬塚、イチヤイチャするのは構わないが場所と空気を読んでくれ…」

このあと師匠から滅茶苦茶ゲンコツされた

12話 お宅訪問

「まったく、電話をかけたら上空から落ちてくるのはやめろっていつてんだろ」

「H H H H H A !!これが私のアイデンティティー!!」

「んなもんいらねえよ!」

ノブツナは呆れながらいつまでも喧しく高笑いをするジークを睨む。脱獄した元死刑囚、ドリアンの搜索を協力するよう鳩とジークに電話をしたところその3分後にジークがスカイダイビングをしてやってきたのだった。天井に穴が開く大事に至らなかつたが、ノブツナの師匠である本部から『もっと友達を選べ』と苦笑いをされた。

「それにしてもジーク、随分とやる気満々だな」

「当たり前じゃないか!あのドリアンを捕まえに行くのだぞ!!もうドキが胸胸!!」

すでに袴着に着替えてやる気満々ではしやくジークとは反対にノブツナは憂いながらため息をつく。言わずもがなあの元死刑囚を探して捕まえにいかねばならないのだからである。

東京ドームの地下にある地下格闘技の格闘家達と、最強最悪と呼ばれた5人の死刑囚の格闘は東京を騒がせた。元々は武器の使用を認めていなかったルールがこの場では

武器もあり、戦う場所も戦い方、戦う人数も有限がないノールールで行われたことにより公共の場が危険にさらされたのである。警察のみならず、武偵も出動したのだが、彼らには全く歯が立たず止めることもできなかった。

さらには折角の我々の戦いを邪魔をするなど両陣営から喝を入れられたことにより完全な司法の敗北と化していた。おかげでマスコミや新聞やニュースなどメディアから総叩き。さらにはアメリカの囚人、ビスケット・オリバや地上最強、範馬勇次郎の介入により更に武偵や警察叩きは悪化した。これが原因により、日本の武偵はビスケット・オリバを目の敵にしているのであった。

「ほんとなんでオリバさんは俺ら武偵にそんな無茶なことを頼むのやら…」

ノブツナは深くため息をついた。承った以上、やるしかないし戦うしか止める方法はない。気を引き締めて、歩みを止め目的地である高層ビルを見上げた。

「ノブツナさん、ここは…?」

気になったのか、レキは高層ビルの壁画を見ながらノブツナに尋ねた。壁画には空手着を着た禿頭の男が虎を倒す絵が描かれていた。

「まずはドリアンについて情報収集だ。一応、本部師匠が伝えてくれているけども…やっぱ緊張するよなー」

ノブツナは半ば緊張していた。気合いの入った怒声が外からでも響いてくる。ノブ

ツナ達はそのビルへと入っていった。正面玄関を通り、4階へと上がり練習場と書かれた部屋を開けると、そこでは空手着を着た逞しい体格の男たちが気合いの込めた声を上げながら拳で空を突き、高く蹴りを入れ、再び拳を突く、と空手をしていた。

「ここは神心会空手っていうフルコンタクト系空手協会だ。日本全土に100万人もの会員を持つ日本一の格闘団体なんだとき」

無表情であるが目を丸くしているレキにノブツナは説明をした。厳つい男達ばかりであるが、子供向けの殻で教室だけでなく女子空手等々、老若男女問わず神心会空手は広く伝わっている。中でも東京にある本部には創始者と館長が尋常でない程強いと言われている。そんな空手の様子を見ていたノブツナ達のところに長身で体格もでかく、厳つい顔つきの男が睨み付けながら近づいてきた。

「おい…お前達、ただの見学者じゃなさそうだな。俺らになんか用か?」

「H A H A H A !! その通りである!俺は道場やry」

「あ、あははは…ちよ、ちよつと武偵の捜査活動で協力頂きたいことがあります… !!」

いきなり道場破りだとぬかすジークの口を封じてノブツナは引きつった笑顔で誤魔化した。男はさらにじろりと睨みを利かす。ノブツナはレキにも手を貸してもらおうと視線を向けるが、肝心のレキは興味なさそうにしていた。更には道場内の厳つい男た

ちが一斉にこちらを睨み付けてきた。このままだと蹴つ飛ばされて追い出されてしま
い兼ねない。ノブツナは焦り始めた。

「末堂、そう睨んでやるな。本部から電話があつてな、この子達は俺に会いたいようだ」
ふと後ろから声がかかり、振り向けばかなりの筋肉質な体格をした白のスーツを着
た、眼帯を付けた禿頭の男がいた。ノブツナだけでなくレキもジークもその男はただ者
ではないという気配を察した。

「お前さんが本部が言つてた犬塚信綱だな？俺がこの神心会空手の総帥、愚地独歩だ」
「ど、ども…師匠から聞いています」

にこやかに差し伸べてきた独歩の手をノブツナは恐る恐ると握手をかわす。そんな
ノブツナの様子に独歩はクスクスと笑う。

「なに、取つて食つたりしねえよ。ここでもなんだ、場所を変えるかい？」

一見気さくな好々爺に見えるが、かの独歩は虎殺しとも呼ばれるほどの空手の使い手
であり、地下闘技場にも出場した男だとノブツナは知っていた。独歩の案内で応接室へ
と向かい、ソファーに腰かける。独歩はニコニコとノブツナ達に視線を向けながら深く
腰掛けた。

「さて…武偵の坊や達は俺に何を聞きに来たんだ？」

「それは是非とも空手の御指南を r y」

「ちげえだろ」

さつそく割り込んできたジークにげんこつを入れ、ノブツナは真剣な表情で独歩に尋ねた。

「独歩さん、率直に聞きます…：貴方や神心会の方達と戦った死刑囚、ドリアンについて…」

その言葉を聞いた途端、独歩の顔から笑顔が消え、真顔で見つめ、ぞくりと殺気がのしかかってきた。ノブツナとレキが感じたのは明らかな殺意。しかしここで怖気づいてしまふともう顔を見る事さえできなくなってしまう。二人は重い殺気に耐えた。

「…冷やかしてきた、と言うわけでもねえみてえだな。なんでそんな事を聞く？」

笑顔のこもった口調ではなく、完全に殺しに来ているような重い言葉にノブツナは答えた。幼児退行していたドリアンが突然回復したこと、アメリカの収容所から再び脱獄しこの東京に潜んでいるという事、ビスケット・オリバからドリアンを捕まえてくれという依頼を受け、自分は探るために情報収集をしているという事を独歩に話した。

「俺は一度も会ったことはありません…：ドリアンはどういう男だったのか、どんな戦いをしたのか、彼と戦ったことのある貴方に伺いに来たんです」

ノブツナの話聞いて独歩は無言のまま煙草に火をつけて静かに一服した。自分達

に對する殺気は消えたがどう出るかわからない。独歩は煙を吐いてノブツナ達に視線を向けた。

「一つ聞くが…もし、俺が怒って正拳突きをしたらどう出る？」

「俺なら受けて立つぞ!! かの愚地独歩と一戦交えるのだからな！」

「近接では私は手が出ません。ドラグノフを盾にして防ぐしか方法はありません…」

「えつと…持つている縄かベルトで腕を絞めて一本折ります。正当防衛ですから」

ノブツナ達の答えに独歩は唸る様に考え込み、再び煙草を一服した。一息煙を吐いた独歩は渋い顔で視線を向けた。

「まあ60点ぐらいか…ドリアンなら隠し持つているアラミド繊維で俺の手首を切断だ」

キョトンとしているノブツナに独歩はそのままかつてドリアンと戦った時の事全て話した。アラミド繊維で首を切断されたこと、門下生達が戦って敗れた事、そして顔面に爆弾を叩き込まれたこと、覚えている事限り全てを語った。

「あいつは中国拳法だけでなく、ワイヤーや手榴弾、武器を仕込んで戦う。わかるか？ ドリアンは手段を選ばず殺しにかかってくる。お前さん達のような、殺しを禁じられた武偵、剩れ血みどろな戦いを知らねえ武偵のガキじゃ捕えることはできねえ」

独歩の言葉にノブツナは何も言わず、じつと独歩を見つめた。そんな彼の視線に独歩

はやれやれとため息をついて頭を掻く。

「まあ…本部のどこの坊やならそれぐらいは心得ているだろうな。ドリアンが今どうなっているかは知ったこっちゃやねえが、元死刑囚と言えども、ご老体と言えども手を抜くな。俺が知っている限りは以上だ」

「独歩さん…ありがとうございます」

ノブツナは深く頭を下げた。律儀すぎると独歩は苦笑いをしてノブツナに尋ねた。

「逆に聞くが…今のご時世に戻ってきたといつても、ドリアンは何をしようとしているんだろうな？」

それは独歩でもノブツナでも分からなかった。ドリアンは何故、再び東京に戻ってきたか。神心会への再戦なのか、または復讐か、それとも別の理由を抱えているのか、目的が見えない。

「リベンジなんなら喜んで受けて立つんだが…お前さん達も十分気を付けてることだな」

「独歩さん、一応渋川さんにも話したんですがくれぐれも再戦だとか言つて乱入しないでくださいよっ」

「ははは!!その時は武偵の誇りにかけて全力で止めるんだな」

絶対に暴れないで欲しいとノブツナは頭を抱えた。死刑囚ドリアンだけでなく愚地

「独歩までも巻き込んできたらたまったものじゃない。」

「一先ず情報収集することはできた。後は先手を打たれる前にドリアンを見つけて捕えるしかないだろう。後はジークや鳩、レキと連携を取って探していく。ノブツナは独歩に一礼して部屋を出ようとした。しかし、ジークはもう帰るのかと言わんばかりに嫌そうな顔をしてきた。」

「もう帰るのかノブツナ!!せめて神心会と一緒にカラーテを教えてもらうじゃないか!」

「おいジーク、目的はそれじゃないってば」

「うちのせがれは新しく武偵向けに空手教室を開こうかと考えてたところだ。今入門すれば月謝は30%オフに…」

「独歩さん、勧誘しないでください…」

それから数日が経過した。ノブツナはレキと共にドリアンが潜んでいそうな廃墟のビルや無人になった地下のバーやアパートを搜索して探していた。しかしどこもいる気配がないどころかまったく見つからなかった。

「はー…ここも外れだったな」

「これで15件目ですね…」

ボディーアーマーを身に着け、刀を提げ、LARグリズリーの他、スタングレネードやらと重装備で備えて向かっているがどこも空振りに終わってしまった。レキは無表情で見据え、ノブツナは大きいため息をついて項垂れた。

鳩には無人の工場やら廃墟やらと場所の情報と目撃情報を収集させ、ジークにはハワコネ社の製造したUAVを使って探索してもらっているがどれも手応えがなかった。レキの鷹の目をもってしても見つからないとなると本当に潜んでいるのかどうかと疑ってしまう。何かいい手はないかとノブツナは唸りながら悩みだす。

「あんたが犬塚信綱ね？」

ノブツナが頭が痛くなるほど悩んでいるところに、少し高い音程のアニメ声な少女の声がかかる。面倒くさそうに振り向くと、キンジの部屋で居候しているピンクツインテロリこと神崎・H・アリアがこちらを睨み付けながら歩み寄ってきていた。

「何だお前か…今は奴隷の勧誘はお断りだし、すぐく頭が痛いから後にしてくんね？」
「あんたをあたしの奴隷にしに来たわけじゃないわ」

それなら様がないなら帰れと言いたかったが、どうせ言ったとしてもこういうツンツンした奴は人の話を聞かないと察していた。アリアはムスツとした顔でノブツナに指をさす。

「率直に言うわ。レキをよこしなさい」

「はあ?」

いきなりのことでノブツナは眉をひそめて睨み返した。それにカチンと来たのかアリアは声を荒げながら話を続けた。

「もともとレキはあたしと組む予定だったのに…あんたはそれを横取りしたのよ!!今はレキの力が欲しい所なんだから何も言わずよこしなさい!」

「あのさあ。レキとはちとら一年間バディを組んでたし、レキは俺の大事なパートナーだ。誰にもやらんぞ!」

「うるさいわね!貸しなさいと言ったら貸しなさいよ!!レキ、あんたはどうなのよ!!」

ノブツナとアリアはギャーギャーと口喧嘩を繰り広げる。そこでアリアはレキの意見は聞こうと鋭い視線を向ける。レキはこくりと頷いて静かに口を開いた。

「私は…ノブツナさんのモノです。今はノブツナさんに従います」

「ほれみろ。喧しいやつにレキは渡さん」

「なっ…あんた変な事をレキに吹き込んだでしょ!!もう!こうなったらあんたたちにデュランダル探しを無理矢理でも協力してもらおうよ!!」

アリアはやけくそに喚きだした。『デュランダル』という言葉にノブツナはさらに眉をひそめた。最近噂されている武偵校にある超能力捜査研究科の武偵の中でも攻撃的

な超能力を持つ者、所謂超能力者^{スデルス}の武偵、超偵を攫う誘拐犯のことである。いるのかどうか、存在しているのかどうか疑わしい都市伝説レベルの話だ。

最近我が武偵校の生徒会長である星伽白雪に脅迫状が送られたと話題に上がっていた。そのデュランダルを捕えるために、白雪を守るためにアリアとキンジがボディガードを務めていると武藤から聞いていた。しかし今のアリアはキンジや白雪と同行してしないし護衛すらしていない。ノブツナはジト目でアリアを見つめる。

「お前…白雪の護衛はどうした？」

「あつ…えと…捜査よ捜査!!」

焦るアリアに正直に話せと問い詰めたところ、アリアは直感でデュランダルの存在を信じているがキンジは全く信じておらず、口論になりキンジから白雪の護衛を外されてしまったとの事だった。それを聞いたノブツナは呆れてため息をついた。

「馬鹿じゃねえの。護衛の任務をほっぽいて単独で探すなんてよ。てかちゃんと護衛をしろよ。キンジだけじゃぜってーヤバいから」

「だからあんた達に頼んでいるんですよ!!」

ああ言えばこう言う。ノブツナは面倒くさそうに頭を搔く。こつちだつて脱獄囚したという危険な元死刑囚を探しているというのに余計面倒な事を持ち込んでくるなど。適当に言つて追い払おうとしてもうんともすんとも言わないだろう。どうしようか考

えていると携帯電話が鳴った。電話の主は鳩のように情報でも入ってきたのかとノブツナは携帯を取る。

『もしもし。ノブちゃん大変そうツスねー♪』

「おまえ…遠くでみてやがるな？」

冷やかしただけならこのまますぐに切つてやろうかと思つたところ鳩はノブツナを止める。

『ノブちゃん、ピンクツイントロリの件はうちに任せるツスよ』

「鳩…お前いいのか？」

鳩の言葉にノブツナはびっくりと止まり、尋ねる。鳩はクスクスと笑いながら話を続けた。

『デュランダル…その件ならうちは知ってるツス。前にも話したツスよね、うちの故郷の事』

「ああ…葛葉のことだな」

ノブツナは鳩と最初に組んだ時に鳩から自分の正体ことを話していた。元々鳩は関西にあると言われる暗殺に長けた暗部『葛葉』の一族である。『東のアズマ、西の葛葉、北の暁座、南の百地』と呼ばれるほどの暗殺の名門であった。しかし、数年前にイ・ウーという秘密結社の襲撃を受けて故郷は滅茶苦茶にされ一族は離散され、ほうかいされて

しまったという。

『うちの故郷を滅茶苦茶にしてくれたイ・ファツキン・ウーの中にデュランダルという奴がいたツス。奴を捕まるといふのなら、うちは喜んで力を貸してあげますツスよ?』

鳩の証言からデュランダルは存在している事が分かった。しかし、鳩をアリアのわがままに付き合わされるとこちらのドリアン探しがさらに困難になってくる。けれどもアリアを納得させるには鳩に任せるしかない。あとはジークのUAVに期待しつつ、自力で探すしかない。ノブツナは頷いて鳩に指示を出す。

「わかった…鳩、面倒をかけてしまうがそっちも頼んだ」

『りょーかいツス!!その代わりメチャクチャ美味しいっていわれる銀座のメロンパンを5個用意するツスよー♪』

現金な奴だとノブツナは苦笑いをして電話を切る。ちらりと面倒くさそうにアリアに視線を向けた。

「アリア、俺達は別の捜査をしているから手を貸せん。その代わり、そっちに詳しい奴をつけてやるからそれでチャラにしてくれるか?」

「…仕方ないわね。あまり使えない奴だったらすぐに文句を言ってやるわ」

今のお前と組んでいる相棒よりも何倍も頼りになる奴なんだけどなどノブツナは怒

りを抑えてニツコリとした。

「その代わり、捜査だけだからな。そいつとは電話でやりとりしろ」

ノブツナは鳩の電話番号を書いた紙切れをアリアに渡した。アリアはふんと言つてひたたくるように受け取りトコトコと去つていった。

「つたく…キンジはなんであんなツンツンした奴とひとつ屋根の下で住んでいるのやら」

こつちは何を考えているのかよく分からないけど可愛らしい奴とひとつ屋根の下だけどなど、ニヤニヤしながらレキの頭を撫でた。しかしレキは一体どうしたと首を傾げたままだった。

この後もドリアン探しにあちこち探し回つたが、結局見つけることはできなかった。ノブツナはへとへとになりながらも夕陽に照らされている男子寮へと帰ってきた。

「見つかんねえ…!!」

「なかなかいませんね…」

レキは全く疲れの色を見せておらず、ホントにタフだとノブツナは項垂れる。このまま見つからないと人のことが言えなくなってしまう。そして先にアリア達がデュラン

ダルを見つけししまうとなるともつと惨めになってしまう。

「このままだとアリアに笑われちまう……ああ、鳩をそつちに回すんじゃないかった!!」

何の手掛りもつかめておらず焦りを感じていた。一体何処に潜んでいるのか、何を企んでいるのか、掴めないまま終わってしまうのかとノブツナは悩んでいた。階段を上がり、やっと自分の部屋が見えたと思った時、ノブツナはピタリと止まった。

「……?」

自分の部屋のドアが見えている。このままドアを開けて、すぐに寝たい、と見える前までは考えていたのだが違和感を感じていた。レキもそれを察していたようでお互い階段の上で立ち止まったままだった。

「なあレキ。俺、出掛ける前に鍵を閉めて行ったよな?」

レキは無言でこくりと頷いた。確かに戸締りして出掛けた。これだけは覚えているのに、明らかにドアのロックが外れているのがわかる。

「……レキ、後ろを頼む」

「ノブツナさん、気を付けて」

ノブツナとレキはお互い頷き、ノブツナはホルスターからLARグリズリーを取り出しリロードした後慎重にドアへと進み、レキはドラグノフに銃剣を取り付け、ノブツナと背中合わせであたりを警戒しながら進んで行った。

ドアの前に立つとノブツナは指で『3秒数えて突撃する』とレキに合図をした。レキが静かに頷いたのを見て指でカウンントをする。3秒のカウンントをし、0でドアを蹴り開けてサイドへ。音もなく、何も起きらない事を確認すると慎重に暗い部屋の中へと入っていく。

目を凝らしてもワイヤーは張っておらず、それに誰もいる気配がない。ノブツナが先頭に進み、レキが後続して入っていく。しかし誰の姿も見えなかった。

「……いませんね」

「いねえな。もしかしたらジークのいたずら…」

どうせジークの悪戯だろと言おうとして後ろを振り向いた瞬間にノブツナは血の気が一気に引いた。脱衣所の戸が開き、そこから長身で体格のどかい、グレーのフード付きのジャージと黒のズボンを着た白髪に白鬚の男がゆっくりと出て来てレキの背後から大きな拳を振り下ろそうとしていた。

「レキ!!あぶねえっ!!」

ノブツナは咄嗟にレキをこちらへと引つ張って後ろへと倒れる。レキを引つ張った数秒後、男の拳は空を切り、床へと叩きつけた。大きな音を立てて大きな穴を開けた。男は大きく息を吐き、ギョツとしているノブツナにニッコリと笑顔を向けた。

「ふむ…日本の武偵はどうもセキュリティが甘すぎる。特に坊や達のような武偵の子供は

もつと甘すぎる」

男は床に大名を開けた拳をゆつくりと引き抜き、立ち上がる。拳をさすりながら、大男はにこやかにノブツナとレキに軽く会釈をした。

「初めまして、私が君達のお探しの元死刑囚、ドリアンだ」

13話 O Toi La Vie ①

ノブツナは戦慄した。目の前にいる大男はかつて東京を騒がせたかの5人の死刑囚の1人、ドリアン。一時幼児退行をしていたと言っていたが、体はまったく衰えておらず老いを見せないくらいに強く、そして静かに殺気を放っていた。

「…いつから俺達の事を知ってるんだ？」

ノブツナは恐る恐る尋ねた。相手が何故こちらの名を知っているのか、何故自分を探しているのが分かっていいのか。ドリアンは白髪のはげをさすりながら考える素振りを見せ考え込んでいた。

「久々にこの地に戻ってきたということ、で神心会の独歩氏に挨拶に行こうかと向かっていたところ、君達を見かけてね。武偵が何か用かと後を付けてみたら私を探っているというのを知ったんだ」

気配を悟られることなく後をつけられ、しかも簡単に侵入されたことにしてやられたと睨む。そんな事など気にせずドリアンははげをさすりながら物珍しそうに二人を見つめる。

「これまで屈強な警官や戦いを求める格闘家達を相手にしてきたが…今度は坊や達が相

手だとはな。私もご老体だとなめられたものだ」

「それでも一応武偵なんですけどね…」

いつ仕掛けてくるか、ノブツナは身構えながらドリアンの様子を伺っていた。かのファイター達ならばつたり出会った時が試合開始、もう戦いは始まっている。ドリアンは相変わらずヒゲをさすっているまま。ノブツナはちらりと後ろにいるレキに相手が動いたらすぐに迎撃にまわるよう目で合図をした。

そのノブツナの隙を待っていたかのようにドリアンは動いた。ヒゲをさすっていた手を開き、ノブツナに向けて強く息を吹きかけた。その手から勢いよく飛んできたのは何本もの小さく硬いヒゲの毛だった。目に入らないようにノブツナは片腕で防ぐ。更にドリアンはポケットからライターを取り出し、中に仕込んでいる目視ではとらえにくい特殊繊維のワイヤーを引っ張り出した。防いでいた腕に絡めさせ切断しようとひらりと飛んできたのが見えた。

「レキ!!ソファアの下!」

ノブツナは大声で呼びかけた。後ろに下がっていたレキはソファアの下を探り出し、FN P90を取ってドリアンに向けて撃ちだす。レキがP90を取り出したところをみたドリアンは撃たれる前にライターを投げ捨て後ろへと下がった。ノブツナはLARグリーを構えて追うがドリアンは待ち構えており、仕込んでいた棘付きのメリ

ケンサツクを付けた左手で強烈な拳を速く放った。咄嗟に両腕で防ぐが衝撃までも防ぐことができず腕にミシリと激痛が走り、ブツナは激痛に耐えながらキッチンへと吹っ飛ばされた。

ドリアンは次にレキへと標的を変えて襲い掛かる。レキはP90を撃とうとするが、それよりも早くドリアンは蹴りが振り下ろされた。しかも靴の先端と踵に刃物を仕込んでおり斬りつける勢いで踵落としをした。レキは銃で防ぐがドリアンの力が強く、刃物が次第に顔に近づいてきた。

「……」

「軽く遊びの程度でやっているのだが……実に残念だよ」

ドリアンはつまらなさそうに見下す。独歩や神心会の連中ならまだしもこんな子供が相手では楽しめない。世も末だため息をつき、止めを刺そうと力を込めてもう一度叩き込もうとした。

その時、ぞくりと後ろから殺気を感じた。振り向くとノブツナが刀を引き抜いて斬りかかろうとしてきていた。刀が振り下ろされる寸前にドリアンは身をかわす。刀は空を切るが、はらりとドリアンのヒゲと髪の毛が舞い、服に斬られた跡がうっすらとついていた。その刀の速さと今のノブツナの込められている殺気にドリアンは嬉しそうな笑みをこぼす。

「そうだよ。これだ！これぐらいの勢いで来てもらわないと！」

「うるせー！てめえをまずい病院食しか食えなくなるようにしてからとっ捕まえてやるからな！！」

苛立つて怒っているノブツナに対し、ドリアンはニツと不敵な笑みを見せる。かつて戦った独歩氏程の殺気とまではいかないがそれでも格闘家達の他にこんな殺気を込めた相手がいたことが嬉しかった。

ドリアンは楽しみながらノブツナが振るう刀を刃物の付いた靴で防ぎ、躲しつっ後ろへ下がり、更に挑発していく。

「さあもつと、もつと殺気を込めて！！そうでないと私を倒せないぞ？」

「うるせえよ！！あとてめえはもう詰みだ！」

ノブツナが苛立ちながらドリアンを睨んで告げる。その瞬間に顔に弾丸が掠めた。飛んできた先を見ればレキがドラグノフを構えて狙いを定めていた。気付けば自分がいる場所は玄関へと続く長い廊下。

「部屋に逃げ込んでも袋のネズミ。踵を返して逃げようとしてもレキがお前のアキレス腱を射抜いてダウン。観念してお縄につけ！」

ドリアンは口笛を吹き、無言で狙いを定めているレキと刀の切っ先を向けているノブツナを見た後にふつと笑いだした。

「成程……私が先ほど言った事は謝ろう。君達は殺す勢いで戦いつつ、殺さないようにしているのだね」

「まあ一応武偵法9条があるもんでな」

日本では武偵法9条で武偵は殺人を禁じられている。半ば皮肉を込めてノブツナはぶつきらばうに返す。しかし、ドリアンは愉悅な笑みをこぼした。

「だが……多くの人間を殺めた死刑囚だった私にはわかるよ。二人とも、殺しの経験があるのではないのかい？」

ドリアンの言葉にノブツナとレキはびっくりと反応した。ドリアンはにっこりとしながらノブツナを見つめる。

「特に君は……私に向けた殺気とあの目つき。私が推測するには戦場に出て、多くの人間を殺めたんじゃないかな？」

ドリアンの問いにノブツナは無言のまま、じつと睨んだまま答えなかった。何も言わなくてもドリアンは嬉しそうに頷く。

「よし、決めた。その気にさせるために今度少し派手なイベントを持ってこよう。それまでに私を殺す気でくるか、それとも武偵や司法の誇りに賭けて私を捕まえるのか答えを用意してくれ」

「いや、あんたはここで捕まえる気ではないだけど？」

「……」

「そうかそうか……」

ぶつきらぼうに答えたノブツナと無言で狙いを定めているレキにドリアンは少し残念そうにしながらすぐそばにある部屋のドアを開けた。

「ところで……君達はガソリンがお好きかな？」

ノブツナとレキはすぐに気づいた。ドリアンが開けた部屋から気化したガソリンの臭いが鼻に伝わってくる。間違いなくあの部屋にはガソリンが撒かれ、気化したガソリンが部屋に充満している。

「君達が帰って来るのが遅いから各部屋に撒いたガソリンが気化してしまつてね。流石の私もこれは急いでお暇しなければならぬ」

ドリアンはそう言いながらポケットからM67破片手榴弾を取り出し、ピンに指をかけた。青ざめているノブツナに対してニツコリと笑った。

「それじゃあまた会おう！」

ドリアンは笑顔でピンを引き抜いて部屋へと投げ込んだ。それを見たノブツナは咄嗟に踵を返して駆け出し、レキを姫抱っこして窓を蹴り開けてベランダから海へと飛び降りた。

その数秒後、爆炎を吹き荒らしながら爆発が起こる。あと数秒遅れていたら爆発に巻

き込まれていただろう。海へとダイブし、もくもくと巻き上がる炎と黒煙を見てノブツナはげんなりとした。

「なあレキ、修理費って請求できるかなこれ…?」

「隣にも被害が出ているようですから難しいですね」

「お前のUAV、全然役に立たなかったぞ」

「なん…だと…」

武偵寮で爆発が起きたという事で他の武偵達が駆けつけ、びしょ濡れのまま事情聴取を受けたノブツナはムスツとした顔で野次馬に紛れていたジークに文句を言った。しかしジークは全く反省していないようで他人事かのようにテヘペロとお茶目に返す。

「メンゴメンゴ。こんな時もあるさ」

「ぶん殴っていいよな?」

ノブツナはすぐさまジークにげんこつをいれる。人を探すUAVでさえも見つけることができなかつたことよりも、すんなりと武偵寮に侵入されるほどのセキュリティの甘さに舌打ちした。このままでは学園にもあつさりと侵入されるに間違いはない。

「自慢のハワコネ社の製品でも見つけるのは難しいか…やっぱ鳩を呼び戻して捜査するしかねえか」

「ああそれよりもなんだが…我がハワコネ社のUAVには色々な探知機能が搭載しててな。丁度この寮の辺りを飛ばしたら、部屋に盗聴器が仕掛けられていたことが分かったぞー！」

ドヤ顔して自慢してくるジークにノブツナは面食らった。

「は？俺の部屋にか？」

「いや。お前の隣、キンジの部屋だな。そりやあもうすつごい数。面白そうだったから逆探知も試みたんだ！それからキンジは何処にいるか探したら、白雪ちゃんと浴衣デートしてやんの！」

ノブツナはキンジの警戒の無さに呆れていたが、ふと気づいた。いちいち自慢してくるジークにまさかとノブツナは恐る恐る尋ねる。

「お前、まさかそれに夢中でしばらく飛ばすのを忘れてた、とか言うんじゃねえよな？」
「あつ…」

ふと思いついたかのようにはつとしたジークにノブツナは思い切り頭突きをしてやった。のたうち回るジークにキレ気味に怒声をとばす。

「お前何してんだよ!?!」

もしかしたらその間にドリアンを見つけ、知らせる事が出来たというのに、ノブツナは大きいため息をこぼした。

「はあ…結局何の成果もあげられなかったってか」

ドリアンを探すも、見つける事ができず、しまいには迎撃されて逃げられた。この捜査で得られたのはお隣は盗聴器が仕掛けられていたこと、デユランダも既に先手を打っていたことがわかっただけ。それよりも白雪の護衛もといデートに帰ってきたキングにどう説明しようか悩んだ。

「隣まで爆発の被害が出てるし、どう言い訳すればいいか…」

「ドーナツ作りに失敗したって言えばいいじゃないか？」

そんなレベルじゃねえとツツコミを入れて項垂れる。そんな時、ふとノブツナは思い出す。

「あれ？レキのやつ、遅いな…」

ノブツナは不思議そうにあたりを見まわした。レキの事情聴取もすでに終わっているはずなのに中々戻ってきていない。

「ノブツナさん、こっちです」

キョロキョロしているノブツナに後ろから声がかかる。振り向けば大きなバスタオルを羽織っているレキがいた。しかし、レキも未だにびしょ濡れのままで、濡れた制服がびつたりと肌に引っ付いたままだった。

「あれ？レキ、替えの服とかは…？」

「すみません。どうやら替えの制服も焼失してしまったようです」

レキは無表情のまま鎮火したであろうノブツナの部屋の方へ視線を向けていた。ノブツナもやつちまつたなど遠い眼差しで同じくその方へ視線を向ける。

「あちやー…制服も請求できつかな…というか明日からどうしようこれ」

とりあえず、ドリアンの追跡を続けつつもう一度対策を立てなければならぬ。直ぐにでも何処かで鳩を呼び戻して話をしようと考え込む。移動先を決めたノブツナはレキに伝えようとチラリと見ると濡れた制服を脱ごうとしていた。ぎよつとしたノブツナはすぐに引き留めた。

「ちよ!?!何してんの!?!」

「いえ、濡れたままではいけないので脱いで水気を取ろうと…」

「うん、わかるけどさ!?!他の人達が見てるからやめような!?!」

事情聴取で来ている教務科の他に、爆発を聞いてやってきた野次馬や他の武偵達も来ている。こんな面前で脱がさせるわけにはいかない。写真を撮ろうとしているジークを殴ってからレキを説得する。

「なら…ノブツナさんだけの時ならいいのですか?」

「うん、そういう問題じゃなくて…いや寧ろ嬉しいけど、やっぱだめだからな!」

ノブツナはこの先大丈夫かと頭を抱えた。

14話 O Toi La Vie ②

「よし、じゃあ最初から改めて整理するぞ」

ノブツナは熱いコーヒーを啜りながらドリアン追跡の為、情報を1から整理してまとめようとした。始めようとした矢先にジークが手を挙げる。

「ノブツナ！おうどんたべたい」

「よし、殴られたいようだな」

ひとまずやる気があるのかとツツコミを入れたのでジークに一発げんこつを入れた。

「…じゃあ気を取り直して（ry）」

ジークは懲りないようで再び手を挙げた。これ以上話を遮らないでほしいと睨みをきかすが動揺せずにジークはドヤ顔で語りだした。

「ところでノブツナ、レキに衣類を渡したんだが…どう思う？」

にやにやしているジークが指をさす方向にノブツナは視線を向ける。学校の制服が乾くまでの間、ジークが渡したのは体操服。体育座りをしてドラグノフを抱えているレキはキョトンとして首をかしげた。それを見たノブツナはにんまりとする。

「すごく…かわいいです」

「だろお？本当はブルマーにしたかったんだが、そこはベタにはせずぴっちりスパツタイプを穿いてもらった！」

「ジーク、でかした！ちよつと保存用に一枚撮っておこう…」

ノブツナとジークはどこぞのエロオヤジのようなゲスな笑顔をしながら写真を撮ろうとした。そんな二人にげんこつが下された。のたうちまわる二人を見て、げんこつをいれた本部は呆れたように溜息をついた。

「まったく…人の道場で何をしているんだお前たちは。というかなんでここで集まったんだ」

ノブツナ達が集まった場所はノブツナの師匠である本部以蔵の道場。頭をさすりながら答える。

「師匠が道場なら安全って言ってたし、それに地味そうですからうってつけかなーって」
「確かにそう言ったが相手はそうはいかんぞ…って地味とはなんだ!!」

そこから暫く道場内でノブツナと本部の武装鬼ごっこが始まった。

「ういーっす！鳩ちゃんがお土産のメロンパンを持ってきたツスよー。ってなんでノブちゃん縛られてんです？」

鳩が袋に入ったメロンパンを沢山持つて道場に入ると道場のど真ん中でグルグルに縛られていたノブツナがいた。レキはじっとノブツナを見つめ、ジークは腹を抱えて爆笑しており、状況が掴めないのが鳩はきよんととしていた。ノブツナは芋虫のように動きながら鳩に助けを求めた。

「そんなことより助けて!!」

「はいはい、仕方ないツスねー。そんなことより進展はありました?」

「レキのコスプレは超絶カワイイ」

「うん、進展は期待できないようっすね…」

ドヤ顔で答えるノブツナに鳩はそんな気がしたと呆れながら縄を解いてあげた。

「まだ整理ができていない。ぶっちゃけつてと武偵校内のセキュリティをどうにかしろと愚痴ってるだけだが…そっちの仕事はどうだ?」

「ノブちゃんんの報告通り部屋に盗聴器が仕掛けられていたとアリアに報告すると、アリアは『もし白雪が誘拐されたと仮定してそれが可能な時期と場所。攫った後逃げるのについてつけの場所を探してくれ』つて。遠山を囿にしてデュランダルをおびき寄せるみたいツスよー」

ノブツナはそれを聞いて低く唸る様に考え込んだ。アリアはただ癩癩を起してむやみやたらに銃を引き抜いて撃ちまくるだけではないと感心した。後は彼女の直感と行

動に遠山がどう合わせていくべきか、それさえ合えば馬が合うだろう。そして鳩はニシシと笑いながら付け加えて報告した。

「それからアリアも武偵寮襲撃事件の事を聞いて『協力してもらってるからあんたの一件も手伝ってあげたくないわよ』ってさ」

「けっ…他人事のように言いやがって」

ノブツナは渋る様にそっぽを向いた。そつちはただ誘拐犯から白雪を守りながら捕まえるのにこちとら脱獄した殺す気満々の元死刑囚ことドリアンを追っている。しかも今度は何をやらかすのかわからない。

「確かドリアンは二等兵として戦後の東京に来ていたんだっけな…かつて日本兵やアメリカ兵達のたまり場や集会所だった場所を洗い浚い探そう。鳩、頼めるか？」

「はいー！ドリアンがアジトにしていた場所や戦後、アメリカ兵たちがたまり場にしていた地下や廃屋とかはピックアップしとくツスよ」

鳩はメロンパンを頬張りながら笑顔で手を振った。次にノブツナはジークに視線を向ける。

「ジーク、レキに弾薬の提供とドラッグノフのオーバーホールができるように用意をしてくれ。それから明日からお前も連れて行く」

「キタコレ!! ついにオレの出番だな!」

やっと出番が来たとジークは大はしやぎをしてウォーミングアップをし始めた。まだ早いとノブツナはツツコミを入れた。これで大丈夫なのかと軽くため息をついた。ドリアンが言っていた『イベント』とやらはどういうことなのかさっぱり検討もつかない。

「……」

ノブツナは怪訝そうな面持ちで頭を掻いた。今でもドリアンに言われたことが頭から離れない。今は言われたことと昔の自分を思い出すのはやめようと頭を横に振った。

「鳩、甘くないメロンパンとかねえのか？」

「何言ってるんツスか。甘くないメロンパンとかもうメロンパンじゃないつすよ」

「……」

レキは無言のままビルの屋上から辺りを一望していた。風が体を突き抜けるように吹き、髪やスカートが靡く。風向きや風の強さを測定し、屋上のから見える景色を構いもせず、何も考えていないように無言でドラグノフのスコープを覗いた。

「おっつー！レキレキ、ご苦労さんツス！これ饞別ですよー」

レキの下へ鳩がコンビニの袋を携えながらにこやかにやってきた。鳩は笑顔で袋からカロリーメイトを取り出すがレキはこちらに振り向くことなく無言でスコープを覗

いたまま動かなかった。

レキがスコープで覗いている先にはノブツナとジークが廃屋へと入っていくところが見えた。鳩がピックアップしておいた戦後アメリカ兵がたまり場になっていた場所の一つであり、レキは狙撃かつその近辺の見張りをしていた。

「アタリが出たらいいッスねー」

レキの隣で鳩は他人事かのように能天気コンビニで買ったメロンパンを食べながら眺めていた。実のところこれで3件目になる。ノブツナとジークのツーマンで突撃し、レキが後方支援、鳩がレキの護衛とナビをする組み合わせで行っているが手応えは無く、何か手掛りになるものでもいいから見つかってくれとノブツナは少しやつれ気味に愚痴をこぼしていた。

「ノブちゃん焦り過ぎッス。もう少し状況を楽しめばいいのに」

考えすぎだと鳩はケラケラと笑った。その横でレキは終始無言で微動だにしていなかったが、ゆつくりと口を開いた。

「鳩さん…少し聞いてもいいですか?」

「おおっ!? あ、あのレキレキがうちに質問ツスか!? 何でも聞いてくださいな! 好きな相手を墮とすテク? それともうちのスリーサイズっすか?」

突然レキが尋ねてきたことに鳩は嬉しそうに驚き、ハイテンションかつオーバーリア

クシヨンで身構えた。そんな鳩とは正反対でレキは冷静に、静かに尋ねた。

「…ノブツナさんの過去をどこ存知ですか？」

その言葉を聞いた鳩は無邪気さが無くなり真剣な眼差しで軽く笑った。

「へー…意外つすね。あのレキレキがそんな事を聞くなんて。何故です？」

「ノブツナさんは多くの人間を殺めたと言われました。それは本当なんですか？」

鳩の方に視線は相変わらず向けておらず、ずっとスコープを覗いたままレキは聞いてきた。鳩もレキの方に視線を向かず、屋上の景色を一望した。

「…レキレキは気になったんですね。率直に言いましょう。答えはYesッス」

鳩の答えにレキは初めてスコープから離れて鳩の方に視線を向けた。レキは驚く表情はなく、ただ物静かに鳩を見つめていた。

「確かにうちはノブちゃん過去の過去を本人から教えてもらったッス。そうじゃなきやうちは組んでませんしね…ただ、よっぽど面白くない話になりますよ？いいっすか？」

鳩はちらりと視線を向けた。レキは無言で静かに頷く。

「レキレキは聞いたことありますか？『武器の子供達』を」

「…数年前、メディアにあげられ問題になった中東やアフリカにいる子供の兵士達のことですわね？」

事の発覚はとある中東のアメリカ兵の駐屯地に武装勢力が侵入してテロを起こした

ことによる。このテロは深夜に勃発したが一夜で鎮静させることができた。侵入した武装勢力10名の遺体を回収したが、全て10代にも満たない幼い子供達だったのだ。

そんなニュースに衝撃を受けた兵士達やメディア、戦場カメラマン達が足を踏み入れ深く探っていくと中東のみならずアフリカ、内戦や内紛が起きている地域などの各地に同じような子供の兵士達が戦場に出て戦い、テロを起こす武装勢力の一員にもなったのであった。

「メディアや政府はそれを問題視して無くそうとして取り組んでいったけども、結局メディアも取り上げなくなり年を重ねるにつれて消えていった」と、まあ『武器の子供達』ウエボンズチルドレンとはそんな5歳〜18歳代ぐらいの子供の兵士達です」

「それとノブツナさんどう関係が…?」

『武器の子供達』ウエボンズチルドレンについては聞いたが、ノブツナの過去とどう関わっているのかレキは気になっていた。鳩は頷いて話を続けた。

「ここからがノブちゃんやんが教えてくれた事です。11年前まだノブちゃんが6歳の頃、4人家族でベトナムに海外旅行に行き家族とベトナム観光を堪能しいざ帰ろうかっという最終日の夜の事、ノブちゃんファミリーはそこで運悪く強盗殺人に遭うツス。父は銃で頭を割られて無残に殺され母と姉はレイプされて殺され、いざ自分が殺される番になったと思いきや、こいつは金になると言われてノブちゃんは拉致され人身売買され

て奴隸として中東へ連れていかれたツス」

「気軽にノブツナの過去のことをさらっとという鳩の話にレキは無表情に見えるが驚いたように目を見張っていた。

「中東へと渡ったノブちゃんはそのところである武装勢力へと買われるツス。連れていかれた場所は薄暗く、血なまぐさく、不衛生で汚くて臭い場所だった。そこにはノブちゃんと年齢が変わらない子供達や自分よりも年上の子供達がいて、爆弾の製造や銃器に刀劍の扱い方、そして人の殺し方を教えられていたと」

「つまり……武器の子供達の養成所ですね」

「その通り。ノブちゃんはそこで爆弾の製造や銃器や刀劍の扱い方と人の殺し方を学ばされ、戦場へ、テロを行う場所へと駆り出された」

「ノブツナさんは怖くなかったのですか……?」

レキの問いに鳩は首を横に振った。

「『泣いたら殺される』と言ってたツスよ。泣きわめたり、恐怖を抱いて怖がる子は使ってもらえないというわけでその場で殺されるか、犯されて殺されるか、犬の餌にされるか。それに常日頃戦場に出るわ、地雷原の荒野を駆けて近くで走っていた子が地雷を踏んで肉塊になったり、戦場で隣にいた子がスナイパーに頭を吹っ飛ばされてアートの

なるわ、暗殺を失敗して捕まって拷問されないように必死に逃げたり、いつ自分が自爆テロを起こす番にされるか：恐怖を捨ててただ無情に引き金を引いて戦ったと」

レキは静かに頷いた。彼女の瞳には驚きの色が見える。彼がそんな過去を持つていたなんて知らなかった。

「ですが…そのノブツナさんがどうして日本に戻れて、武偵に？」

「転機はノブちゃんに5年後、11歳の頃です。ノブちゃんは他の子供の兵士達と他の武装勢力に雇われてアジトで武器の準備をしていた時の事、突然外が騒がしくなったとノブちゃんは気になっていると…そこへ『奴』が現れたんすよ」

「奴…？」

レキが首を傾げると、鳩はゲスな笑みを見せて答えた。

「『地上最強』と呼ばれた男：範馬勇次郎です」

範馬勇次郎。『地上最強の生物』と恐れられ、警察や武偵、更には自衛隊等、国の司法も兵力でさえ恐れられている化け物。なぜそんな怪物がそんなところに現れていたのか、鳩は話を続ける。

「『運動しているところに目障りなのがいたから壊そう』っていう理由でその武装勢力を潰しにかかったんですって。言葉通り、勇次郎に壊滅され、大の大人達は抵抗して殺

され、残りもノブちゃんを含めた子供達だけ。子供達は初めてみる怪物に蜘蛛の子を散らす様に逃げ、目の前でぼったり出会ってしまつて立ち尽してしまつたノブちゃんだけに。そんな怪物にノブちゃんは：勇次郎の手に噛みついた」

あの勇次郎に噛みついたと聞いてレキは呆氣にとられた。どうしてそんな事をしたのか、自殺に近い行為に違いない。

「今までため込んでいた恐怖と怒りが爆発して咄嗟に出てしまつたと言つてたツスよ。指を食い千切るぐらいに、歯が折れるかもしれないぐらいに噛みついたけども無論、勇次郎には無駄だった。案の定、ノブちゃんは勇次郎に思い切りビンタされてノックアウト：自分は死んだかと思いきやノブちゃんは目を覚ますと勇次郎に担がれて空港に連れてかれていたツス。なぜ自分が殺されずにいるのか分からなかつたところ、勇次郎は『ガキの癖にいつちよ前に持つていた殺意とその眼が気に入つた。教育してやる』とか言つて日本へ。徳川財閥のコネで新しい戸籍と名前を与えられ、ノブちゃんは本部以蔵の道場へ預けられあれやこれやと教えられたそうつすよ。そして徳川光成の希望と『自分の力で何ができるのか』、答えを見つけるためにノブちゃんは武偵に入ったツス」

これがノブツナの過去：鳩はそう語り終えると大きく息をつき、珍しそうにレキを見つめた。

「ほんと珍しいつす…あのレキレキが人の事を気にするなんて。明日は雪が降りそうッ

スね」

「『風』がノブツナさんの過去を知りたいと言ってきたので…」

「『風』ねえ…そっちも大変そうっすね」

レキが言う『風』について鳩はそれ以上何も言わず、ビル景色の方へと視線を変えた。レキも死線を変えてスコープを覗く。

「…でもこれで納得しました。私は『銃弾』でノブツナさんは『銃』。だからノブツナさんは私を必要としているのだと」

「うーん…それはちよいと違うと思うツスよ」

鳩は苦笑いをして首を横に振った。否定されたレキは何が違うのかと再び鳩の方へと顔を向けて不思議そうに首を傾げた。

「ノブちゃんなら『じゃあ誰が引き金を引くんだ』と笑って言うツスよ。ノブちゃんはそんなややこしい事を抱えず、ただ単純にレキを『大事な人』だと思ってレキの力を必要だとしてますよ」

「人…ですか。私は一発の銃弾。人の心とは無関係です」

銃弾は人の感情も心も持たない。そう言い張るレキに鳩は笑ってレキの額に軽くデコピンをした。

「もう鈍いつすね…うちの経験上、自分を『モノ』だとか『心や感情が無い』とかいう

人間はいないっすよ。誰も心や感情をちゃんと持っていて、それをただ隠して偽って着飾っているだけ」

「そう…なんでしょうか…?」

「その通りッス。レキレキは素直になるべきっすよ」

そう言い終わると鳩は再びコンビニの袋からメロンパンを取り出して美味しそうに食べ始めた。

「ヘックシヨオオンツ!!」

誰かが噂をしているのか、埃っぽい部屋にいるからか、ノブツナは大きくくしやみをした。鳩がピックアップしたこの廃屋ももぬけの殻のようでハズレのようだ。警戒を解いたノブツナはため息をついて頭を搔く。

「ここもハズレか…これまた見つからないな」

「またか!!もう疲れた!」

未だに戦闘がないとジークは駄々をこき始める。駄々をこねたいのはこつちだとノブツナは項垂れた。このままだとまた何も成果を得られない。ジークがプンスカしながら後ろの壁を叩こうと手を押すと、押戸のように開いた。

「マジか、隠し部屋か。ジーク、でかした！」

「H A H A H A !!」どうだ、そこを予測して駄々をこねたんだぞ！」

ドヤ顔で自慢するジークを無視して隠し部屋へと入る。隠し部屋も埃まみれだったが、明らかに埃が被っていない机と最近使ったと思われるランプ、半田鏝や空き瓶、炸薬が抜かれた大量の銃弾や砲弾が置かれていた。そして机の下にはキャンデーの包み紙が2つ捨てられていた。

「…手掛りは見つかった」

昨日まで、若しくはついさっきまで、ドリアンはここに潜んでいた。そしてここで何をしていたのか見当がついた。

「IED…即席爆弾を作ったのか」

15話 O Toi La Vie ③

「手掛かりはIED、即席爆発装置を作っていたことがわかったただけだ」

ノブツナは少ししけた面でラーメンを啜る。そんなノブツナに対し、相席で座っているレキは黙々ともやしが山盛りのデカ盛りラーメンを食べていた。二人はいつものラーメン屋『一文字百太郎』にていつものようにラーメンを食べていた。無論、ノブツナのおごりである。

「問題はその爆弾をどのくらい作って、いつ、どこに仕掛け、爆発させるかだ。ドリアンと言っていたイベントとかいうのも未だに分かんねー」

あの後、大量の基板も見つかり、ドリアンは時限式かもしくは携帯やりモコンを使って爆発させるタイプの即席爆破装置を作ったと思われる。ノブツナは頭を抱えながら唸る様に考え込む。一方のレキは気にもせず黙々と食べ、替え玉を注文していた。

「また寮に忍び込んで爆弾を仕掛けるのか、それとも武偵校に忍び込んで教室に仕掛けてんのか、色々と考えなきゃなんないんだけど……どうしても腑に落ちないことがあるんだ」

「腑に落ちないこと、ですか？」

レキは箸を止めて訝しそうに首を傾げているノブツナを見つめた。

「かつてドリアンはかの地下格闘技場の格闘家達と闘つて、一度も勝負には勝っていない事、自らの敗北による自分の人生の矛盾に精神が耐えきれずに幼児退行した。でも再び自我を取り戻し、こつちに戻ってきた」

敗北を知りたい。ただそれだけの為に戦い、勝者となっていない自らの矛盾に耐えきれずに堕ちていった。その後オリバに連れられブラックペンタゴンの収容所へと収容されていたのだが、今はこうして東京に戻り爆弾を作つて潜んでいる。

「何故、ドリアンは戻つて来たのか。もう一度戦いたいというものの、独歩さん達にリベンジするのか、それともかつて死刑囚と格闘家との戦いを企画し、自分達を完全敗北へと陥れた徳川光成の暗殺なのか、それとも俺への当てつけなのか：目的がさっぱり分からないんだよな」

敗北を知りたい為に身を投じて戦つたのに本当は一度も勝つたことがない敗者であり、もう勝つことは無いと自覚し敗北したのになぜ再び戻つて来たのか、何をするつもりなのか、ドリアンの目的が分からない。何故自分達の前に現れたのか、何故爆弾を作つたのか、ドリアンは何をしようとしているのか見当もつかない。すると悩みに悩んでいるノブツナにレキは静かに口を開いた。

「ノブツナさん、私は死刑囚と地下格闘技場の格闘家達の戦いは見た事はないので分か

らないのですが：ドリアンは戦いを望んでいるのではないのでしょうか？」

ふとそう聞いてきたレキにノブツナはきよとんとして見つめた。こうもレキが自ら乗つて来るとは思いもせず、珍しいと目を見張る。

「二度私達に襲撃してきたドリアンは戦いに純粹に興じていたように見えました。サシとの勝負ではなく殺し合い、または戦場のような無法の戦いを欲していると：」

レキはそう言い終えると視線を下へとわざと逸らした。戦場と言う言葉でノブツナの過去の話を思い出したからであり、鳩から聞いたことを隠した。もしかしたらドリアンはノブツナの過去を知っているのかもしれない。だから彼の前に現れたのだろうか、レキは静かに考え込んだ。一方のノブツナはレキの話を聞いてふと思ひ出す。

確かにかつての死刑囚達と格闘家の戦いはルール無用の何でもあり、どちらかが倒れば負けの戦いで、彼らは純粹にこの闘争に興じていた。しかし警察や武偵といった司法の連中やバスケット・オリバと範馬勇次郎の乱入、更には一部のメディアにも見られ、最終的にはあやふやなまま戦いは終わっていった。

この闘争の中で、ドリアンは最後は敗北と勝利を受け止め、今までずっと勝ったことがないことを知り、勝者になることを望んで挑み、敗北していった。ならば今のドリアンは何を望んでいるのだろうか？

純粹な闘争か。そうとなるならば今の彼には戦いのルールやら司法やら縛るものや

遮るものは何もない。ただ単に一般市民も周りもお構いなし、勝者や敗者などこだわりを捨てた戦いを楽しもうというのなら……

「死人も出ようが関係ない戦いを望んでいるというのなら……一つ思い当たるぞ」

ドリアンは何を望んでいるのか、そのために何をしようとしているのか、はつきりしてきた。彼が言っていたイベントとやらも一体何なのかも見えて来て、答えがすべて繋がった。

「俺への挑戦か……受けて立とうじゃねえか。レキ、そうと決まればすぐに動くぞ」

「すみません、その前におかわり頼んでもいいでしょうか？あと餃子を5人前も……」
「やっぱり食べすぎいい!？」

こうしてまたしてもノブツナの財布から野口と諭吉が消えていった。

アドシアードが開催されると武偵校は一般公開され、会場には報道陣や一般市民等々多くの人であふれていく。武偵校の生徒達はアドシアードに出場する選手の他、受付や会場の案内または屋台で販売を行っている。生徒会のテントでは白雪がてきぱきと他の生徒達に会場の準備や競技のプログラム等々指示をしており、その隅で彼女の護衛を務めているキンジが退屈そうにしていた。

あれからずっと白雪の護衛をしているのだがデュランダルとやらは一向に現れない

し、彼女が攫われるような事態にもなりそうにない。ましてや彼女の周りには他の生徒達もいる。そろそろ受付の交代する時間にもなるしここは周りの生徒達に任せておけば大丈夫だろう。キンジは白雪に一声かけてその場を離れようと動いた。

「おまえ、まさか職務放棄するわけじゃねえよなあ？」

突然背後から声を掛けられキンジはビクリとした。焦って振り向くとノブツナが鬼の形相で睨み付けていた。

「の、ノブツナか…びつくりするじゃねえか」

「で、まさかボディーガードをやめようとしなかつたか？」

「アリアの言う存在するわけがないデュランダルの事だろ？白雪の周りには俺の他にも生徒がいるんだし、任せても大丈夫だろ」

どうせ白雪に対する嫌がらかストーカーの仕業だろう。白雪の護衛をしても変わつたことは（とりあえず）無かつた。キンジはムスツとして告げるが、ノブツナはすぐさまキンジに頭突きを入れた。

「お前馬鹿なの？死ぬの？誘拐犯はそう気が緩んだ隙を狙って攫つてくんだよ」

「いつてえ…だ、だからと言ってデュランダルのこの学園に忍び込めるわけが…」

「寮に簡単に忍び込んで俺の部屋に入つてガソリンまいて爆発させやがるほどセキュリティがザルだぞ？そんで今は一般公開させて簡単に紛れ込めちゃうくらいのザル警備

だぞぞ？」

キンジは「あつ…」と口をこぼす。先日にもブツナの部屋が爆発された時はまた部屋の修理をしなきゃと項垂れていたが、寮に忍び込んでブツナの部屋に容易く侵入した者がいるというのならばこの会場にすでに侵入しているのかもしれない。

「教務科は事態が起きてから動くから頼りにならない。今の白雪を守れんのはお前だけだぞ？自分の務めの事の重大さを理解しろ」

「つたく、わかっただつての…で、サボっているお前は何してるんだ？蘭豹先生が怒鳴り散らしながらお前を探していたぞ？」

キンジは面倒くさそうに返して話を逸らそうとした。ノブツナも強襲科であり、競技に出場するれば好成绩を得られるというのに当の本人は去年も抜け出してさぼっていた。狙撃科の競技に出場するレキの応援に行くのか、それとも冷やかに来たのかとしかめつ面で様子を見る。

「俺は白雪に校内放送を頼もうと思つてたんだが…忙しそうだし、お前に言伝を頼むわ」「言伝？何を伝えればいいんだ？」

「とりま会場内や茂みに不審物や未開封の缶とか怪しいものがあつたら触らずに直ぐに離れて武偵に報告するよう伝えてくれや」

「不審物？一体なんだ？」

「うん、それIED。爆弾だから」

キンジは爆弾と聞いて思わず驚愕して叫びそうになった。武偵殺しの件で爆弾はもう懲り懲りだったのだが、短い間にまた爆弾に関わるなんて思いもせず頂垂れた。

「なんで爆弾が仕掛けられてんだよ!？」

「それはきつとゴルゴムの仕業…」

「やかましいわ!!」

キンジはノブツナにツツコミを入れる。理子の一件まさかまたイ・ウー関連の事件なのか、本当にデュランダルが存在してデュランダルが仕掛けたのか、会場にいるすべての人を人質にしようとしているのか、キンジは至高を張り巡らせる。

「今は打ちの面子と頼れる後輩とで回収をしている。そろそろ途中経過の報告が来る頃だと思うが…」

『ノブちゃんお待たせーっス!!』

丁度そこへ人混みを掻き分け、重厚な対爆スーツを着こんだ鳩が手を振りながらやってきた。小柄ながらも重たそうな特殊服を着こんだ姿にキンジはギョツとしていた。どこかかと対爆スーツ姿で重たそうに走る鳩の隣には金髪で背の高い少女、強襲科一年の火野ライカがいた。

「二人ともご苦労さん。今のところどうだ？」

『そりやもうヤバイつすよ！ライカちゃんとその友達と手分けして探してたら、缶のタイプやら紙袋に入ってた時限式やら携帯電話を使ったものやら…もう5個ぐらい見つけたツス』

「まさか本当に仕掛けられてたなんて…あたしやあかり達で人が近づかないよう誘導してから鳩先輩が対処してくれますけど、教務科に報告しなくていいんですか？」

「いいのいいの。どうせ先公なぞすぐに動いちゃくれんし。時間内にできるだけ回収しなきゃ」

時間内？キンジは首を傾げた。IEDは時限式、有線式、無線式など様々なタイプもあり対処に時間が掛かる。解除にも時間はかかるのだろうし、ノブツナは何を気にしているのだろうか。

「悪いなライカ、急に頼んじまって。引き続き鳩と協力して探してくれ」

「任せてくださいノブツナ先輩！先輩とのミッションも楽しいし、悪くないですよ！」

『さあうちについてくるつすよ、未来の後輩！爆弾処理はこの鳩にお任せ…って言うてもこのスーツ、重いしムシムシするし、早く全部片付けたいつすー!!』

「文句を言うなつて。俺はドリアン探して忙しいし…キンジが白雪に付きつきりなら問題がない。キンジ、お前が真面目に護衛を務めるかどうか、お前がカギなんだからな？」

「あれ？白雪先輩…いないように見えるんですが…」

ライカの言葉にキンジとノブツナは首を錆びた機械を動かすようにゆっくりと動き振り向いた。生徒会のテントには白雪の姿が無かった。

『あちゃー…遠山が未だに自分から離れないから、ノブちゃんと駄弁っている隙にこっそり出て行ったようッスね』

「おい嘘だろ!?白雪…っ!!」

「落ち着けキンジ!!まずは素数を数えろ」

それどころじゃないとキンジは怒鳴るが、ノブツナは落ち着きながら無線機を取り出し、無線を掛けた。

「レキ、白雪が動いた。対象2として急ぎ探してくれ」

『了解です…ノブツナさん、対象1を発見しました。場所は車輛科棟の船場です』

「でかした。俺はそっちに行く。レキは白雪を見つけ次第キンジに知らせしてくれ」

『わかりました』とレキは答えて無線を切った。ノブツナは続いてもう一度無線繋いで、今度は少し急ぐように声を荒げた。

「ジーク、急げ!!白雪がデユランダルに連れ去られる前にデユランダルを見つけて!!」

『任せろ!!折角の大役だ。見事任務を遂行してみせるぞー!!』

ジークは『H A H A H A』と五月蠅く笑いながら無線を切った。本当に大丈夫かとノブツナは肩を竦める。

「と、いう訳だ。鳩、事態は事を急ぐ。残りの爆弾も探してくれ」
『ラジャツ！人混みのだ真ん中で爆発しない事を祈るつすよ』

状況を楽しんでるようで、鳩はウキウキしながらライカを連れて人混みの中へと走っていった。ノブツナは見送った後、一息ついて焦っているキンジのケツに蹴りを入れた。

「いでっ!?何しやがる!？」

「何ぼさつとしてんだ。お前は急いで白雪を追いかけろ。ジークとアリアがデュランダルを探しているが…お前が白雪を守らなきゃ。デュランダルに連れ去られる前に助けに行け。じゃないと…」

「じゃないと…?？」

「白雪を誘拐したと同時に仕掛けられた爆弾は爆発される。会場の間人も死にまくるし、デュランダルに余計な罪が乗せられちまう」

イ・ウーの一人、デュランダルことジャンヌダルク30世は自慢の魔剣を提げ、車輛科の倉庫の地下で待ち続けた。ジャンヌは確信していた、白雪は単身でここへ来るだろう。言う通りにしなければ遠山キンジを殺す、そんな脅迫のメールをすれば言う事を聞かはず。変装して護衛の者と護衛対象者の信頼関係を崩し、そして仲間で内輪もめさせ

捜査を攪乱、ずっと身を潜み続けて相手を油断させたりと順調だ。

多少、予想外な事もあったが白雪を誘拐するには差し支えない。相手の連携の無さ、学園内の警備の薄さ、全くもって脅威にならない。このまま行けばすぐに遂行できる、ジャンヌはほくそ笑んだ。そうしているうちにこちらに近づいてくる足音が聞こえてきた。恐らく、白雪が言われた通り一人で来たに違いない。

「……?」

しかしジャンヌは不審に思った。明らかにこの足音は物凄く急ぎながら走っている。心なしか足音と共に次第に何かがか叫んでいるような声が聞こえてきた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

この喧しい声は明らかに白雪ではない。喧しい何かはこちらに近づいてきている。ジャンヌはすぐさま魔剣を構えた。

「Die yobbboooooooッ!!」

「誰えええっ!?!」

暗闇から飛び出して来たのは巫女の服を着た白雪、ではなく白い道着と真つ赤な袴を身に着けた金髪オールバックのドヤ顔をした男ことジークだった。白雪でもなくアリアでもなくよく分からない奴とまさかの変化球にジャンヌは思わずギョツとして叫んでしまった。

「むむっ!! 怪しい奴だ!」

お前も明らかに怪しい奴じゃないかとジャンヌはツツコミを入れる。ただのコスプレ外国人なのかそれとも武偵なのか、ジャンヌは警戒しながら身構える。

「貴様、何者だ…!」

「オレはジー…星伽白雪ですわぜ!!」

「嘘をつくな!」

ジャンヌは即ツツコミを入れる。お前のような喧しい巫女がいてたまるか。

「むう…渾身の演技も見破られては仕方あるまい。オレはジーク・ハワード、東京武偵高校2年A組、SSR。好きな物はステーク。好きな女性は銀髪のポニーテールのry」

「そんなことはどうでもいい!! どうしてここに辿りつたのかは分からないが、どうやら貴様は私の邪魔をするつもりのようなだな」

ジャンヌは魔剣の切っ先をジークに向ける。何を考えているのかよく分からないが自分の障害になるのは確かだ。敵意に満ちたジャンヌにジークは不敵に笑った。

「よかろう、オレが相手になつてやる。ノブツナに早く済ませるよう頼まれているからな」

ジークは白い道着を脱ぎ捨てて逞しい筋肉を露わにして拳を構えた。

「白雪ちゃんを攫おうとするなんてこの白雪ちゃんファンクラブ会長のオレが許さん!

エクスカリバー、逮捕してやる!!」

「エクスカリバーじゃない、デユランダだ!!」
ジャンヌはプリンスカとジークを睨んだ。

16話 O Toi La Vie

④

ジャンヌは魔剣を構えて相手の動きを伺う。相手は上半身すっぽんぽんで武器すら持っていない物腰の状態。静かに拳を構えているジークにジャンヌは鼻で笑う。

「ふっ……まさか素手で私と戦うつもりか？」

こちらは氷の能力と鋼を断ち切る魔剣デュランダル。相手の力は未知数だが、ジャンヌは勝てる自信があつた。一方のジークはそんな事は気にもしないようで、静かに闘気を高めていた。

「…武器が持った奴が相手なら霸王翔吼…じゃなかった、えーと…本気で戦わせてもらやう」

戦う前に台詞を考えてないし、しかもドヤ顔で嘯む。緊張感が無いように見えて逆にやる気を削がれてしまう。ジャンヌは手っ取り早くこの邪魔者を片付けて白雪を誘拐せんとジークに襲い掛かる。

「Y h e a r !」

振り下ろされた魔剣をジークは躲して裏拳をおみまいする。ジークの裏拳を魔剣で防ぎ、横薙ぎをして相手を退けさせる。

「凍り付けっ!!」

ジャンヌは魔剣を地面に突き刺す。突き刺した先からパキパキと音を立てながら凍りつき始め、ジークに向かって勢いを増して一気に凍っていく。それに対しジークは恐れる様子もなく右手に力を込める。彼の右手から白く光る何かが見えた。

「レップーケーン!!」

ジークが右手を振り上げると風の衝撃波が地を這って進み、ジャンヌが放った凍てつく氷を相殺させる。自分の技が塞がれたことよりもジークの力にジャンヌは目を丸くさせ、少し驚きながらも鼻で笑った。

「ふっ……どうやら只者ではなさそうだな。鬨気と風を使う^{ステルス}超能力者か。気に入った。星伽の巫女を連れ去るついでにお前も頂こう……!」

「え、っ……まさかデートのお誘い!?それほど私の肉体美が気に入ったか!見よ、この筋肉!」

うん、やっぱりやめとこう。目の前でマッスルポーズをとるジークを見て前言撤回した。こいつはいち早く氷漬けにして見なかったことにしておこう。さっさと白雪を攫い、この場をすぐに去ろう。

「見つけたわよ、デュランダル!!」

自分の背後から大声が聞こえたとともに颯爽と駆ける足音が近づいてきた。振り向

くとアリアがこちらにめがけて日本刀を振り下ろしてきた。ジャンヌは魔剣で防ぎ押し返す。押し返されたアリアは宙返りをしてスタリとジークの隣に着地してジャンヌを睨み付けた。

「デュランダルが学園内で白雪を攫ってバックレるにはうってつけの場所をあちこち探し回った甲斐があつたわね。いい時間稼ぎにだったわ」

「神崎アリア……！何故ここにお前が……！」

「あんたは対象を攫う時、こちらの連携を崩してから攫う。あえて外れて探してたけども……彼がキンジの部屋に盗聴器を隠したのを見つけてくれたおかげでいつ攫ってくるか待ち構えてることができたの」

ジークは嬉しそうに胸を張るがアリアはそれに一向に構わず日本刀の切っ先をジャンヌへと向ける。

「さあ観念しなさい、デュランダル！あんたはあたしが捕まえてやるんだから！」

「ふっ……それで勝つたつもりか？お前なぞ相手にもならん」

「おっと、その前にデートはどこがいい？浅草？秋葉原？それともノブツナの部屋？」

「そんな事はどうでもいい!!ええい、いちいちこつちの気を削ぐな!!」

ジャンヌはもう一度魔剣を地面に突き刺す。今度は先ほど放ったものよりも強い氷撃が放たれる。

「ダブオーレツプーケン!!」

ジークは両手で烈風拳を放ち、迫りくる氷柱を相殺させる。両者の間に氷の破片が飛び散り、その間を縫うようにアリアが駆けてジャンヌめがけて日本刀を振り下ろした。ジャンヌは魔剣で受け止めると一歩下がる。

「そんな鈍で私を倒せると思ったか!!」

魔剣を強く握りしめ、思い切り薙ぎ斬りをする。ガキンツと金属音を響かせアリアを弾き飛ばした。アリアは「きゃつ」と声を出して後ろへと下がる。手は先ほどの受けた衝撃でふるふると震え、持っていた日本刀は上半分がスッパリと切られていた。

「やっぱり噂通り、鋼を断ち切る魔剣というわけね…」

アリアはしかめっ面で持っている日本刀を投げ捨てる。腰のホルスターにある2丁のコルトガバメントですぐにでも引き抜いて撃つてやりたいが、ここは弾薬庫。間違つて風穴開けてしまったらまずい事になる。バリツでどうにかするか、もしくは頼りになるのかどうかわからないジークに頼るかどうか迷った。

「デュランダル!!言われた通り、独りで来た…ってジーク君、アリア!」

アリア達の後ろにジーク達の姿を見て驚愕していた白雪がいた。まさかもう来たのかとジークは目を丸くし、アリアは焦りだした。

「白雪…!?もう、何してんのよバカキンジ!!」

「むっ、このままではまずい。早くデュランダルを倒さねば」

白雪が来たことでこれは好機だとジャンヌはほくそ笑んだ。

「ようやく来たか、白雪。さあ、私と共にこい」

「分かっている…アリア、ジーク君、私を止めないで。デュランダルの言う事を聞かないと…キンちゃんが殺されるの」

「ま、待ちなさい白雪！そいつの言う事なんて聞かなくていい」

「ええっ!?デュランダルってそっち系だったの!?!」

キマワシタワーと叫ぶジークにアリアとジャンヌはずっこける。そういう意味じゃないと何度言えばわかるのか、というよりもなんて緊張感がない奴だと二人は呆れた。

「あんた、今そんな事言ってる場合じゃないでしょ!?!」

「H H H H H、絵にもなるしいんじやないかな?」

「やかましいわ!というか真面目にやりなさいよ!!」

後で終わったらノブツナにどうしてこんなバカをよこしたのか、ありったけ文句を言っただけとアリアは決めた。そんな事よりも白雪は既にデュランダルの言うようになってしまっているし、間違いなくデュランダルは白雪を人質にとつてこちらが手を出せないようにしてくるはず。兎に角やる事は白雪を説得することだ。

「白雪!こんな奴の言いなりになっても何も変わらないわ!!」

「そうだぞー。悪い奴のいう事を聞いてもいいことは無いぞ」

呑気に言っているジークはどうでもいいとして、白雪はゆっくりとジャンヌの方へと近寄っていく。アリアがいくら説得しても白雪は首を横に振った。

「ごめんなさい…私、キンちゃんを守りたいの…」

このままではまずい。こうなれば力尽くでも白雪をこちらに戻すしかない。アリアはジークにすぐにでも飛び掛れるよう目で合図をした。

「白雪!! 待て!!」

白雪ははつとして歩みを止めて声のかかった方へ振り向く。そこへキンジが駆けつけて来たのだった。ようやく来たかと待ち焦がれたのが半分と事態がまたややこしくなると悩むのが半分でアリアは肩を竦めてキンジをジト目で見る。

「キンジ! 遅すぎるわよ!!」

「アリア…悪い。俺のミスだ。ノブツナにこっぴどく言われてわかったよ…」

キンジはすまなそうにアリアに視線を向けて謝る。自分が白雪を守ってやらなければいけないなかった。護衛とか関係なく、大事な人として守ってやらなければ白雪を救う事ができない。普段ならば皮肉を言うキンジが素直に謝ったことにアリアはキョトンとするが少し照れながらそっぽを向く。

「ま、まあ、分かったんならそれでいいわ…兎に角、白雪を助けるわよ」

「さー盛り上がりすぎてまいりました！三角関係って見てて面白いよね！」

「とうかかなんでジークがいるんだよ……」

「絡むとややこしくなるから気にしない方がいいわ……」

にやにやしているジークをキンジとアリアはジト目で流してデュランダルを睨む。

「白雪！こつちに戻ってこい！！」

「さあ観念しなさい、デュランダル！」

キンジ達はすぐにも白雪を助けようと身構える。その時、下の方から大きな爆発音がしたと同時に地価が揺れ出した。何事かと思うと下から勢いよく水が流れ出てきた。

「なんだと……!?爆発にはまだ早すぎる……!」

ジャンヌは内心焦った。仕掛けていた爆弾はスイッチを押せば爆発するはずだったのに急に爆発をしたのだ。しかも思った以上の威力のようで水の流れ出る量が多い。このまま長居してはまずい。ジャンヌは咄嗟に白雪の腕をつかむ。

「はい……っ!!」

人質として連れ去ってやりたかったが、この数ではすぐに追いつかれてしまう。もう星伽の巫女を攫うよりも自身の安全を取るべきだ。途中で彼女を縛り、逃走の時間稼ぎにしてしまおう。ジャンヌはスモークを投げ、そのまま白雪を引っ張りその場から離れていった。

「白雪っ!!この…っ!!」

「キンジ、焦ってはダメ!追いかけるわよ!!」

耳を澄ませ、遠くでバシャバシャと駆けていく音のする方へと走った。白い煙を潜り抜け、気づけば膝の半分まで水位が上がってきた。流れ出てくる水量が多い。二人は急いで白雪を探して駆けていく。

「キンジ!いたわ!」

アリアは白雪を見つけてキンジに呼びかける。白雪は3つの鉄の鎖で体を縛られた。

「白雪、無事か!!」

「…キンちゃん、アリア、ごめんなさい…皆に内緒でデュランダルのいう事を聞かないと学園島を爆発させキンちゃんを殺すと脅されて…いう事を聞くしかなかったの…」

「いいんだ、白雪。俺こそ謝らなきゃなんない。お前を守らなきゃいけなかったのに…助けてやるからな!」

「そ、そうよ。今はあんたを助けるのが先だから」

キンジは白雪を慰め、アリアと共にロックされている錠を解こうとする。だが今の自分のアンロックスキルでは到底外すことができない。一方のアリアも焦っていた。自分分は泳ぐことができないため、どんどん水位が上がっていることを恐れていた。焦るア

リアを見て、キンジはアリアには今逃げているデユランダルを追ってもらおうと判断する。

「アリア、先にデユランダルを追ってくれ」

「そ、そんな。あんた達を見捨てて行くわけにはいかないわよ」

「ここは俺がなんとかすry」

「えい」

「あつ…」

ジークが鎖を気合いと素手で千切り、白雪を自由にさせた。ぽかんとしているキンジとアリアにジークはドヤ顔をする。

「H A H A H A !!ピッキングなどよりも男なら素手でやるべきだぞー」

「「……」」

白雪は苦笑いをし、キンジとアリアはジト目で睨む。そこは空気を読んで欲しい。あとでノブツナに文句を言っておこうと二人は決めた。

「水位も腰まで上がっておるし、水の勢いも増して流されるよりかはマシだろう？さあとも追いかけるぞー」

「ま、まあ…一応良しとするわ」

アリアは気を取り直して、デユランダルを追おうと乗り出す。追いかける途中、ハッ

チが開いた音がしたから上へと逃げたのだらう。鉄の梯に手をかけて登ろうとした。しかし、それを遮るかのようになた爆発が起き、ジークが言っていたとおり流れ出る水の勢いと量が増しだした。勢いを増した水流に白雪が流されそうになり、キンジは咄嗟に身を乗り出して白雪を助け出す。

「キンジ!!」

「アリア、ジーク、先に行つてくれ!!」

「おう! 任せておけ!」

ジークはアリアの襟を掴んで上へと投げた。上への階へと投げられたアリアはギョツとするが猫の様に着地をする。後から登つてきたジークにゲンコツを入れた。

「ちよつと! 驚かせないでよ!!」

「そうかつかするでない。あまり怒ると首が切れるぞ?」

ジークに言われてアリアはハツとする。目を凝らしてみると薄っすらと見えにくいケブラー繊維のワイヤーが自分の首の近くに張られていた。背中に隠していた日本刀を引き抜きワイヤーを断ち切る。

「見る目があるのか、ふざけているのか、よく分からないわね。それよりもデュランダルを追うわよ」

「…やはり追つてきたか。しつこい連中だな」

暗い通路からゆらりとジャンヌが姿を現した。ふんと鼻で笑ったアリアは日本刀を構える。

「それが私の売りよ！兎に角あんたをとつ捕まえて罪を償ってもらおうわ！」

「ふっ…リュパン4世が言っていたとおりの威勢がいいな。その姿は我らとよく似ている…そう、美しく勇敢な一族、ジャンヌ・ダール」

「ジャエーケン!!」

ジャンヌが言い切る前にジークが気を込めた肘打ちで突進してきた。ジャンヌは驚いて油断してしまい、直撃をした。受け身を取りジークを睨み付ける。

「く…卑怯だぞ!!」

「卑怯もらつきよもあるもんか！なんか話し長くなりそうだから隙をついてやったただぞ」

「いいだろう…!!ならばこのジャンヌ・ダルク30世の…オルレアンの氷華となって散れ!!」

ジャンヌは怒りを込めてジークへと襲い掛かる。さらつとジャンヌダルクだと名乗ったことにアリアは驚いていた。

「いや、ちょ、ジャンヌダルク?!しかも30世?!というかあんたそれでいいの?!」

17話 O Toi La Vie ⑤

ジャンヌは細かい事は気にせず剣を振るい、ジークはその攻撃をひたすら躲していた。

「どうした？先ほどの勢いがいいぞ！」

一行に攻撃をしてこないジークにジャンヌは不敵に笑う。一瞬の隙を見つけ、ジークに向けて突きを放った。しかし、ジークはそれを待っていたと言わんばかりにひらりと躲し、ジャンヌの腕を掴んだ。

「Too easy!!」

ジークは当て身投げをしてジャンヌを地面へと叩きつける。更に追い打ちをかけるかのようにもう一度投げ飛ばす。ジャンヌは受け身を取り、よろめきながらもドヤ顔で構えるジークを睨み付ける。

「くっ…本当にふざけた奴だ…」

「H A H A H A !! オレはいつでも真面目だ！」

「真面目に見えるか!!」

ジャンヌは怒鳴りながらジークへと剣を振るう。魔剣には氷の冷気が帯び、躲すたび

に凍てつくほどの冷たさがよぎった。先ほどよりも勢いが増している。いち早く邪魔者を始末するつもりだ。ジャンヌの殺気にジークは不敵ににやりと笑う。

「よかろう！ならばオレも本気の本気でいくぞ！デッドリー！」

ジークは拳を強く握りしめ力を込める。高まった闘気をジャンヌへとぶつけようとした。しかし、それを遮るかのように再び下の階から爆発音とともに大きな揺れが起こる。下の階にはまだキンジと白雪がいる。彼らは無事なのかとアリアは気をそつちの方へ向けた。ジャンヌはその隙を見逃さなかった。

「隙だらけだぞ、アリア!!もらった!!」

魔剣に冷気を帯びさせ振るう。青白い光が辺りを凍りつかせながらアリアへと飛んでいく。とつきの事でアリアはすぐに動くことができずにいた。

「しまっ……!」

「ぬうううんっ!!」

アリアの前にジークが立ち、両手で魔剣から放たれた冷気を防いだ。気合いの掛け声とともに腕を振るって弾く。何とか防ぐことはできたものの、ジークの両手は白い氷がまとわりつき、凍瘡を起こし始めていた。

「あ、あんた大丈夫なの?!」

「ふん、心頭滅却すれば火もまた涼し……って、冷たっ?!いたっ?!」

「それ火じゃないから?!」

使い方を間違っているとツツコミを入れたかったが今はそれどころじゃない。ジークは凍傷で素手ではもう戦うことはできないし、相手は異能者。ただの武偵では相手が敵しい。ジャンヌはこちらが有利になったと確信し不敵に笑った。

「もうその手では戦う事は出来ん。これで勝負あつたな」

「なんの! 気合いを込めれば治るし、まだ足があるぞー!」

不利な状況になつているのにそれでも勝つ氣でいるジークにジャンヌは額に青筋を浮かべて睨み付ける。なんて減らず口の男か。これ以上耳障りになるので一気に片付けようと襲い掛かる。

「デュランダル! これ以上はさせないよ!」

暗い通路からアリアとジークの間を通り過ぎ、白雪がジャンヌに向けて刀を振り下ろした。ジャンヌは魔剣で防ぐが、白雪が強く押しつけてゆき弾いて後ろへと下がった。

「アリア、ジーク君、遅くなつてごめんね! 後は私に任せて!」

白雪は先程までの弱気だった様子が一変、真剣な表情になり覚悟を決めた様子だった。これまでにない強気の白雪にアリアは驚く。ジャンヌはもう一度魔剣を振るおうとするが、今度は暗い通路から銃声と共に弾丸がこちらに飛んできた。舌打ちして魔剣で銃弾を防ぐ。

「アリア、ジーク！待たせたな」

少し遅れてベレッツタM92Fを構えたキンジもやって来た。こちらもちらで、先程との様子と雰囲気が変わっていた。そんなキンジにジークは納得して頷き、アリアは少し顔を赤くして頬を膨らませる。

「もう…!!キンジ、心配かけさせないでよね!」

「ふ…どうやらお前も本気とやらになったようだな」

キンジの『本気』についてジークは予めノブツナから聞いており、ノブツナ曰く『キンジは色気に弱い、興奮したり、女関係のヤマとなると人が変わったかのように強くなる』と聞いていた。下の階で何かあったのだろうか、ジークは気にはしなかった。

「ジーク、手は大丈夫なのか?」

「何、動かす程度なら問題は無い。それはともかく、お次はどう出るのだ?」

「俺達は白雪の援護だ」

今は白雪がジャンヌと剣を交わして戦っている。青白い冷気帯びた魔剣と赤い炎と熱気を帯びた刀がぶつかり合い激しい音をなり散らしていた。

「二人とも、白雪は全力でぶつけて戦ってる。タイミングを間違わないようにいくわよ」
アリアはキンジとジークに援護に出るタイミングを話す。SSR、異能者同士の戦いは長くはならない。全力をぶつけた戦いならどちらかがガス欠を起こす。それまでの

間に白雪は後一撃だけ全力でぶつけるだけの力を出す隙を伺っている。彼女がそれを出せるよう、こちらがタイミングを間違つてはならない。ぶつかり合う剣戟も次第に白雪が押されていった。ジャンヌは魔剣に力を込め、魔剣は空色に光り凍てつくほどの冷気を帯び始めた。

「その程度か、星伽の巫女!!このまま銀氷となつて散るがいい!!」

「今よっ!!」

アリアは掛け声とともに駆け、それに続いてジークとキンジが続いていく。こちらに近づいてくると気づいたジャンヌは白雪を魔剣で弾き、空色の冷気をアリアに向けて放った。

「ジークっ!!」

「おう!レッププーケーン!!」

アリアの合図に答えるようにジークは片手を振り上げ地を走る風の気弾を放った。風の気弾は凍てつく冷気を相殺させる。それに続いてキンジがベレッタM92Fでジャンヌに向けて狙い撃つ。ジャンヌは銃弾を防ぎ、その間にアリアが刀を振り下ろした。

「このっ…舐めた真似を!!」

ジャンヌはひらりと躲し、キンジへと飛び掛り魔剣を振り下ろした。目の前に振り下

ろされる魔剣にキンジはベレッタM92Fを前へ投げ、白刃取りで受け止めた。受け止められたことにジャンヌは驚愕する。

「なっ…!!」

「ジャンヌ、もう終わりよ。剣を捨てなさい!」

前へ投げられたベレッタM92Fをアリアが受け取り、ジャンヌの後頭部へ銃口を向けた。これでもうジャンヌは身動きができず、決着がついた。なんとか魔剣を止めたキンジはふっと笑う。

「もういい子にした方がいい。これにて一件落着だよ、お嬢さん?」

「まだだ…武偵法9条、武偵達は人を殺せない。だが私は違う!!」

ジャンヌはこのまま力を込めた。魔剣が氷を帯び始めキンジを凍らせようと迫る。

そこへそうはさせまいと白雪が駆けだす。

「星伽候天流、ひひのほととぎがみ緋緋星伽神!!」

刀に紅蓮の炎が帯び、ジャンヌの魔剣にむけて強く振り上げた。白雪の炎の刀は魔剣を断ち切り炎の渦が巻き上がる。炎の渦は天井にぶつかり小さな火の粉を降り注いだ。ジャンヌは折られた魔剣を目を丸くして見つめていた。

「そんな…私の聖剣が…」

鋼を断ち切る聖剣はこれまで絶対に折れることは無かった。だが、たった今炎の刀に

断ち切られたのだ。斬れぬものは無い魔剣が逆に斬られたのは己の敗北を意味する。ジャンヌはするりと魔剣を落とした。

「デュランダル、逮捕よ！」

アリアは敗北を喫して呆然とするジャンヌに手錠をかけた。これで戦いが終わったと白雪はへたりと座り込む。

「白雪、大丈夫か？」

「キンちゃん…私、怖くなかった？さつき…私…」

力なく、怯えるように見る白雪にキンジは微笑んだ。

「怖いもんか、とても綺麗で強い火だったよ。昔一緒に見た打ち上げ花火みたいだね」

「キンちゃん…っ！」

優しく微笑んでくれたキンジに白雪は目を潤わせ抱き着いた。これで一件落着とキンジもアリアも安堵の笑みをこぼす。

「さてこっちは片付いた。次へ行くとするか」

ジークは肩を回して踵を返した。まだ何かあるのかとキンジとアリアはジークを見つめた。

「次って…デュランダルは逮捕したのよ？他に何かあるのよ？」

「ジーク、もしかしてノブツナが言っていたデュランダルに罪を着せようとした奴のこ

とか？」

キンジはノブツナが言っていたことを思い出した。ノブツナの部屋に侵入し、ガソリンで爆破させ、ジャンヌより先に学園内に侵入して爆弾を仕掛けた犯人がまだいる。

「うむ…今は鳩が爆弾を回収し、ノブツナとレキがそつちの方に向かっている。気を緩めるな、まだ終わっておらんぞ」

白雪を攫おうとしたデュランダルは逮捕した。しかし、まだ学園内にはIEDが仕掛けられている。その犯人を捕らえない限りこの一件は終わらない。

ドリアンは波止場でじつと海を眺めていた。足元には古い小さなテープレコーダーが置かれ、レコーダーからはフランス語で歌う男性歌手の曲が流れており、ドリアンはポケットからキャンディーを取り出し飴玉を口の中に入れて舐めながら鼻歌で歌っていた。

「O Toi la vie…『おお、我が人生よ』、ですか」

ドリアンはふと後ろを振り向く。そこにはノブツナがゆっくりと歩いてきており、静かに落ち着いて様子で見つめていた。待ちくたびれたと言うでもかのようにドリアンは軽く笑って、飴玉をガリツと噛み砕いて飲み込む。

「やあ、待っていたよ。答えは…決まったようだね」

ドリアンはノブツナを見て察する。彼からあの時のような殺気と殺意は見えない。寧ろ落ち着いた雰囲気にならず嬉しさが募った。

「これほど嬉しい気持ちはいつ以来だろうか。最後に烈海王と対峙した時以来かな……」
「ドリアンさん……色々聞きたいことがあります。誰にデュランダルを教わって貰ったんですか？」

ドリアンはイ・ウーすら、デュランダルすら、そして白雪を誘拐することが計画されていたことすら知らないはず。それが知っているかのようにデュランダルより先に学園内に即席爆発装置を仕掛け、デュランダルが白雪を攫った後に爆発させ罪を着せようとしていた。

「それに、貴方にIEDの材料を用意させたのは誰なのか……」

「……残念だが、私はそれを答える気はない。というよりも私は君にそんな質問を期待していない」

「……そうでしたね。これは貴方を捕まえてから聞きますよ。じゃあどうして戦いたいためにこんな大掛かりな事を？」

かつて元死刑囚だったドリアンは勝つためなら、暗器や人質の誘拐と手段を厭わず手早く姑息に勝ちに執着して戦った。最後は本当に勝ちたい為に真剣に戦っていたが、今再びこの地に戻って来た彼は元死刑囚だった頃や最後に勝ちを望んでいた時のような

様子が見られない。ドリアンはポケットから金属のウイスキーボトルを取り出して、酒を飲んだ。

「……長い夢を見ていた。老いぼれた私が突然、子供に戻った夢だ。キャンディーを欲しがり、幸せそうにキャンディーをお腹いっぱい食べる、子供の夢だった。まるでもう一度人生をやり直しているような感覚だったよ」

ドリアンは静かに海を眺めながら、酒を飲み続ける。

「夢から覚めた私は思い返したよ。薄汚れた町角でキャンディーをせがんだ貧しい子供時代。血塗られた戦争へと駆り出された青年時代。人を殺め続け道を外し最悪の死刑囚とされ、勝利の為に戦って無残にも負けたあの頃……私の人生は一体何だったのだろうか」

敗北を望み続けて戦い続け、自分は一度も勝利をしたことがない敗者だという矛盾で、自分の人生はその実、暗黒に満ちていった。本当は知っていたのだがずっと目を背け続けたこの人生は無意味だったと。

「長く眠っている間に周りは変わって私は年老いた。この先長くはないだろう。だからこそ……一度でいい、一度でもいいから最期は昔の事なんて関係なく人生を楽しみたかった。戦う事しか知らない私にできるとすれば、かつての私になかったただ闘争を楽しむこと、『勝ち』も『負け』も関係なく拘らず単純に戦いを楽しむことにしたんだ」

「……だからこんな事を。でも、本当の貴方の気持ちは押し殺してはいないので？」
ノブツナに言われ、ドリアンは少し目を丸くするが、ふっと笑ってライターと煙草を取り出して火をつけて一服する。

「……本当は『勝ちたい』なあ……戦いを楽しんで、ついでに勝ちたい。こんな老いぼれの我儘に付き合ってくれるかい？」

「ええ。かつて貴方が戦ってきた人達には及ばないけど、俺でよければ」

ドリアンの問いにノブツナは静かに笑って頷いた。そしてノブツナから感じる静かな殺気と闘気にドリアンは片手に火のついたライターを持ったまま、嬉しそうに笑った。

「そうか……ありがとう」

そして先ほどまで飲んでいた酒を一気に吹きかけた。高度のアルコールの酒はライターの火を経て火炎放射器のように勢いよく炎が上がりノブツナに襲い掛かった。

ノブツナはひらりと躲して懐に迫り、ドリアンに向けて拳を放つ。ドリアンも拳を振り下ろし、拳同士が衝突した。ドリアンはニツと笑い、しびれる拳にノブツナは痛みながらも笑い返す。

「さあ、楽しむとしようー！」

「…お手柔らかに…！」

18話 キャンディ

最初に動いたのはドリアンだった。ぶつかり合った拳同士を下げ、仕込んでいたメリケンサックをつけたもう片方の拳を放った。ノブツナは相手胃の攻撃をまともに受けず体を左へ傾けていなし、左の拳でボディローを狙う。

ドリアンはその拳を片手で受け止めるや否や、その手を握り絞めだす。ミシリと拳に痛みが走ると完全に骨まで粉々にする気だという殺気を感じたノブツナは地面を蹴つてその勢いで両足で蹴り飛ばす。蹴とばされたドリアンは受け身を取って嬉しそうににんまりと笑った。

「そうこなつくちやね！」

「正直怖すぎなんですけど…」

握りつぶされそうになった左手をさすりながらノブツナが苦笑いする。ただ鬪争を樂しむただの殴り合いとはいっても相手は元死刑囚であり、中国武術の最高峰の者に与えられる『海王』と呼ばれる称号を持つていた男。生半可の覚悟ではこっちが圧倒的にやられてしまう。

「そう畏まるな。君の持ちうる全力を遠慮なくぶつけるといい」

色々と頭の中で考え込んでいるノブツナに対してドリアンは気楽に話しかけていく。ため息をついたノブツナは大きく深呼吸をして再び拳を構えた。少し身をかがめていつでも素早く懐へ迫って先手を打てるように膝に体重をかけていく。

「いきますよ…」

「いつでもきたまえ」

余裕綽綽に突っ立っているドリアンに対し、ゆらりと前へ倒れるように体重をかけ膝に力を入れて地面を蹴り上げる。爆発的な跳躍力でドリアンの懐まで一気に迫った。少し驚いたように目を丸くしていたドリアンが何をしてくるか何も考えずこのままの勢いで相手の鳩尾めがけて拳を撃ち込む。

しかしその寸前に目の前でドリアンはパンツとノブツナの顔間近で両手を叩いた。所謂猫騙し。相手に虚を突いてきたのだった。その猫騙しに思わず目を瞑ってしまった。虚を突かれたノブツナは一瞬びしりと止まる。

目を瞑ってしまった隙をつき狙われたようで、横腹に激痛が走る。横腹に蹴りを入れられた。このまま蹴り飛ばされてたまるかとノブツナは踏ん張って耐え、目を瞑ったまま思い切り拳を放つ。手応えはあつたが威力が低く浅すぎる。ノブツナは後ろに下がって目を開き、痛みに耐えながら拳を構える。一方のドリアンは何事もなかったかのように突っ立って、感心しながら髭をさすっていた。

「見た目に反して鍛えているのだな」

「おっかないおっさん達に嫌と言うほど鍛えられましたからね」

ノブツナは苦笑いをして答えた。範馬勇次郎然り、師匠の本部然り、師匠の友達の中国拳法家だの柔術の達人だの空手の師範代だのにあれやこれやと叩き込まれたことを思い出す。あの地獄の特訓はもう懲り懲りだと遠い目をした。

「君の様に多く学べる人生が羨ましい」

「……人生それぞれです。俺も羨ましがられるほどなもんじやないですよ。」

気軽に笑いながら話してくるドリアンはすかさず拳を振り下ろしてきた。早い拳を顔スレスレで避け、腹部めがけて掌底を撃ち込んだ。体内の水分や血液を振動させて内部から臓器や筋肉にダメージを与えていく『打震』。今まで余裕の表情を見せていたドリアンが初めて痛みで顔を歪ませた。

手応えがあり。相手が怯んでいる隙にありったけの攻撃をしかけていく。今度は顔を狙ってくるかと両手で防いでいる隙にもう一度腹部を狙ってボディブローを打ち込む。から空きになったボディを更に攻めていく。体重をかけて一発、体重をかけてもう一発。それでもドリアンは倒れることなく反撃をしてくるが、妙に相手の動きが分かって妙に自分の攻撃が入っていく。確かに気になる事なのだが、今は考える暇はない。ノブツナは攻め手を緩まず、拳を蹴りを入れていった。

「……若いというのは羨ましいな」

余裕綽綽と立つているドリアンは羨ましそうにノブツナを見つめていた。彼の見つめている先ではノブツナがドリアンとは反対の方向で空を切りながら拳を振り、蹴りを入れていた。時には防ぐ態勢になったり、その瞬間に反撃に入ったり、まるでシャドーボクシングが見え何かと戦っているように見えた。

「しかし驚いたな……一回で私の催眠術が効かなかったのは君で初めてだ」

催眠術。ドリアンの得意とした技の一つである。手段はいたって簡単、相手の意表を突かせること。さつきやっていた猫騙しや不意打ちをやって相手の気を一瞬で緩めさせればかけることができる。術にかかった相手は『最も自分が望んでいるシチュエーション、もしくは望んでいる勝ち方』という妄想に取り込まれていく。ノブツナは一回目は効かなかったが、2回目の催眠術にかかってしまったのだ。『打震』をくらった腹部をさすりながらドリアンは感心していた。

「やはり術にかかっても尚、隙あらば本当に狙ってくる姿勢は侮れん」

かつて愚地独歩に催眠術をかけても、彼は『戦いとは不都合なもの、思い通りにならないもの』とかみしめていて、術にかかっている事すら記憶にないまま戦って催眠術は全く無意味なものだとされてしまった。あの時程ではないが、一瞬でも油断して殺しにか

かつて行けば逆に襲い掛かってくる。まるで臭いで獲物を嗅ぎ付けて嘯みついてくる
獵犬の様だ。

「身に潜んでいる鬪気と殺気…君は大したものだったよ。だが、ここは私の勝ちとして
もらおう」

短い組手であつたが楽しむことができたし、ここで仕留めるのも惜しい。しかしここ
で長居しても他の武偵が来てしまうかもしれない。静かに殺気を込めて近づいて仕留
める事にする。頸椎を折るか、脳天を砕くか、何処で止めを刺すか拳を握った。

「さあ、今見ているものを永遠のものとするために…行きなさい、夢の世界へ」

ドリアンは止めを刺そうと拳を振り下ろした。その時、彼の腕にどこからともなく弾
丸が掠める。ドリアンはピタリと止め、飛んできた方向を見るや否やすぐに下がった。

「狙撃…!?彼の付き添いの子か…!!」

ノブツナの傍にドラグノフを持っていた翡翠色の髪をしたレキとかいう少女がいた
ことを思い出す。何処から狙って撃ってきたのか見抜いたドリアンはすぐにノブツナ
から離れて倉庫の物陰へと隠れる。

「あの子も見た目に寄らず中々の腕だな…」

この物陰からなら射程外であろう、ここは惜しいが戦いを一先ずお預けにするかと身
を引こうとした。その時どこからかチュインツと金属を弾いた音がしたかと思いきや

弾丸が右肩を掠める。一瞬何が起きたのかと驚いたが、腕と同じ痛みからしてレキが跳弾を狙って撃ってきたということに気付くと肩を竦めて苦笑いをした。

「ははは…逃がさないというわけか」

それならば今度は物陰からノブツナを仕留めようかと、ケブラー繊維を仕込んだライターを試しにちらりと見せた。その瞬間にライターは弾丸に射抜かれて粉々になる。彼を殺させはしない、という事も分かったドリアンは苦笑いしながらため息をついた。

「やれやれ、逃げるなだったり殺すなだったり私はどうしたらいいのか困りものだ」

ここから出られないまま待ち惚けをするか、強引にでもノブツナを仕留めるか、もしくは全力をもって逃げるかどうかどうするか悩みだした。しばらく悩んでいると、跳弾を狙った狙撃も全く来ないしこっちを狙っているような気配すらも消えた。物陰から様子伺うと、催眠術に取りつかれて今も尚拳を振っているノブツナから離れた場所でドラグノフをもったレキが待っているのが見えた。

「これは珍しい…：…どういう風の吹き回しかな？」

少し珍しそうにドリアンは見つめた。スナイパーならばあのまま狙い撃ちを続けていればよかつたはず。それなのに彼女はそのまま姿を現して自分の下へとやって来たのだった。ゆつくりと近づいてくるドリアンにレキはドラグノフを構える。

「…：…本当ならばそのまま貴方を狙って撃てばよかつたのかもしれない。でも、それ

では意味がない」

「ほお？それは油断と慢心か？」

「いいえ。命を賭してでも主を守るのが私の務め」

そのまま静かにドラッグノフの弾丸をリロードして狙いを定める。

「……こうでもしなければノブツナさんは起きないので」

ドリアンはちらりとノブツナの方へ視線を向ける。ノブツナは息を切らせながらも見えない敵に向けて拳を、蹴りを入れていた。あれはまだ術を解くことはないだろう。

「……まで近づいても撃つてこないとは……君の引き金が先か、私が避けて君を仕留めるのが先かな？」

「……私は一発の銃弾。何も考えず目標へ飛んでいくだけ」

面白いことを言う、とドリアンはふつと笑い、レキの指が引き金を引く瞬間を見逃さなかった。彼女の指が動いたと同時にドリアンは向けられた銃口から左へと避けた。発砲音とともに放たれた弾丸はドリアンに当たることなく通り過ぎる。ドリアンはステップを踏んでその勢いでレキに向けて拳を振るう。このままぶつけてしまえば簡単に折れてしまうぐらい細い体は耐えきえることはできないだろう。この勝負は勝つたとはくそ笑み拳を振り下ろした。

その刹那、ドリアンの脇腹にミシリと激痛が走る。痛みに表情が歪みと驚きが混じ

り、痛みがする方へと視線を向けた。催眠術にかかつて見えない自分とシャドーボクシングをしていたノブツナが全体重をかけた拳を入れていたのだった。驚きが隠せなかつたドリアンは大きく後ろへと下がった。あの様子は完全に催眠術が解けている。一体どうやって彼は催眠術を解いたのか焦りながら考えた。よく見ると彼の頬に一筋の赤い傷がついて血が流れている。

「さっきの銃弾は私ではなく彼へと向けたものだったか…!!」

レキがノブツナに向けて発砲して強制的に催眠を解いたのであった。頬を拭うノブツナにレキはジト目で見つめる。

「ノブツナさん、気を抜きすぎです」

「いてて…サンキュー、レキ。次は気を付けるさ」

そんな二人の様子を見ていたドリアンは突然大きく笑いだした。

「はははは!!こんなに面白いことは久しぶりだ…：人生とは色々とあるものだな」

大きく笑い終えたドリアンは何かすつきりしたかのような、何かを悟ったかのような落ち着いた表情をしていた。

「…私も一瞬でいいから誰かの為とかを抱いて戦ってみたかったものだ。ノブツナ君、君はまだまだ多くを学ぶことができる。私の人生は短い…羨ましいものだ」

こぶしを握り締め、静かに殺気と闘気を高めていくのが分かった。どういう事か、こ

れで最後にするつもりのようなのだ。

「……レキ、後ろへ。もしもの時は頼んだ」

ノブツナはちらりと視線を向けて指示を出した。相手がその気ならこっちも同じようにこれで終わらせる。どちらも間合いに入り、ドリアンの拳がゆらりと動く。

「これまで私の人生は矛盾した喜劇だと蔑んでいたが……君らに会えて悪くは無かったよ……」

嬉しそうに、誇らしそうに、ドリアンはこれまでよりも早く、強く拳を振り下ろした。しかし、ドリアンのよりも早く、強く、ノブツナの拳が入っていた。

足の親指から始まり関節の連動を足首へ、足首から膝へ、膝から股関節へ、股関節から腰へ、腰から肩へ、肩から肘へ、肘から手首へと8箇所関節を同時加速をかけて目にもとまらぬ高速の正拳突き。師匠の友人である空手の師範代から教わった技。大きく深呼吸をしたノブツナは前のめりへと倒れるドリアンに向けてもう一発放った。

顔へと直撃したドリアンは後ろへと倒れる瞬間、意識が薄れる寸前、ノブツナに向けてふつと笑った。

「……良い夢を見させてくれて、ありがとう……」

ドリアンは仰向けに大の字に倒れて動かなかつた。これで静かになつたと、終わったと察したノブツナはマツハ突きを放つた拳を痛そうに振りながらへたりと座り込んだ。

「……な、なんとか勝つた……!!」

やつれながら大きく息を吐く。正直かなり緊張した。自分で止めることができるかどうか分からないながらも戦つた。安堵と共に緊張と焦りが今更ぶり返して来た。

「ノブツナさん、お疲れ様でした」

「いやもう疲れた。あつちも終わつたみたいだし、はやく教務科の連中が来てほしいわ」
このままあととは後から来る教務科の連中に押し付け事情聴取をすつぽかして帰りたいぐらひだった。レキは静かに倒れているドリアンを見つめていた。

「……自分の人生は変える事はできない。それなのにどうしてこうまでして変えたかつたのでしょうか」

「そいつは違うな、レキ」

疲れ気味ながらもノブツナは首を横に振つた。

「変える事ができないと諦めているから、変えれない。誰だつていつ時もあるチャンズがあり、変える事はできる……あの人は立ち向かつて、変わったよ」

「……私も変える事ができるのでしようか……?」

「?ああ、変わろうと思えば変われるもんさ。まあその気になるんなら、俺が手伝つてや

るや」

『ウルス』とか『風』とかよくわからないレキの中二病を脱出して変わろうとしているのなら良い方向に向かっているのだろうと、ノブツナはニツと笑った。

その時、これまで仰向けに倒れていたドリアンがむくりと体を起こした。突然のことでノブツナとレキはギョツとし驚くが、ドリアンの様子がおかしい。先ほどまでの殺気は感じられないどころか、彼の目はおどけたようにあたりを見ていた。レキはドラグノフを構えていつでも撃てるようにするが、ノブツナは止めた。そしてノブツナはゆっくりと近づく。

「ノブツナさん、何を……」

近づくノブツナに気付いたドリアンは子供の様に困った表情を見せた。

「……キャンディ……」

「……えっ?」

「……パパがね……2つしかくれないの……キャンディ……ボク、たくさんほしいのに……」

これはまさかとノブツナは目を丸くした。かつてのドリアンは最後、勝負に負けて精神が崩壊し幼児退行をしてしまった。それはもう戻ることのない永遠の症状。これは『本来』の彼に戻ってしまったのではないだろうか。

「ボクね、ずっとゆめをみてたんだ…」

「夢を…?」

「ボク、スーパーマンみたいにつよくなったゆめをみたんだ…でもさいごはたたかっ
まけちゃった…」

「…その夢は怖い夢だったかい?」

ノブツナの問いにドリアンは大きく首を横に振った。

「ううん…とつてもたのしかった!!」

ノブツナは目を見開いてしばらく考え込んでいたが、頷いてドリアンに向けて笑っ
た。

「そっか。そいつはよかった…そうだ。キャンデイ、俺が買ってやるよ」

「ホント!?!」

「ああ。好きなもの、山ほど買ってやるさ…」

もうさつきまで戦ったドリアンはいない。彼は残りの人生をかけ、最後は楽しんで
いった。

「…もつと拳を交えたかったな…」

19話 訪問者

「こちらの病院にドリアンを保護してあります」

アドシアードから数日後、学園島を一望できるとある防波堤でノブツナはしかめっ面でメモを渡した。普段は釣り人もよく訪れるスポットなのだが今日に限って釣り人は少ない。

それもそのはず、ノブツナの目の前で成人男性よりも筋肉の量も体格も桁違いのアフリカ系アメリカ人が釣りをしている。アロハシャツを着てサングラスをかけ、黙ったまま釣り糸を垂らして微動だにしない。その威圧もあつて釣り人達は近づこうとしなかった。

「Hum…釣りというものは難しいナ」

「オリバさん、餌をつけてないと釣れませんよ」

ノブツナは乾いた苦笑いをする。その通りだと笑う男性はアメリカのブラックペントゴンことアリゾナ州立刑務所に収監されながら囚人として扱われずにアメリカの警察を牛耳る自由奔放の男、繋アレンがれチェインざる者ことビスケット・オリバである。オリバはノブツナが渡そうとしたメモを受け取ると満足そうに頷く。

「助かったよ。流石はMr. 本部の弟子というわけだ。これで安心して祖国へ帰れるヨ」

「いえいえ…俺だけの力じゃ成し遂げられませんでした。仲間達の協力のおかげです」
褒められるのが慣れていないようで、ノブツナはニヘラと笑って頭を掻く。

「さて…魚も釣れないことだし、私はすぐにドリアンを連れてアメリカへ帰るとしよう」
「…オリバさん、その前に少しばかり質問していいですか？」

ニコニコと釣り具を片付けようとするオリバにノブツナは真剣な眼差しで見つめていた。その様子を見たオリバは静かに頷く。

「いいとも、今回は君に任せつきりだったからネ、好きなだけ質問してくれてかまわないヨ」

「じゃあ…ドリアンを差し向けたのはオリバさん、貴方ですね？」

その言葉を聞いたオリバから笑みが消えて真顔になり、ピクリと腕の筋肉が動いた。オリバの拳は強く握られている。このまま殴り掛かってくるのではないかとノブツナはごくりと息を呑みいつでも避けられるよう足を静かに動かす。躲しきれるかどうかは分からない状況で背中に嫌な汗が流れる。

「…何故、そう思うのかネ？」

オリバは落ち着いた口調で恐怖で威嚇する獣をあやすかのように尋ねてきた。緊張

の糸を解してはいけない、そう考えつつノブツナは答えた。

「ドリアンは学園島に爆弾を仕掛け学園島を爆発させようとしていました。彼はデュランダルという誘拐犯がこの学園に潜みある武偵を誘拐しようとしていた事を知っていた。ドリアンは意図していませんでしたが、誰かがデュランダルにすべての罪を擦り付けようとしていたことは分かりました」

「……」

オリバは何も言わず黙ったままじつとノブツナを見つめている。沈黙したままでも伝わる静かな威圧に耐えながらもノブツナは話を進めていく。

「当時はアドシアードというイベントがあり、武偵校は一般開放され一般人の他にメディアやお偉いさんも来ますからね……もしもし獺は事故でも起き大きな被害ができれば武偵の不祥事として叩かれますし、信頼も落ちる。そして爆弾を仕掛けたとしてデュランダル……いや、イ・ウーとかいう組織も締め上げれる。武偵と犯罪組織、どちらも蹴落とされて得する人と言えば……アンチエインと呼ばれている貴方も得しますね」

ずっと黙っていたオリバが何か言おうするのを遮り、ノブツナは一枚の紙を渡した。その紙には誰かの指紋の画像が添付されていた。

「憶測ではありません、ちゃんと証拠もあります。ドリアンがIEDを製造していた部屋にキャンディの包み紙がありました。俺の仲間に鑑識も得意な者がいまして……そ

の包み紙の一つに、貴方の指紋がありました。勿論、包み紙だけでなくIEDのパーツの一つにも：貴方はドリアンに会っていた。そしてデュランダルの事もドリアンに教えた」

更にノブツナはもう一枚資料をオリバに渡す。

「そして、貴方がドリアンに渡したであろう彼が持っていたキャンデイも調べました。成分に多量のメタンフェタミンが含まれていました。メタンフェタミンは精神刺激薬としても使われますがこの量は覚醒剤よりも危険な劇薬になりうる。それに、該当不明の成分も検出：：：こんな薬を製造できるとすれば、アメリカにあるロスアラモス機関、貴方が関与したのでは？」

ロスアラモス機関、アメリカの政府と関連した最先端技術と最先端科学を駆使した兵器や研究をしている研究機関。アメリカ政府と通ずるならば大統領すら司法すらお構いなしのこの男も一枚噛んでいるはずだ。ノブツナは威圧に怯むことなくオリバを見つめた。どう答えるか、いきなり殴ってくるか、どう動くかじつと見据える。

しばらく沈黙していたオリバだったが遂に堪え切れなかつたのかプルプルと震え出した途端、大きな声で高笑いをした。予想外の反応にノブツナは呆気にとられてポカんとする。

「H A H A H A H A : : !! すまない すまない、どうやって話を逸らそうと考えていたが

君には誤魔化すことができないようだナ」

「では……」

「その通り。ドリアンを一時覚まさせたのも、デュランダルの事を教えたのも、彼に学園島に爆弾を仕掛けるよう教えたのも私だ」

「……何故、ですか？」

何故オリバがこんな事をしたのか理由を聞こうとした。するとオリバはノブツナが渡した資料を片手で何度も何度も握り潰し、A4サイズの紙が噛み続けて味が無くなったガムを包んだ包み紙ほどに小さくなった。

「——私はね、武偵が大嫌いなんだよ」

オリバは満面の笑みで答えた。その瞬間、ノブツナは押し掛かるような殺気を感じて引きつる。彼の笑顔の裏に莫大もの怒りが込められているのが感じられた。

「アメリカ、日本、ヨーロッパ……世界中どの司法もこの私を縛るものは無い。だが武偵の連中は私をどうしても逮捕したいようでね、何度も何度も私の寝首を搔こうとし、私の邪魔をしてきた。実に愚かで小賢しいと思わないかね？」

熱く語るオリバに今度はノブツナが黙って聞く番になった。アメリカの警察、FBI、軍、司法さえも牛耳る彼に唯一抵抗を続ける武偵。何が何でも司法を取り戻すために法に縛られないこの男を捕まえないようだ。

「それだけではない、イ・ウーの様な長く存在し、司法に囚われていない組織……私の存在は有るものとし、奴らは無かった事にされる……実に片腹痛い。繋がれざる者は私一人で十分だ。『イ・ウー』、『藍髻』、『霸美』、そして『ウルス』……かび臭い連中は私が潰さなくてはネ」

ウルス……その言葉を聞いたノブツナは見開く。以前、レキも同じように『ウルス』という単語を言っていた。それを何故、繋がれざる者は知っているのか、驚きを隠せなかった。

「おっと、そろそろドリアンを連れて帰らないと飛行機に乗り遅れてしまう……では、私は失礼するよ」

「ま、待つてください！オリバさん、『ウルス』って一体何ですか!?それだけじゃない、デュランダルのをどうやって知ったんですか!？」

話は終わりと釣り具を片付けて去ろうとするオリバを呼び止める。まだまだ聞かなければいけない事もあるし、知らなければならぬ事も山積みに残っている。オリバは歩みを止めるがこちらに振り向くことは無かった。

「少しだけ教えてあげよう……君の見ている物全てが真実ではないのだよ。情報というものとは奥深い、君が知らないものがあり、君が知らないうちに物事は進んでいく……そしてその中にはとんでもない怪物も潜んでいる」

オリバはどう言いたいのかノブツナには分からなかった。だがこれだけは分かる、自分が関わろうとしているのは野暮な事件とは比べ物にならない程の膨大な厄介事だと。

「そして全てを知った時、君は彼女の傍にいてやれるの事ができるかな？」

恐らくレキの事をさしている。オリバの言っている事とレキに何か関連しているのだろうか、もしかして本当に『ウルス』とかいうものに関連しているのか、考えても今は思いつかない。するとオリバは振り向いて二つと笑った。

「まあ、君に『愛』があればの話だがね…それではサラバだノブツナ君。いずれまた会おう」

愛？それはどういう意味なのか、キョトンとしているノブツナにオリバは軽く手を振って去って行った。結局オリバから詳しい事は教えてもらえなかった。ノブツナは途方に暮れ、静かな海を眺めてため息をついた。

「結局、分からず仕舞いか…」

ただ分かったことがあったとすれば自分の情報収集力の無さくらいだろうか。まだ知らない事がありすぎる。

「つたく、一つ一つ整理していくかな」

「うーっす、ただいまー」

オリバさんとの対話はめっちゃ怖すぎた。正直オリバさんが怒った時はちびりそうになったぜ…なんかまた会おうとか言ってたよな。あの人と戦いたくねえな。

普段ならば一仕事終えてくたびれた時はこのまま布団に籠って一日を終えたいと思っていた。でも今は違う。玄関開けたらサトウのごはんのようなもとい実家のような安心感で癒してくれる存在がいるのだ。

「ただいまー、レキ待たせちまったな。今日の晩飯は『百太郎』でラーメンを食べに行こうぜ」

今この俺の部屋には居候をしているレキがいるのだ。今日は留守番をさせて正解だった。オリバさんがあれやこれやと言ってたもんだし、きつとレキが聞いちゃまずい事もあった。この事は黙っておこう…

それにしても返事が無い。俺はどうしたのかりビングを見回すと…いました。ソファーにドラグノフを抱えてうずくまって寝ているレキさんが。

「…」

はいカワイイ。俺はすかさず携帯の写真を撮る。これ待ち受け画面にしよう。すっげえ癒されるんですけど。あ、カメラにも撮っておこう、焼き増ししてオークションに

出せばバカ売れ……いや永久保存しなきゃ。

「ん……ノブツナさん……？」

シャッター音で目が覚めたのかゆつくりと目を開けてレキは起き上がる。長らくぐつすり眠っていたようで少し寝ぼけている。カワイイ、もう一枚撮っておこう。

「悪い、起こしちまったか？」

「いいえ……構いません……」

なんだろうか、ドリアンとの戦闘や捜査、そしてオリバとの会話、長くのしかかっていた疲労がスツキリと取れた様な気がした。どことなくレキはミステリアスな雰囲気があるけども何となく癒される気がする。俺は笑って彼女の頭を撫でようとした。

—— 全てを知った時、君は彼女の傍にいてやれる事ができるかな？ ——

オリバさんが言っていた言葉を思い出し、俺は思わず手を止めた。

確かにあの人の言う通りだ。俺は……レキの事実を一ミリも知らない。一年間バディを組んでいたがお互いの事は深く知ろうとしなかった。

レキ……知っているとすれば彼女の名前と狙撃の腕前、ただそれだけ。彼女は一体何者なのか、何処から来たのか、詳しい事は知らない。

彼女が本当に中二病患者でなければ『ウルス』とは一体何だろうか、彼女がよく言う『風』とは一体何なのか、俺が知らない膨大な存在なのか、オリバさんが敵視するのならばレ

キも狙われるのではないのか。

ぐるぐると思考が巡り俺は石像の様に固まる。いふなれば考える人の像つてやつか。混乱する思考の中である事が思いつく。

そういうえば……俺は彼女が笑ったところを見たことがない。

「……ノブツナさん？」

レキは微動だにしない俺を見て不思議そうに首を傾げる。ロボットのよ様な無表情の顔——というかなんでそんな笑ったりしないんだらうな。

よくよく考えると、俺は何も知らないじゃないか。いや、知らなければならぬのではないか？

「ア……すまん、ちょっと考え事さ。気にしないでくれや」

いかんいかん、落ち着けノブツナ。これ以上悩んでいたらレキが心配する。いや違う、腹を割って聞かなければいけないんじゃないのか？ いや、真実を知るのが怖いのか俺？

「——『風』は警告しています。これ以上、関わってはいけないと」

唐突にレキは俺に告げる。俺が何か悩んでいるのを察したのか、それともここにいる事が迷惑ではと思ったのだろうか。

「…関わり続けるとどうなる?」

「——貴方は死ぬと」

なんとという事でしょう。風さんとやはら俺に死の宣告をしてきましたよ。というか相当風さんに嫌われてんな。

「そして私に戻れと……これ以上『あの子』を目覚めさせないために『あの人』を奪えと言つてきました」

何て事をしやがるのでしょうか。風さんとやはら相当昼ドラがお好きなのかそれとも重度のヤンデレなのでしょうか。ただ分かるとすれば……レキも相当悩んでいる。表情に表さないけれど、悩んで悩み切つてそんで思い切つて俺に相談してきたんだ。

「レキ……ごめんな、俺くよくよしてた」

俺は微笑んでレキの頭を撫で、しゃがんで顔を合わせる。どうかしてたぜ……真実を知らないとか、知るのを恐れようとしているとか、今は悩んでいる場合じゃない。今すべきことはレキを支えなきゃいけないんだ。

「お前が本当は何者なのか、ウルスとか『風』とかはよく分かんねえ……でもこれだけは言える。何があろうとも、俺は裏切らねえし見放さねえ、俺がずっと傍にいてやるよ」

「……!」

「俺はバカだからさ、詳しい事は知らん。でも、お前が悩んでいるのなら迷つてんなら助

けてやる。『風』の野郎が何を言おうとも、俺がちゃんと導いてやる」

レキが何者なのだろうか今は関係ない。知ろうとすればいつか知れる。

「だから心配すんな」

「……分かりました。私は、ウルスの姫は、貴方に従います……」

気のせいだろうか……少しレキの表情が赤く、恍惚している気が……うん、夕陽のせいだな！ そうだね！ ごくりと生唾のんだけど気にしない！

「お、おし！ もうこの話はお終い！ これからラーメンでも食いに行こうぜ！！ 俺の奢りだ、好きだけ食べえ！！」

そう！ シリアルなお話は今までにして、楽しい事を考えなきゃね！ レキはよく食うからなー、お財布と相談しなきゃ！

その時、そそくさと行こうとする俺をレキが袖をクイツと掴んで止めた。俺は恐る恐るゆつくりとオイルの切れたロボットのように振り向く。

「ノブツナさん……私は貴方に委ねます。だから——」

おかしいな？ なんだか今日のレキは色っぽいぞ？ うん、これは夕陽のせいだ。ノブツナ、あなた疲れているのよ。レキは俺に構いもせずシユルリとネクタイを外し、ボタンを開けていく。

「——貴方のモノであると、その証を私にください」

かな……

あと2 cm

どうしよう、俺初めてだからこの後何をすればいいのか分かんねえ……

あと1 cm

あ、Gory

「俺は帰って来たぞおおおおおノブツナあああああつ!!」

そいつはリビングの窓をぶち破って乱入してきた。銀色の十字架のエンブレムのがついた真っ白なオーバーコートを着た、ツンツン頭で目つきが悪く蛇のような瞳の赤目の青年。どっかの特攻野郎の様なマスクをつけて提げている刀を抜かず、両手に持っているセロリを振り回し喧しく叫ぶ。

「中学以来だな！俺はバチカンで長い間修行をして帰って来た!!今の俺は貴様よりも何倍も強いぞ!!そんで土産にお前の嫌いなセロリを持ってきてやったぞ!!」

「……」

突然の乱入してきた輩にレキはポカンとするが俺は何も言わずにソイツに近づく。

「はっはっは!!ちよつといい雰囲気になって何うたタイミングを逃したが、ぶち壊してやったぜざまあみろ!!そして俺の持ってきたセロリに苦しむがry」

「ふんっ!!」

「オゴポコオ!?!」

そいつはセロリを振り回して襲い掛かて来たが構わず俺はそいつに有無言わずボ
ディブローをする。

「ふんふんふんふんふんふんふん!!」

「ちよ、まつ、やめっ」

ソイツの弁論する暇すら与えず俺はデンプシーをし続ける。そして俺は力一杯にソ
イツを持ち上げる。

「カエレ!!!」

「ああああああっ!?!」

ベランダから外の海へと投げ込んむ。高々と水しぶきが上がり片付いたと俺は一息
入れた。

「ノブツナさん…今のは」

あ、レキが尋ねてきた。無かった事にしたかったけど、教えてなきやな。

「あいつは神田スヴェン…人間と吸血鬼のハーフ、ダンピールだ」

二度と会うことは無いだろうと思ってた奴だったんだけど何で帰って来やがったん
だ。

6月ヴァンパイア

20話 セロリ

ノブツナは激怒した。必ずかのクソ野郎を仕留めなければならぬと決意した。

6月の上旬で梅雨入りし、外はシトシトと雨が降っている。屋上でサボることができないので仕方なしに教室に行くと自分の机に大嫌いなセロリが生け花の如く派手に飾られていた。

「……」

ノブツナは無言で己の机を凝視する。よく見ると机の上だけではない、机の中にもセロリが何本も入れられており葉っぱがひよっこりと覗かせていた。セロリ独特の匂いが教室に蔓延する。ざわつく教室をノブツナは見回す。

——やばい、めっちゃ怒ってる。

キンジも武藤も、生徒の誰しもが彼が静かに激昂しているのが一目で分かった。

表情を一切変えず恐ろしい程の真顔なノブツナの視線が生徒達の目に映る。キンジも武藤も、教室の生徒達も一斉に首を横に何度も振る。

誰が彼の逆鱗に触れるようなことを、核爆弾のスイッチを押すようなことをするもの

か。彼を怒らせては教室が戦場となる。アリアが怒って『風穴!』と言つてガバメントを乱射するレベルではない。

ノブツナを怒らせる、そんな愚行をするような輩は一体誰だ。主犯は一体何者か、生徒達はざわつきながら見回していると、突然掃除ロッカーがガタガタと音を立てながら揺れ始めた。

そして中から白いオーバーコートを羽織つたツンツン頭の目つきが悪い男が蹴り開け、勝ち誇つたような笑みをみえながらノブツナを指さしてあざ笑つた。

「ふうーははははあつ!!どうだノブツナ! 貴様の大嫌いなセロリを教室においてやったぞさまあみろ!!そして苦しむがいい! お前はあのセロリの匂いがべつたりとついた机と椅子で授業を受け——」

——のちに遠山キンジ氏はこう語る。

ええ、あつという間でした。突然ロッカーから飛び出して来た男がノブツナを嘲笑い台詞を言い終える前に、ノブツナが真顔でその男の顔面を思い切り殴つたんです。何と言いますか：：プロボクサー顔負けの速さでこうストレートで。

それで、男が怯んで後ろに倒れそうになったところを今度は顎を狙つてフックをしたんですよ。殴られた男は「あふんっ!」とか言つて駒の様にギョルンツてすごい勢いで回転してましたね。本当に起きるものなんですね……

でもそれで終わりじゃありませんでした。倒れた男の両足を掴むと、ジャイアントスイングして窓へ、いや外へと放り投げました。勿論窓ガラスは割れましたけど、やらかした当の本人は物凄く嫌そうな顔をして『二度と来ねえように仕留める』とか言つて教室を出て行きましたよ。まあロツカーに籠つてた男が一体何者だったのか知りませんが：：ノブツナ、セロリが嫌いだったんだな……

———　　そう言い終えた遠山キンジ氏は教室に蔓延しているセロリの匂いと、ノブツナの机に置かれているセロリの生け花をどうしようか途方に暮れていた。

「さて、言い残すことはねえか？」

「おいちよつと待て、俺とお前の仲じやないか。勝手に殺そうとするなよ」「うるせえよ!!てか、何で来た!?!どうやって来た!?!」

ノブツナは物凄く嫌そうな顔をしてずぶ濡れになっている、腐れ縁3号ことダンピールである神田スヴェンの胸倉をつかんで揺らす。屋上からもう一度投げ捨てたかったのだが生憎今日は雨。仕方なしに雨天時のサボリスポットである鳩がいる文学部の教

室で尋問している。同じサボリ仲間のジーク、鳩、そしてレキまでもがこの教室でサボタージュしていた。

「ほうほうほう、そいつがダンピールとな……ところでダンピールって何？」

「吸血鬼と人間のハーフだ。ちなみに俺はめっちゃ強いぜ」

「なんと!?!もう一戦やろうぜ!」

「すんなバカ。というか話を逸らすな」

ノブツナはジークとスヴェンにゲンコツを入れる。のたうち回るジークを無視して再びスヴェンの胸倉をつかんだ。

「もう一度質問する。どうやって来た、どうして来た」

「俺に質問するな!」

「やかましいわ!!というかこのくだりもう5回目だぞ!」

「まあまあノブちゃん、そうかつかせずにー。あ、コーヒー飲むツス？」

「あ、ども。お前いい奴だな」

にこやかにコーヒーを渡して来た鳩にスヴェンは色目を使う。これでは埒が明かないとノブツナは項垂れる。レキに至っては無関心なようですつと窓から雨が降っている外を眺めていた。

「本当に何しに来たんだお前は……」

「お前の嫌がらせに来た」

「鳩、ペンチ持ってきて。こいつの歯全部引き抜いてやる」

「待て待て待て話す話す」

ノブツナが完全に殺る気であるので流石にヤバイと感じたスヴェンは慌ててノブツナを止める。漸く真面目に話す気になったかとノブツナはため息を漏らした。

「俺は仕事でこつちに戻って来たんだ。ついでにお前も誘おうと思つてここまで来た。まあお前に嫌がらせするのが主だったけど」

「仕事？ 確かバチカンから来たと言つていたよな。それと関係あんのか？ ……それからあとでとお前殴るわ」

「まあ半分あつてるな。お上からの指令が半分、私怨が半分」

「つたく：…事の次第にや乗るがなんだ？」

「流石は俺のライバル。それでこそ競い甲斐があるぜ！ ノブツナ、ブラドをメに行こうぜ！」

「はいみんな解散、おつかれっしたー」

そそくさとノブツナは鳩たちを連れてスヴェンを置いて出て行こうとした。そんなノブツナをスヴェンが全力で止める。

「まあ待てライバル！ 俺の話聞いてくれ！」

「うっせえバーカ!! どうせ碌な事じゃねえと思っただけどもやっぱりじゃねえか!」

「碌でも無くはないぜ! 俺もお前もお手柄で褒め称えられるくらいやべえから!」

「ノブちゃんノブちゃん、そのダンピールのお方の言う通りでもあるっすよ?」

苛立つノブツナに鳩がひよっこりと二人の間に割って入った。

「鳩、お前なんか知ってんのか?」

「ブラドって聞けばそりやあもう有名っすよ。なんたつてイ・ウーのNO. 2の吸血鬼なんっすよ?」

またイ・ウーかいな。ノブツナは面倒くさそうに頭を抱えた。しかも相手は吸血鬼で、イ・ウーの二番目にえらい奴。先月のジャンヌ・ダルクといい、イ・ウーにはそんなおかしき奴等しかいないのかと愚痴をこぼす。

「でもなんでそのブラドをメに行くんだ?」

「簡単な話だ。あいつ、母ちゃんを馬鹿にした」

「すっげえ私怨だなおい」

「……それもあるが、事実バチカンのシスター、『殲滅師団』レギオ・デイーンはブラドやその娘と長い事

戦っていてな、ブラドの奴日本に潜んでいるからいつちよぶちのめしてこい、と俺に指令を下してきた。俺に命令してきたメーヤとかいうシスターの顔がメツチャ怖くてな、

いやホント怖かった」

「つか物騒な連中だな」

ノブツナは引き気味に苦笑いをした。スヴェンもかなり面倒な目に遭っているのだと、こいつなりに少しは苦労しているのだと分かった。

「まあ安心しろ。ここの武偵法じゃ殺しは禁じられているからな、死なない程度にのめして逮捕で済ましてやるさ」

「それで、そいつを捕えるのに俺達に協力を求めてきたつてわけか」

「どうだ？のるか？」

どうしたものか、ノブツナは腕を組み唸りながら深く考えた。人ならまだしも、今回の相手は吸血鬼。驚異的な回復力をもつとは聞くがどれほどの力を持つのかは分からない。そしてそれはとてつもなく面倒だというのが嫌程分かる。

(レキは……興味なさそうだし、ジークは……寝てるし、鳩は……)

とりあえず他の奴の意見を聞こうとしたが幾人か人の話を聞いてないしやる気は無さそうにしている。鳩は果たしてどう考えているか視線を合わせると鳩はにへらあと笑顔を見せる。

「ノブちゃん、めっさ楽しそうじゃないっすか。ファツキンイ・ウーをまた一人ぶちのめしせるなら鳩ちゃんは喜んで承りーっす」

ああこいつイ・ウーが大嫌いだったな。

そんな事を考えていると鳩がギザギザの歯を見せて下衆そうな笑みを浮かべてノブツナに歩み寄る。

「ねえねえノブちゃん、ノブちゃんもやりましょーよ」

「あのなあ…俺がやってもこいつが得するだけだぜ？」

鳩がギザギザの歯を見せて下衆そうに笑う時は必ず碌な事がない。これだけは確信できる。クスリと笑った鳩は耳元でささやいた。

「——手伝つてくれたら、ノブちゃんの知りたい事、教えてあげるつすよ？」

やはり碌でも無かった。ノブツナはお茶目に笑う鳩を見つめた後、仕方ないと肩を竦めてため息を漏らす。

「しゃあねえな…手伝つてやる。その代わり、報酬は弾めよ？」

「流石は俺のライバル。きつとやってくれると信じてたぜ！」

スヴェンは嬉しそうにノブツナの手を握って何度も振る。果たしてブラドとやらはどんな御仁なのか、どうやって捕えるか、自分達で倒せる相手か、考えることが山ほど増えた。今月ぐらいはレキとただ只管サボつてのんびりしたかったのだがため息をつく。

「じゃあ詳しいことは後程知らせる」

「おう、ちゃんとやりやすいプランを考えろよ？」

「……………」

「……コーヒーおかわり」
「帰らねえのかよ!?!」

21話 悪魔城ドラキュラ（誤

「はあ……何か疲れた」

数える事おそらく239回目のため息だ。こんなにもくたびれたのは久しぶりだろうか。あの後「用がないならカエレ！」とスヴェンを追い出したのだが、その後も休憩時間や授業をサボる度にスヴェンがどこからともなく現れてセロリを使つて嫌がらせをし続けてきやがった。

教室の俺の机にセロリの生け花は置かれたままだし、セロリの着ぐるみを着て教室に入り込んだり、セロリを振り回して追いかけてくるし、下校するまでの間あいつは何度も俺にセロリを食わせようとしてきた。

漸く学生寮へと辿り着くとどっと疲れがのしかかってきた。もうあれだ、セロリとあのクソ野郎のせいだ。部屋に着いたらレキに抱き着いてレキレキ成分を補充しよう。ぎゅつと抱きしめて、スンスンして……ほ、ほらスキンシップって大事だからな！

鍵で開錠しドアを開けて部屋へと戻る。あれ？おかしいな、部屋が明るい。部屋の電気はつけっぱなしにしてたっけか？

「おうおかえり！一日中雨で少し冷えたる。コーヒー作つておいてやったぜー！」

リビングにはスヴェンがコーヒーを飲みながら寛いでいた。

「えーと、レキだっけか、お前さんはミルクか？それともブラック？」

「……私はブラックでかまいません」

「そうかそうか！ほんとノブツナにはもったいねえ女だなあ！」

スヴェンはゲラゲラと笑いながらレキにコーヒーを渡す。そして俺にはいたずらっぽくギザギザの歯を見せて嘲笑う。

「残念だったなノブツナ！てめえのコーヒーはねえ！お前にはこの特性セロリジュースをry」

「どっから湧いてきた」

セロリジュースを飲まそうとしてきたスヴェンの攻撃を躲して容赦なくアイアンクローをお見舞いする。

「つか、なんでお前がこの部屋にいるんだ!？」

「あだだだ、そんなこと言うなよ。俺達ソウルメイトじゃねえか」

「てめえのようなソウルメイトいらねえよ!!」

とりあえず俺に飲ませようとしてきたセロリジュースを此奴の口の中へと流し込ませる。スヴェンは「まずっ!？」と叫んでしばらく咽た。

「ふっ……さ、さすが俺のら、ライバル……」

「だから何でお前がこの部屋にいる。正直に答えろ」

またふざけて話を逸らせないようにいつでもめれるよう組み伏せておく。するとスヴェンはもじもじしだした、なんかキモイ。

「そりやあお前……こんな可愛い子と一緒に住んでてさあ……俺にヤラシイもん見せようとしてんだろ!？」

「逆切れかよ!？」

「当たり前だ！俺の前でイチヤイチャしやがって!!しかも、ホテルとか滞在する場所を取り忘れてしまって野宿になるからどうしようかと迷ってたから仕方なしにノブツナの所にいさせてもらおうとついでに思ってた俺にこんな仕打ちとか鬼畜だなお前!!」

「理由！理由をついでにするな!」

ホテルの予約をとっていなかったお前が悪い。もうこれ完全に俺に対する八つ当たりじゃねえか。やはり強制退去させようかな……

「まあそれもあるが……ブラドの件でな、色々と話しておこうかと訪ねてきたまでだ。あとついでに居候させて」

やつと真面目に理由を話す気になったか。イ・ウーのNO.2『無限罪のブラド』、吸血鬼とかいうファンタジー野郎のようだが詳しい事は聞いていない。スヴェンはバチカンの指令でブラドを捕えに日本まで来て、俺達に協力を依頼してきた、吸血鬼がどう

いうものか知っておく必要があったし今後の作戦も決めておく必要もあったから丁度いい。居候は余計だが

「まあ、俺とレキに話しておく必要があるが……あと鳩やジークらにも伝えるべきじゃねえのか？」

「ああ、それなら問題ねえぞ？」

「は？」

「どういうことかとキョトンとしていたが、突然別の部屋と洗面所の扉が開きジークと鳩がウキウキしながら出てきた。」

「ノブツナ、レキ！今日はお泊り会らしいな！もうワクワクしてUNOとかトランプとか持ってきたぞ!!」

「ノブちゃん、洗濯物畳んでおいたツスよ。自分の下着とレキレキの下着と一緒に洗濯してたとか変態っスね！」

「お前ら……」

俺はがくりと膝をついた。なんでお前らまでいるんだよ、もうツツコミ切れません

……

「っしやあ!!ウノっ!」

スヴェンは叫んでカードを置いて俺に向けて勝ち誇った顔を見せてきた。俺は無視してカードを置きウノと呟く。

「ドローツーツす」

鳩がゲスな笑みを浮かべてドローツーツを置く。

「ふははは!!ドローフォーだ!」

ジークはやかましくドローフォーを置いた。

「……」

そしてレキが静かにドローフォーを置き、スヴェンはがくりと膝をついた。

「くそおおっ!せつかく上がれると思ったのに!!流石はノブツナの新しい相棒だな!だが、次こそは負けんぞ!!」

スヴェンは悔しそうに合計8枚のカードを引いていく。どちらにしろ俺の上がりな人だけど……っつて

「違ああああうっ!!」

俺は思い切り手札を机に叩き付ける。のんびりウノをしている場合じゃねえだろ!? スヴェンは呆れた様な顔をして俺を見てきた。

「なんだなんだノブツナ、俺に勝てないからってヤツケになるのはよくねえぜ?」

「違うだろ!? 作戦とかブラドの情報とか話すんじゃないのかいな!」

「ノブちゃん、そう焦んなくていいっすよー。あ、コーヒーおかわり欲しいっす」

「ノブツナ! あとお煎餅欲しい」

「お前らは人んちで寛ぎすぎだよ!」

そしてお前ら二人は勝手に人んちで寛いでんじゃねえって。しかもジークにいたつては人のお菓子を食うんじゃない。ようやく観念したのかスヴェンはやれやれとため息をついた。

「仕方ない、嫌がらせはここまですて……そろそろ話をしないと。まずノブツナ、吸血鬼についてだが……」

漸く真面目に話す気になったかとほっとひと息つく。真剣な眼差しになったスヴェンは俺にある物を渡した。

「……ナニコレ? 『吸血鬼ドラキュラ伝説』?」

「年代物の映画だ、詳しくはこれを見て学ぼう。DVDプレイヤーとポップコーンの用意をしてくれ」

「殴るぞ?」

そろそろふざけないで欲しい。もうこいつ追い出したいよね?

「ノブツナ! コーラは何処に入っている!」

「お前は人んちの冷蔵庫を漁るんじゃない!! てかなんでワクワクしてんだよ!」

「まあ彼のやる事は分からんでもないっすけど……ノブちゃん、ブラドラ吸血鬼はよくイメージされてる普段の吸血鬼とは違うっすよ」

普段の吸血鬼とは違う? それはどういうことだ? とりあえずコーラをラツパ飲みしようとしているジークを蹴とばして尋ねた。鳩の答えにスヴェンは頷いて口を開く。

「吸血鬼は血を吸うことで食事をすると言われているが、本来の吸血鬼は吸血をすることによって血を吸った対象の遺伝子を取り組み、自分の遺伝子を上書きをする。要は種の生存するために血を吸って進化をするようなものだ」

主としての生存する手段が変わっている種族だな。上書きできるということは優れた遺伝子を上書きすることで己がより高位な主として進化し続けることが可能だということだ、だが遺伝子の上書きを計画的に組まない……

「ノブツナお前の察しの通りだ、自分は上位種だと自惚れた吸血鬼たちは無計画に吸血をし続けて滅んだ。その中でもブラドは優れた遺伝子を計画的に組み込み生き延びた。今世界中に生存している吸血鬼はブラドとその娘、そして俺の母ちゃんだ」

自分は人間との混血種だから数はいれないとスヴェンは述べた。ファンタジックな種族が本当の意味でファンタジックになりそうになるとは、なんとも皮肉な話だ。

「あと、奴らが違う所は対処法だ。ニンニクとか十字架とかはほぼほぼ無意味だ。吸血

鬼には『魔臓』という4つの急所があつてな、そこを同時に潰さねえ限り何度も体を再生できる。だが個体によつて箇所が異なっているから何処を狙えばいいか分かりにくい」

「ずいぶんとせこい体質だな」

「それでもねえぞ？ブラドとその娘は過去にバチカンの聖騎士との戦いで魔臓が何処にあるか分かるように目玉の紋章をつけられた。ある程度戦つて苦にはなねえだろう」

ある程度つてどの程度だ。スヴェンは気楽にわらつているようだが、話から聞いて爆弾とか機関銃とか用意しないと苦戦を強いられるのではないかと思えるのだが。

「それにあいつは取りんだ遺伝子を利用して吸血鬼の姿をくらましている」

「となると更に見つけるのが面倒くさいじゃないか」

「そう焦んな、ダンピールである俺には姿をくらましても何処に吸血鬼がいるか、変装しているのか臭いで分かる。というか武偵校内にブラドが潜んでる臭いがしたぞ。こここの武偵校の警備はどうなつてんだ、ザルすぎるじゃねえか」

まじか!?ブラド、うちの学校内に潜んでたのかよ!?ジャンヌダルクの件やドリアンのことといい、どうしてうちの学校は対犯罪の学校のくせに犯罪者をすんなり校内に潜入させてるのか。

「スヴェン、校内を散策すれば誰がブラドか分かるのか？」

「難しいな。相手の正体を分かることは相手も分かっていることだ。奴はバレないように慎重に行動するようになるだろう。たぶん、刺客を放ってくるな」

刺客か……その時は返り討ちしてやる。でもドリアンの時みたいにドツキリお宅訪問はやめて欲しい。だが相手が隠れるのなら見つけるのがより困難になりそうだ。

「少し気になってんだが、なんでブラドは日本にいるんだ？」

いの一番に気になっていたのがイ・ウーのNo.2の吸血鬼が何故日本にいるのか、そしてなぜわざわざ変装してまで武偵校にいるのか。遺伝子の上書きが目的ならこんなところはないで世界中でも回つとけと疑問に思っていた。

「それはたぶん、自分の奴隷を見張っているからだ」

「奴隷……？」

吸血鬼のくせに奴隷を持っているのか。まあ考えられるとすれば自分に相応しい優れた遺伝子を手に入れるための育成だろう。

「ブラドは過去にフランスで初代怪盗リュパンと3代前の双子のジャンヌ・ダルクの子孫との戦いで引き分けたその後、現代のリュパンの曾孫を拉致し奴隷にした」

リュパン？もしかしてフランスの大怪盗といわれたアルセーヌ・リュパンか。ジャン

ヌ・ダルクは：：確かあいつは30世と名乗ってたよな、同じイ・ウーだしもしかするとブラドの事を知っているだろうな。スヴェンは煎餅をかじりながら話を続けた。

「上司から聞いたのだがブラドがイ・ウーに入る前の話だ、リュパンの曾孫は隙を狙って脱走しイ・ウーへ辿り着きイ・ウーのリーダーに匿ってもらった。無論、己の奴隷が奪われたのだから当然怒りイ・ウーのリーダーに勝負を挑むが敗北。以後はリュパンの曾孫を監視を含め身を置いてリュパンの曾孫諸共イ・ウーの一員になったわけだ」

結局はどちらのしてもブラドの奴隷の首輪から逃げられなかったという訳か。どちらにしろイ・ウーだから哀れと思わねえがな。

「うちの学校にリュパンの曾孫がいて、そいつを逃がさねえように監視してるってわけか」

「まあな、弱みを握ってる可能性もあるし意のままに操れる駒でもあつから面倒だ」
「つまり：：：どういうことだつてばよ」

『吸血鬼ドラキュラ伝説』を見ながらポップコーンを頬張りキョトンとしているジークにげんこつを入れる。もう最初から聞くのは面倒なんだからな。というかレキ、お前もポップコーンを食べながら映画を鑑賞してたのかいな：：：すると鳩が何か閃いたかゲスな笑みを浮かべた。

「ブラドにとつてリュパンの曾孫は至高の餌：：：ということは、そいつ逆に利用すれば

出てくるんじゃないっすかね？」

「なるほど、餌を横取りすれば怒って化けの皮を剥がすかもな。お前考えることゲスいな！」

鳩の提案にスヴェンもニヤリと笑った。気が合いそうで何よりです、でも俺に嫌がらせしたら容赦しないが。ジークはポップコーンを頬張りながらワクワクしていた。

「よく分からんが楽しそうだな！俺も賛成だぞ!!で、ノブツナとレキはどうする？」

「……私はノブツナさんに従います」

「別に反対意見も反対する理由もねえし……のるぜ。さっさと済ましてお前を追い出したいからな」

早くこの一件を片付けないとこのおバカ二人も居候しだしそうで怖いし。そうと決まればさっそく作戦を練らねば。まずはブラドの奴隷であるリュパンの曾孫が誰なのかを見つける必要があるな。

「それでスヴェン、今後の対象であるリュパンの曾孫の本名は分かっているのか？」

「それなら問題ない。リュパンの曾孫……リュパン4世の名前は峰・理子・リュパン4世だ」

それを聞いて俺は盛大にズッコケた。どうしよう、そいつクラスメイトです。

22話 くつころ系姫騎士

漸く署から出たジャンヌ・ダルク30世は大きいため息をつく。弁護士を通して政府と司法取引を行い、パリ武偵校から留学してきた生徒ジャンヌ・ダルクとして釈放された。

表向きは一般の武偵として活動することにはなったが、それでもイ・ウーのリーダーの気質を継ぎ純粹に己の鍛錬を目的とするイ・ウー研鑽派として裏では活動するつもりだ。だが司法取引したことでイ・ウーの中でも過激派で世界に対して侵略行為を行うイ・ウー主戦派からは裏切り者のレッテルを張られ目の敵にされるだろう。

しかしそんな事を今気にしている場合ではない。ジャンヌはどうしたらいいか考え込んでいた。弁護士との面会時、面会に来たのは弁護士に変装していた理子だった。武帝殺し事件を起こしたがアリアとキンジとの戦いで失敗に終わった理子はイ・ウーから脱退し、警察に出頭して司法取引し武偵校に戻って来たという。

理子はジャンヌにこれから行う事を話した。理子はアリアの母親の裁判に有利な情報と証拠の提供、自らが出て証言する代わりに、ブラドの日本での活動拠点の一つである横浜の『紅鳴館』の宝物庫に隠されたブラドから奪われた母親の形見を取り返すのに

協力するようキンジとアリアに頼むと。

イ・ウーから脱退し、一時的ではあるがブラドからの監視は逃れた。だからブラドが自分を拉致監禁していた証拠を手に入れ仕返す。そしてもう一度アリアと戦い、ホームズの末裔を倒し初代リュパンを超えようと理子は計画していた。だが理子の計画を聞いたジャンヌは心配でならなかった。

(理子は焦っている……)

表は余裕綽々、計画にウキウキしながら話してはいたが彼女には時間がなかった。ブラドが理子がイ・ウーを脱退し逃れていることに気付いていないはずがない、いつまた攫いに来るか分からない。

本当はアリアとキンジに助けを求めているのではないのか？だが彼女のプライドがそれを許していないのだろう、例え正直に言おうとしても嘘で偽って誤魔化すだろう。

(理子を助けなくては……！)

ジャンヌは理子を助けようと考えた。だが自分には何ができる、先代もそして当代である自分や理子の力でもブラドには勝てなかった。だからと言って理子の計画に自分が介入することを理子は断るだろう。

どうしたらいいかジャンヌは悩んだがふとアドシールドでの戦いを思い出した。異能の力には勝てないだろう、不可能だったことを覆した男、遠山キンジ、そして彼の相

棒であるアリアがいる。

(やはり遠山キンジに託すべきなのか……)

キンジ達が理子に協力するのならばブラドとの戦いは避けられない。彼らはブラドの力も弱点も知らない、ならば彼らに吸血鬼、そしてブラドの事を伝えなくては。決意したジャンヌは武偵校に向かうべく署の前に停まっていた黒いメルセデス・ベンツ、迎えの車へと乗り込んだ。

(……?)

車の前で迎えていた黒服の男、恐らく監視員であろう男に誘導されて乗り込んだその瞬間変わった香りがしているのに気付いた。車内で香を焚いたのかそれとも香水の匂いなのか、気にはなったが両サイドには黒服の男が座つてゐる為動く事はできなかった。何か香水でも吹きかけたのかと尋ねても彼らは無言のまま何も答えなかった。

ジャンヌは違和感を感じていたがその間に車は動き、進んでいく。このまま武偵校へと向かえればそれで構わないと考えていた。

進むこと数十分、道路の標識で右折をすれば目的地である武偵校のある学園島へと向かえるところを車は左へと左折して進んでいった。

「……? 学園島へと向かう道を間違えているのだが?」

不審に思ったジャンヌは再び両隣の黒服の男と運転手に尋ねたが彼らは何も答えな

かった。これはおかしい、何かが変だとジャンヌは気付いた。彼らは本当に監視官の間か？今ここで氷の能力を使っておくべきかと考えていたら車は3階建てのパーキングエリアの屋上で駐車した。ここから降りて歩いていけというつもりなのか、それとも……とジャンヌは警戒しようとした。

「……こんなチョロイのがジャンヌ・ダルクの末裔とか、ジル・ド・レエが草葉の陰で泣いてるつすよこれ」

検察官ではない、少女の声が聞こえた。ハッと気づいて振り向こうとした瞬間、自分の首にジャックナイフの刃が当てられていた。

「無暗に動いたら危ないつすよー。あ、でもウチは今すぐにでもキルしたいから斬っちゃうかもしれないつす」

自分の左隣に座っているのは黒服の男ではなかった、黒服を着た少し小柄の金髪の少女だった。少女はギザギザの歯を見せてゲスな笑みを浮かべる。何時からいたのか、そして何故気づかなかったのかジャンヌは驚きを隠せなかった。その時右からゴリツと右側の頭に金属の塊が当てられる。横目で見ると少女と同じように黒服を来た目つき
の悪いツンツン頭の青年がFP-45を当てつけていた。

「能力を使って暴れようとすれば撃つ。バチカンから殺しのライセンスを貰っている、

武偵と違つて俺は容赦ねえぞ?」

「……何時からいた?」

「もー最初からっス。ウチの焚いた香を嗅いでちよーつと惑わらせてもらつたスよ。警戒心0で呆れてビツクリっす」

「幻術か……お前、何者だ?」

「おい鳩。そのお香、腐つた海みたいな臭いで鼻が曲がりそうだったぞ」

「むー、いい香りだと思ふっスけどねー!スヴェンは鼻がおかしいじゃないっスか?」

「ジャパーンのお香はようわからねえな」

「ジャンヌの問いを無視して鳩とスヴェンがプンスカと言い争いだす。彼らが一体何が目的なのか、何がしたいのか分からなくなつてきた。

「……お前達の目的は何だ?」

「それはウチらのリーダーがご教授いたすっス」

鳩がジャンヌにウインクして答えると、運転席からノブツナが助手席からジークが顔を覗かせてきた。

「ジャンヌ、ちよーつと俺達に協力してもらおうか」

「よっ!久しぶりだな!これからデートしにいかない?」

「っ!?貴様はあの時の……!!」

ジャンヌは目を丸くして驚愕する。ジークの事ははつきりと覚えていた。あの無茶苦茶でこちらの調子を崩してきた男の事を忘れるわけが無い。

「貴様……っ!!何のつもりだ!!」

「まーまーそう怒らずにさあ。それでどこ行く?あつ皆でこれからネズミーランドにも行こうぜっ!」

「バカ」

大はしやぎするジークにノブツナはげんこつを入れる。話が進まないのでノブツナは率直にジャンヌに話した。

「峰理子が何処にいるのか、これから何をしやがるのか、知ってるだろ。教えてくれねえかな?」

「……教えろと乞うならばこの待遇はないのではないか?」

ジャンヌはジロリと睨み返す。彼らの狙いは理子なのか、ジャンヌは警戒して答えようとしなかった。

「理子はもう司法取引している、お前は武偵のようだが理子をつけ回す必要がないはずだ」

「これがあるんだな。俺達はその上、ブラドを狙っている。ブラドを捕えるのに彼女の存在が必要なんだよ」

ノブツナの答えにジャンヌはノブツナを鋭く睨み付けた。要はブラドをおびき寄せ
るため理子を餌として利用するつもりだ。

「お前達武偵は仲間を売るのか!？」

「んー……俺は理子がイ・ウーだったとかブラドの奴隷だったとか、正直どうでもいいし
気にはしてない。けど鳩とスヴェンが許してねえみたいでさー」

怒って声を荒げるジャンヌにノブツナは宥めるように笑った。

「イ・ウーがうちら『葛葉』にやった所業はもう絶許っス。こちとらファツキンイ・ウー
精神なので」

「それに峰理子がやった武偵殺し事件……最後の航空機ジャックの件だが、日本政府は
許しても外の連中は許してねえみたいだな」

スヴェンの言葉にジャンヌはどういう事かと視線を向けた。するとジークがジャン
ヌにファイリングされた書類を渡した。

「あの時600便に乗っていた乗客者のリストだ。その中に中東のお偉いさんを始め各
国のお偉いさんも乗ってたみたいだねー」

ノブツナは他人事かのようにわざとらしく話してきた。

「中にはイ・ウーをぶつ潰したい諜報機関とかの知り合いとかいるお偉いさんもいるみ
たいでさー……スヴェンはその知り合いだという上司がいるみたいだし、理子のことち

くるかもしれないねー」

「貴様……!!それでも武偵か!!」

「だから言ってるだろ、俺は知ったこつちやねえって。事を荒げずに穩便に済ましたいから頼んでるじゃねえか」

怒るジャンヌにノブツナは呆れるように肩を竦めて答えた。ジャンヌは目の前にいるこの男は本当に武偵なのか、疑えて思えてきた。もし話せばこいつらは理子に何かしでかすだろう。ジャンヌは首を横に振った。

「……断る。貴様らの要求は飲まない」

「……あーうん、そうだろうと思った。『シユート』」

ジャンヌの答えにノブツナはやっぱりと苦笑いし、無線機を持って誰かにつなげた。その瞬間、ジャンヌの横顔に何が掠めた。一瞬事でジャンヌは見開くが掠めた先を見ると弾痕があり、車のフロントガラスにも同じように弾痕があった。

「狙撃……!?!」

「俺の相棒に狙撃のプロがいてさー……だからお話の場所を屋上にしたんだよ。お前ら元イ・ウーさんは司法取引されても死ななきや問題はねえよな? 肩を射抜いて、膝を射抜いて二度と剣を持たせないよう車いすか病院のベッドでの生活になっちまうけどいいか?」

「司法取引されても不慮の事故で死ぬかもしれないスよ？世の中には法律に守られてもいつの間にか死んでる人とかいるしね！」

ノブツナに続いて鳩もゲスな笑みを浮かべた。彼らの言葉に、彼らは本気でやるつもりだと確信した。きつと黙秘を続けて殺されてもこいつらは力尽くで理子を見つけ、売るに違いない。ジャンヌは悔しくノブツナを睨み付ける。

「……わかった、話す。その代り、理子には手を出すな」

「いいだろう。ま、協力してブラドを捕えるつもりでいたし？鳩、スヴェン、文句は無いな？」

ノブツナの問いに鳩は物足りなさそうに、スヴェンは無言のまま頷き武器をしまった。ノブツナはにこやかにジャンヌに手を差し伸べる。

「じゃ、取引成立ってことで」

「……理子を傷つけてみる、私が貴様を殺しに行くぞ」

ジャンヌは殺気を込めて睨み付け力強くノブツナと握手をした。

「お……こわかったー」

ノブツナ達は屋上に車とジャンヌを置いて去った。漸く一仕事終えたとノブツナは

背伸びをし、無線機を繋げる。

「手伝わせてすまなかつたな、レキ。先に集合場所の『ラーメン屋百太郎』で待つてくれ」

『ノブツナさんの頼みですから……私は従つたまでです。あと、先に食べていいですか?』

「お願い、大量に注文しないでね? 諭吉消費する程の量を頼まないでね?」

ノブツナはひやひやしながらレキに懇願する。レキの事だからこうでも言つておかないと幾人の諭吉が犠牲となる事か。一方でジークはともうれしそうに語っていた。

「女騎士独特の睨み付けだったよな! あのくっころの表情……そそるっ!」

「もつといたぶつてやりたかつたスけど……まさかあそこまで騎士(笑) だとは思わなかつたつスよ」

鳩は呆れながらため息をついて肩を竦め、ノブツナの方を見て苦笑いをした。

「まさかノブちゃんのでつち上げた情報をまるまる信じるなんて、チヨロすぎじやないっスか?」

ジークがジャンヌに渡した情報はまったくの嘘であり、別に理子売るつもりもなかつた。ノブツナはニツと笑つてうなづく。

「相手を信じ込ませるには雰囲気づくりが大事だ。スヴェンや鳩もいたし、上手く信じ

てくれてよかったぜ」

鳩はイ・ウーの事を知っていたし、スヴェンには諜報機関に知り合いがいる上司は本当にいます。だがどちらにしる理子のことはちくるつもりも仲間を売るつもりも全くなかった。

「司法取引しているとはいえ奴は元イ・ウー……あっち側の連中に突き出す気はないのか？」

スヴェンの問いにノブツナはニヤニヤしながら笑う。

「おまえ、貴重なロリ巨乳を売り飛ばすようなことするわけねえだろ！あいつのプロマイト写真は高く売れるからな！」

ノブツナは過去に写真部と協力してプロマイト写真を武偵校の生徒達に高く売り飛ばしていた。特に白雪、理子、他特殊捜査科通称CVRの学生は売れている。真実を知ったジークと鳩はプンスカと怒りノブツナに飛び掛かる。

「なぬう!?!バイヤーは誰かと調べていたがお前だったのか!!もつとよこせ！」

「むー!ノブちゃん!うちというバストサイズDの隠れロリ巨乳をほつとくとかありえないっすよ!!」

ノブツナはゲラゲラと笑いながら躲していく。そんな彼らを見てスヴェンは肩を竦めてため息を漏らす。ふとノブツナの携帯からメールが届いた。内容を見たノブツナ

は顔面蒼白しだした。

「ノブツナどうした、作戦がもうジャンヌにばれたのか？」

「違う……レキから『まだまだ足りないのでラーメン15人前頼んでいいか』ってメールが……急がねえと俺の諭吉がとぶううつつ!？」

ノブツナは必死な形相で走り出した。初めて見るノブツナの焦りようにスヴェンは嘲笑いながら追いかけて、写真ヨコセと、隠れロリ巨乳なめんなとジークと鳩が追いかけていった。

尚、ノブツナの財布から幾人かの諭吉が天に召されたという

23話 激おこステイツクファイナリアリテイぶんぶん ドリーム

「それで鳩、首尾はどうだ？」

『まずまずつてところっスね』

「上々じゃねえか」

人工浮島の市街地の喫茶店のオーブンテラスでノブツナとスヴェンはコーヒーを啜りながら鳩に電話で状況の確認を行っていた。鳩のウキウキしてそうな声色からして先手は打てただろうと確信をする。

『ノブちゃん、人使い荒いっスよー。いつバレるかももうハラハラドキドキしてるっスからね！』

「可愛く文句を言ってもしやあねえだろ、お前にしかできない仕事だし、最初に作戦提案したのお前だからな？」

『だからと言って遠山キンジ達より先に紅鳴館に潜入しろって無茶苦茶すぎるっスよ!!』

ジャンヌから得た情報で理子はキンジとアリアと協力してブラドの拠点である紅鳴

館に執事、メイドとして潜入しその館の宝物庫にあるであろう理子の母親のロザリオを盗むことを知った。

すると鳩が先に紅鳴館に潜入して彼らよりも先にロザリオを盗んでやろうと言いだしたのだ。一応、峰理子には手を出さない方針でブラドをおびき寄せせるか考えていたのでブラドの矛先がこちらに向けられるのならそれで良しとした。

先手を打つべくまず紅鳴館に鳩を潜入させることにした。鳩はハウスキーパーに変装し館の内装やセキュリティ、電子回路、在館にいる人数の確認、各部屋に盗聴器を仕掛けてる等屋敷内に仕掛けを設置していった。

「不在の主にその館の管理人、それでハウスキーパーは2人か……」

『ハウスキーパーの2人は休暇を取るみたいで不在になる代わりに管理人が帰ってくるっス』

「紅鳴館から急募があったみたいだな。来週にキンジとアリアが代理としてくるとジークから聞いた」

ジークが回収してきた情報で来週頃に1週間の間その二人がハウスキーパーの代理としてやってくる。盗むとすればこの間だろう。準備は6日、決行は最終日に違いない。

「しかし……横取りはマジでやんのか？」

『ノブちゃん、遠慮しないほうがいいつスよ。というか寧ろどうやって盗み出すのか気になるつス』

なんたつて大怪盗の末裔であるリュパン4世が計画するのだから、と鳩はニシシと笑いながら答えた。正直に言うのと横取りにはあまり気が乗らない。理子を助けるつもりもないし、あの二人の潜入を邪魔する気もない。

『まあノブちゃんはノブちゃんなりになってけばいいじゃないつスか？それはさておき、帰ってくる管理人は誰だと思つス？』

クスクスと笑う鳩にノブツナはいささかムスツとする。この様子からすると報酬のメロンパンを倍に要求してくるに違いない。

「知るかよ。勿体ぶつてねえで教えろ」

『はいはい、なんと……武偵校の非常勤講師、小夜鳴徹先生つス！』

ノブツナとスヴェンは顔を見合わせる。ブラドら吸血鬼は吸血し取り組んだ相手の遺伝子を使つて変身をする。そしてスヴェンはダンピールの力で吸血鬼の臭いで吸血鬼が誰に変装しているのか暴くことができ、武偵校内にブラドの臭いを探知した。そしてそのブラドの拠点である紅鳴館の管理人が非常勤講師と聞いてノブツナは改めてスヴェンに尋ねた。

「スヴェン、お前はどう思う？シロかクロ、どっちだ？」

「恐らくだがその非常勤講師の男がブラドの可能性は高いな……」

小夜鳴はクロ、そいつがブラドの可能性大と決まるとノブツナは大きくため息を漏らした。もし小夜鳴がブラドだとすればキンジ達はただブラドの手のひらの上で踊ることになる。ノブツナと同様にスヴェンも呆れ気味にジト目で見つめてきた。

「お前の学校、裏でイ・ウーと絡んでるわけねえよな？」

「知らねえよ……」

理子が元イ・ウーだし脱イ・ウーのジャンヌが転入するし、講師が実はイ・ウーの一員でしたとなるとなんだか疑ってしまう。

『それでそれで、うちはどうしとけばいいッス？まだ潜入し続けとくつスか？』

「あー……一旦戻って来てくれ。もう少し作戦を練る」

『リョーカイ！あ、新宿の高級メロンパン4つちやーんと用意してくださいッスよー』

鴉が電話を切って通話を終えるとノブツナはダメ息をついて脱力した。そんなだからけでたしたノブツナにスヴェンがニヤニヤする。

「どうした？そんなに気を詰めるたあ珍しいな。セロリ食うか？」

「当たり前だろうが。どうやってロザリオを奪うか、どうやってブラドを倒そうか……色々と考えなきゃなんねえっての。あとちやっかりセロリを食わそうとすんな」

スヴェンが食わせようと手に持つてるセロリを奪ってスヴェンの口へとぶち込み、ノ

ブツナは大きく椅子にもたれかかる。

「あ、あゝ……癒しを、癒しをくれええ……」

「セロリ」

「いらねえよー！」

ますます気疲れしてきてもう帰って寝ようかとノブツナはやつけになって立ち上がる。その時、遠くから何やら人がざわついている声が聞こえてきた。何事かとチラリと見た瞬間、白銀の毛並みをした大きな体躯の狼が颯爽と道路を駆けて通り過ぎて行った。

「狼……？なんでこんな所に？」

何故こんな街中で、しかもあんな綺麗な毛並みをした大きな狼が駆けているのかノブツナは首を傾げた。動物園から逃げ出したのかと思ったが、あれほどの狼は何処の動物園にはいないだろう。

狼が通り過ぎたその数秒後、狼を追いかけるかの如くBMW・K1200R、世界最強のエンジンを搭載したネイキッド・バイクが通り過ぎた。そのバイクに乗ってる人物を見てノブツナは瞬間に静止した。

バイクに乗っているのはキンジと……何も飾りつ気のない純白の下着姿のレキがドラグノフを背負ってキンジの後ろに乗っていた。

「

ノブツナは呆然としてバイクを目で追って立ち尽くす。そんな突っ立っているノブツナにスヴェンはニヤニヤと嘲笑いながら小突いた。

「おいおい、あのバイクに乗ってた下着姿の子お前のバディじゃねえか。取られちまったのかー？」

何も答えないノブツナに更に嘲笑おうとスヴェンは顔を覗かせた。その瞬間、スヴェンはビクリと凍り付いた。今、ノブツナは一度も見た事も無い顔をしていた。目も口も鼻も微動だにしない、怒りも悲しみも妬みも見えない全くの無。こんな顔、初めて見るスヴェンは恐る恐る後退りする。

「……」

ノブツナはゆっくりと動き出した。途中で無言で無表情でスヴェンの方へとグルリと顔を振り向かせる。言葉にしなくてもわかる、ノブツナは「ついてこい」と言っていることを一瞬で理解したスヴェンはおどおどしながらノブツナについて行った。

キンジは保健室に襲撃してきた狼、コーカサスハクギンオオカミを追いかけている。何故、何処から、何の目的で武偵校に忍び込んで襲い掛かって来たのか色々疑問に思うが今はそれどころじゃない。早く捕えないと民間人にも被害がおよび大事になる。

保健室での理子のいうハプニングイベントのせいで絶賛ヒステリアモード中のキンジはBMW・K1200Rのスピードを上げて狼の追跡を続ける。

「キンジさん、なるべく早めに終わらせた方がいいです」

ふと後ろに乗っているレキが伝えてきた。彼女の視力のおかげで狼が何処へ逃げるのか教えてもらい引き離されることなく追いかけている。彼女の言う通り、大事になる前に終わらせなければならぬ。

「勿論、そのつもりでいるよ。あの狼を街へ出させないさ」

「それもありませんが……」

それも？とキンジはレキの言葉に何か引つかかるような気がしてきた。どういう事が尋ねようとしたが先にレキが話を続けてきた。

「キンジさん、後ろを見ないで集中することをおススメします」

後ろ？何故後ろを見てはいけないのか、キンジは不思議に思った。まさかあの狼とは別に追手が追いかけているのか、キンジはレキの忠告に従わず後ろをちらりと見てしまった。

ナの逆鱗に触れてしまったのか、キンジは考えを張り巡らせるが全身に冷や汗が流れて頭が回らなかつた。

「人工浮島の南端、工事現場です。工事現場の中に足跡が見えました」

「ナイスっ!!」

今は狼に集中したい。キンジは更にスピードを上げてノブツナを引き離して狼を追いかけていった。遠くからノブツナの激昂とこの世のものとは思えない叫びが聞こえたが次は絶対に後ろを振り返らないとキンジは心に決めた。

「——主を変えなさい。今から、私に」

フエンスが一つない新棟の屋上にて、レキは横に倒れもがいている狼に声をかける。無人の工事現場へと追いつ込んでからは一瞬の様に流れた。

物陰に潜んでいた狼が隣の新棟へと跳んで逃げようとしたその刹那、狙いを定めていたレキがドラグノフを発砲、放たれた弾丸は狼の背中を掠めて外して逃げられたかのように見えた。しかし弾丸は脊椎と胸椎の間、その上部を掠めて瞬間的に圧迫、脊髓神経を麻痺させ、5分と短い時間ではあるが首から下を動けなくさせた。まさに神業、レキの狙撃の腕前にキンジは改めて驚く。

レキの問いに狼はしばらくじっとレキを見つめたまま動かなかつた。このまま逃げ

でも2キロ四方はレキの範囲内、次は間違いない狼を射抜くだろう。

すると手負い狼はよろよろと立ち上がるとゆっくりとキンジの前を通り過ぎ、レキへと近づいてゆっくりと彼女の脹脛、彼女の柔肌に頬張りした。まるで犬のように恭順しているようだ。

「すごいな……猛獣を手懐けるなんてな。だがその狼はどうするんだ？」

「手当して、飼います」

即答したレキにキンジは目を丸くする。まさか飼うといいだすとは思いもしなかった。だが武偵察はペットの飼育は禁止されている。それにこの狼はでかすぎる。

「厳禁はされていないが、ペットはダメじゃなかったか？」

「武偵犬として登録すれば問題はありませぬ」

警察犬と同じような武偵犬なら飼育は問題ない。だが狼だという事以前よりも狙撃科が武偵犬を飼うのは聞いたことがない。だがこの狼はすでにレキに服従しているように素直にお手している。

「ま、まあそういうのならいいんじゃないのか？」

この様子なら問題はないだろう。キンジは一件落着とほっと安堵した。

「それとキンジさん、今すぐ逃げた方がいいですよ」

レキの一言にキンジは思い出した。わずかに残っているヒステリアモードのおかげ

で背後からぞつとするような殺気を感じた。

「ファツキユウウウウウウウウウ!!」

振り向けば鬼の様な形相をしているノブツナが鉄パイプを思い切り振り下ろして来た。

「あぶねえええっ!?!」

キンジはギリギリのところを躲した。それでもノブツナはキンジを殺さんと目をぎらつかせガンガンと鉄パイプを叩き付けながら近づいてくる。

「今死ねっ!!すぐ死ね!!骨まで砕けろおおっ!!」

「待て待て待てえええ!?!」

振り下ろしてきた鉄パイプをキンジは真剣白刃取りで受け止めた。どうにか弁解しないと間違はなく病院送りにされる。

「ノブツナさん、落ち着いてください。キンジさんはこの子を街へと出さないようにするために手伝ってもらっただけです」

レキの鶴の一声か、彼女の言葉を聞いたノブツナは怒りがふつと解けたようでゆつくりとレキの方へと顔を向けて歩み寄る。

「……本当か? 変な事されてないか? チョメチョメされねえか? ポンポン痛くねえか?」

「私は大丈夫です」

静かに頷くレキにノブツナは空気が抜けたように大きく息を吐いてレキを撫で、ジト目でキンジを睨んだ。

「あぁー……そっかー。なんだよ、キンジそれならそうと早く言えこの野郎」

「絶対言える状況じゃなかったろ!?!」

あの怒り様じゃ絶対話を聞かないだろう。キンジは必死にツツコミを入れる。しかしノブツナは無視してレキの傍にいる狼の方へと視線を向けていた。

「そんでこの狼は?」

「私の武偵犬にする予定です」

「ちよ、俺の部屋で飼うのか!?!」

「ダメですか……?」

じつと見つめてくるレキにノブツナはドキリとたじろぐ。今まで他の物ごとに真剣になつて尋ねてくることは一度も無かった。ノブツナはしばらく考えて諦めて首を縦に振った。

「世話、ちゃんとできるのならいい。しつかり面倒見るよ?」

「大丈夫です、熟して見せます」

ノブツナは狼を撫でようとした。狼は彼の手を嗅いで、しばらくじつと見つめてきた

が。ゆつくりと近づいてプイツとそっぽを向いた。

「あつ、てめつ！飯抜きにすんぞ!!」

やつといつものノブツナに戻つたとキンジはほつと安堵した。そこへ漸くスヴェンが追いついた。

「おまえ、着いた途端に俺を踏み台にして走り去るんじやねえよ……む、その狼は……」
スヴェンはレキの傍に座り込んでいる狼を見てノブツナに耳元でキンジに聞こえないように話した。

「ノブツナ、ブラドは手下に狼を従わせている。こいつは多分その一頭だ」

「マジか」

「何があつたが知らねえが敵意はない……問題はないがな」

完全にレキに従順しているのでこの狼はもう襲い掛かつてくることはないだろう。だが手掛りの一つを手に入れたのは嬉しい成果だ。スヴェンはちらりとレキに視線を向けて尋ねる。

「レキ、誰かルーマニア語で喋つてたやつはいなかつたか？」

「二人……小夜鳴先生が聞こえないよう眩いていました」

レキの答えにスヴェンは確信したかのように深く黙つて頷いた。

「ところで、なんでお前下着姿なんだ？」

「保健室で検査ということでアリアさん達と服を脱いでました。小夜鳴先生はただの血液検査という事で服を脱ぐ必要はないと言っていました。……そこに獣の気配がしたので狼が窓を突き破って襲い掛かってくる前にロツカーに隠れていたキンジさんと武藤さんを助けて狼を追っていましたので着替える暇がありませんでした」

「ほお……どういふ事かなあキンジくん？」

レキの話聞いたノブツナは瞬時にこの場から逃げ出そうとしていたキンジに笑顔で尋ねた。口は笑っていたが目は笑っておらず激怒に燃えた目をしていた。命の危険を感じたキンジはノブツナが襲い掛かってくる前に振り返らずに必死になって逃げて行った。

「鳩、あいつ等からロザリオを横取りすつぞ。ぜってえに横取りすつぞ」

「あー……ノブちゃん？やる気になってくれたのは嬉しいすけど……ずっとレキレキに抱き着いたまま言っても説得力がないっすよ？」

ノブツナの部屋に集合し、作戦会議となったのだがノブツナはずっとレキを後ろから

抱きしめたまま動こうとしなかった。肝心のレキは嫌がることなく、気にすることなくただ静かにカロリーメイトを食べていた。

「スヴェンさん……な、なんかあつたんスか?」

「まあな。やりたかつた事を先にやられて怒り狂つてた。見てて面白かつたがすつげえ怖かつた」

どこか遠い目で語るスヴェンに鳩は首を傾げる。

「ふはははは!!このワンコすごいな!めっちゃ賢いワンコだな!!」

「ジーク、ワンコじゃない。狼だ」

「あと名前はハイマキです」

ジークは離れてレキの武偵犬こと狼のハイマキと戯れていた。ハイマキはジークの頭をガジガジと甘噛みしている。

「そんで話を戻すぞ?小夜鳴の正体はブラド、人間の殻にこもつた状態というのかスヴェン?」

「間違いねえな。もともとブラドの僕のこいつらはルーマニア語で指示を聞く。完全にクロだ」

だとすれば本当にキンジ達はブラドの手のひらで踊ることになる。何とも皮肉なことかとノブツナはため息をつくがどうでもよかつた。今はどうやってキンジ達より先

にロザリオを奪うか考えなければならぬ。

「鳩、プランはあるか？」

「任せてくださいっスよ。ちやーんと考えてるッス」

鳩がギザギザの歯を見せてゲスな笑みを浮かべた。

「でも……その前にそろそろレキレキから離れてくれないっすか？なんかもう見ててシユールッス」

「やだ」

24話 泥棒大作戦（誤）

紅鳴館に潜入して4日、キンジは紅鳴館の玄関内の掃除の最中であった。掃除とはいつてもこの防犯カメラ等のこの館内の防犯設備やこの館の管理人である小夜鳴の行動を観察をしていた。

事前に理子が調査した通り、あちこちに防犯カメラがしつこいと言っている程に設置されている。防犯カメラの視界を避けつつ行動パターンを調べるのは骨が折れる気がしてならない。それに加えて泥棒の準備までやらねばならないというのだから少しぐらいアリアも手伝ってほしいとため息をついた。

その刹那、ふと腐った海のような臭いが漂ってきた。何の臭いかと不審に思ったキンジは辺りを見回す。だが周りには今自分一人しかいない、その上腐った海のような臭いはいつの間にか消え失せていた。

「キンジ！何ぼさつとしてるのよー！」

先程の臭いは何だったのかと不思議に思っていたが、アリアがプンスカしながら階段から降りてきたので気にするのはやめた。どうやら今日もアリアは何か不機嫌らしい。キンジはやれやれと肩を竦める。

「大丈夫だつてアリア、怪しまれないようにちゃんとやつてる。そっちはどうなんだ？」
「問題はないわ。でも事前調査した時よりもセキュリティが嚴重になつてるのつて気持ち悪いわよね……ほら、部屋の掃除で見つけたのだけど、盗聴器があつたわ」

アリアは回収した盗聴器を見せ、キンジは「マジか」とため息を漏らす。この館に潜入してその翌日にアリアが掃除した際に地下金庫のセキュリティが事前調査された時よりも強化されていたことに気付いたのだ。物理的なカギを筆頭に、磁気カードキーや声紋キー、指紋キーに網膜キー、更には室内の赤外線に加えて感知床と嚴重に守られていたのだ。当初の予定であつた地下金庫へ正面から盗みに行くはずが変更にされた。

「それでキンジ、そっちは順調なの？期日まで間に合うのかしら？」

ハウスキーパーの仕事の期間が近づいている。だからアリアは不機嫌になつて急かしてきたのかと悟つたキンジは少しムスツとなつて言い返す。

「こつちは只管掘つていゝつていうのにお氣楽だな。理子のプラン通り、最終日に決行できるよう掘り進めているから問題ない」

「へえー……そう」

一瞬、アリアがつまらなさそうに目を細めギザギザの歯を見せて笑つた仕草が見えた。見間違いかとキンジは目をこすつて確かめるがアリアは背を向けて去ろうとしていた。

「邪魔して悪かったわね。キンジ、ちゃんと頑張りなさいよ?」

そう言つてアリアは去つていった。彼女の態度と様子にキンジは不思議に思い首を傾げた。普段の彼女なら子供の様にプンスカと喚くのだが今日はどこか大人しく、艶めかしかつた。まだ昨日のアリアの苦手な雷の事を引きずっているのだろうかと考えたが、アリアの事だからどうせすぐに元気になるだろうとキンジは結論を出し、自分の仕事を取り組むことにした。

「鳩、ずいぶんとお冠だな」

『ノブちゃん!! 当つたり前じゃないっスか!! 怒るのは当然っスよ!!』

今日も夜の定時報告の電話を行うのだが、今回の鳩は物凄く機嫌が悪い。よほど気に障ることがあったのか、キンジ達が何かやらかしたのだろう。今も尚鳩には幻術や変装を駆使して紅鳴館内に潜入してもらつており、キンジ達から情報を盗んだりして報告をしている。

「で、セキュリティが強化された結果、あいつらどう出るつて?」

『あいつらの考えた計画なんだと思うっスか!! なんと地下金庫の真上、遊戯室から掘つて穴開けてそつから釣り上げるっスよ!!』

ああ、そういう事ね……地下金庫のセキュリティが嚴重になつたから今度はそのセ

キュリテイが掛かってない場所、地下金庫の真上から攻めると。まあ確かにセキュリテイを回避する為にはそれらしい考えではあるが、デメリットが多すぎる。『私達がやりました』という証拠が残ってしまふし、発覚した際内部犯行だと疑われ真つ先に容疑者にリストアップされる。また地下金庫なのだから壁や天井は頑丈にされているはず、どうやって穴をあけるのやら。

『痕跡や疑われる証拠を残さないようにするのが怪盗でしょ!? ナニコレ!? 学芸会じゃねえんだぞ!』

「鳩ちゃん、鳩ちゃん? 素が出ちゃってる」

鳩がこんなにもブチギレてるのは珍しい。彼女から見て稚拙な作戦だったのだろう。鳩は深呼吸して少し沈黙する。

『……ノブちゃん、取り乱してごめんっす。リュパン4世にもものすごく失望しちゃったっすよ。きっとブラドも分かってて見逃してるっすねこれ』

「気にすんなって、報酬のメロンパン増してやつから」

今キンジ達はブラドの手のひらで怪盗ごっこを演じている。これだけ強化されたセキュリテイをどう掻い潜るか見ものだったのだろう。

「で、話は変わるがどうだ? 盗れそうか?」

『赤外線と鍵だけだったらうちの変装でもバレないし、指紋や磁気カード、声紋だったら

余裕つすけど網膜は厳しいっすね。目玉を抉るのはダメだしレプリカの作成は期日に間に合わないっす」

網膜は流石に厳しいか。後は感知床も設置されているから管理人の小夜鳴の足、靴のサイズ、体重等々、それらに合わせて足のレプリカも作成しなければならない。それらを作っている間にキンジ達がロザリオを盗んでいくから間に合わない。

まあ予想の範疇なんだけど

「そんじゃ鳩、でつちあげるとするか」

『了解っす!』

携帯の通話を切り定時報告を終えて、俺のコーヒーをセロリのジュースにすり替えようとしているスヴェンに拳骨を入れ、ハイマキと戯れているジークにテーブルに置かれているセロリを投げつけ、うたた寝をしているレキを起こす。

「スヴェン、ジーク、予定通り進めていく。大使館と警察の方にはちゃんと知らせているよな?」

「モチの論だぞ!何時でもオツケーだと渋川さんが言ってた」

「事前に伝えておいた。あちらは是非ともやってくれと大層喜んでいたぞ」
「よし……後は任せとけ」

「ほお……キンジがこんな所におるとは思いもしなかつたな」

インターホンが鳴つて客人化と確かめに向かうと紅鳴館の門前にノブツナとレキがいた。レキはまだしもよりにもよつて今会いたくない奴に出会つてしまうとは……ノブツナは俺を見ながらニヤニヤしながら笑つて小突いてくる。

「ノブツナ、お前何しに来たんだよ」

「ああ、小夜鳴先生に課題のレポートを提出しに来たんだ。この館の管理人だと聞いてただのけど、小夜鳴先生はいらっしゃるのかな？」

ノブツナは「お前執事の方が似合つてるじゃん？」と茶化してくる。皮肉にしか聞こえていないのだけど？

果たしてこのまま通していいのかと悩む。こいつのことだから何かしでかしてくるに違いない。そんな事を考えてたら小夜鳴先生がやってきた。なんとタイミングが良いのか悪いのか……小夜鳴先生はニコニコと二人を迎え入れた。

「いらつしやい犬塚くん、レキさん。ご用件は何かな？」

「溜まりに溜まった課題が漸く終わったので提出しに来たんですよー」

ノブツナがそう言うのと鞆から分厚すぎるファイルを3つ程取り出した。一体何をしたらそんな分厚いレポートが出来上がるんだよ。小夜鳴先生も流石にこれは苦笑いのようだ。

「それなら学校で提出してくれば助かるのだけどね……」

「何言ってるすかー、俺とレキはサボり魔なんですから学校で出せるわけないじゃないすか」

ノブツナは笑いながら答え、レキはうんうんと何度も静かに頷く。いやお前らそもそもサボるんじゃないよ。

「こ、ここでお話するのもあれですし、二人とも折角来てくださったのですから中で紅茶でも飲みませんか?」

「えーいいんですか! いやー一度でもいいからこんな立派なお屋敷で寛いでみたかったんだぜー!」

「……いただきます」

小夜鳴先生のご厚意でノブツナとレキは紅鳴館の中へと入っていった。途中、メイド服を着ているアリアを見てノブツナが大爆笑をしだし、アリアに蹴られた。

「やべえ、アリアのやつぺったんこ。それ着るとぺったんこが分かりやすいなおい」

「あんた……もう一度風穴地獄を味わいたいの？」

アリアの逆鱗に触れたノブツナはアリアのチョコクスリーパーの餌食に。ノブツナが悲鳴を上げている間にレキは黙々と紅茶を飲みながらケーキを平らげていく。本当にこいつら何しに来たんだよ。何とか解放できたノブツナがほっと安堵しながら辺りを見回す。

「それにしても小夜鳴先生、お一人で住むには広すぎなんじゃないですか？」

「あははは……私は研究に没頭してますから確かに私一人では広すぎですね」

「それと、中も随分と古そうですね……年代物もありそうですね？ 持ち主の方は結構年配の方じゃありませんか？」

「お恥ずかしながら……彼とは直接話したことが無くて。ですが君の思った以上の方と
思いますよ」

気のせいだろうか、ほんの一瞬だったのだが小夜鳴先生がピクリと眉間にしわを寄せたような。ノブツナの事だから教員に容赦なく気を逆撫でる事を言うからな……

「ところで……もしかしてメイド服とか沢山ありますか？」

ノブツナが物凄く真剣な眼差しで尋ねる。たぶん、碌な事を考えてないな此奴。ノブツナの謎の威圧感に小夜鳴先生は押されて引きつった笑みで頷く。

「え、ええ、あります……」

「……レキに着せちやつてもいいつつすか？」

うん、やつぱりか。

「ま、まあ……か、構いませんが、て、テイクアウトはできませんよ？」

「つしやあ!! ありがとう小夜鳴先生! 本当にありがとう!! レキ、メイド服に着替えてくれ、いや着替えてください!!」

ノブツナが黙々とノブツナの分のケーキを食べているレキに向けて土下座をしだした。おい、ただだけレキに着せたいんだお前は。というかレキ、お前は平然としすぎだ。

「……ノブツナさんが望むのなら」

「おお……メシア……!」

「レキ? 一度でもいいから断つてもいいんだぞ?」

「じゃ、じゃあ私は研究の続きをしますので……犬塚くん、レキさん、ご自由に館を楽しんでください。遠山くん、神崎さん、後はお願いしますね?」

あ、小夜鳴先生の奴、ノブツナの暴走に巻き込まれる前に逃げた。ノブツナはレキがメイド服に着替えてくれるからと言って喜びの舞いをしだしてどっか走り出して行きやがった。

「ほんとあいつ自由すぎるわよ……キンジ、私はレキの着替えを手伝うからあんたはノブツナを捕まえておきなさいよ?」

げつ、アリアの奴も面倒事を俺に押し付けてレキを連れてメイド服のある自室へと向かっていった。仕方がない、あいつが何かしでかす前に探さないと。

螺旋階段を上がって二階へ、一階のフロアへ、廊下や各部屋を覗くがノブツナの姿が一向に見つからない。本当に何処へ行った。確かにあいつの言う通り、改めて見ると本当に広すぎる屋敷だ。いたずらで隠れているんじゃないかとあちこち見渡しながら進んでいると、どこかで写真を撮る音が聞こえた。

音がしたのはいつも小夜鳴先生が食事をとる広い食堂だ。駆けつけてみると、ノブツナが食堂の奥に置かれている真鍮でできた如何にも年代物と思えるような燭台を持っているカメラで写真を撮っていた。

「ノブツナ、ここで何をしてたんだ？」

「おうキンジか、写真を撮る準備だ。メイド服のレキの写真は永久保存しておかねえと」
お前どれだけレキのメイド服姿を見たいんだ。欲望丸出しのノブツナを呆れて見ているとそこへアリアがやってきた。

「あんた達探したわよ。ほらノブツナ、お望み通りレキを着替えさせてあげたわよ？」

アリアがやれやれとため息をついて、レキを連れてきた。レキは赤いリボンのついた襟元にレース素材を組み合わせた長袖のワンピース、白いフリルの付いた丈の短いスカート、小さなお帽子のようなヘッドドレスと理子のいうクラシカル調なメイド服を着

ていた。そんなメイド服のレキを目の当たりにしたノブツナは案の定喜び発狂した。

「FOOOOOOOOOOOOOOO!!」

ノブツナはアリアがその場でドン引きするくらい、あらゆる角度からレキを激写していく。

「ノブツナさん、どうですか……?」

「いいっ……めっちゃいいっ! すっげえ似合ってるぜ!」

国宝級だとか言つてノブツナは大喜びしてレキを撫でる。もうこれ以上つつこまんで……

この後ノブツナはメイド服のレキを館内へとあちこち連れ回したり、遊戯室でビリヤードしたり、メイド服を持ち帰ろうとするノブツナを全力で食い止めたり、二人が帰るまで俺とアリアは振り回された。夕方になって二人がやっと帰る気になって門前で送る。

「ねえメイド服、こっさり持つて帰っちゃダメ?」

「ダメに決まってるだろうが」

どこまで執念深いんだ、お前は。諦めてないノブツナは無理にでも持ち帰るかもしれないので俺とアリアで足蹴して追い出した。

「や、やっと帰ったわね……本当に何しに来たのよあいつ」

アリアも今回ばかりはかなりくたびれた模様。ノブツナの奴、自由すぎるやつだからな……願わくばまたやってきて欲しくないのだが。

「というか、今日の分掘り進めれなかったのだけどうするの?」

そうだった……ちくしょう、ノブツナ達のせいで明日は倍に掘り進めなきゃならなくなつた。あれ結構力仕事なんだよなあ……

何日か過ぎて、遊戯室の下を掘り進んで何とか地下金庫の天井に孔を開けることができた。そして理子がお待ちかねと泥棒作戦を執行しようとした。

そのはずだった。その泥棒作戦当日、またしてもノブツナがやってきた。

だが、今日はレキを連れてきていない。その代り、幾人かの警察や黒いスーツを着た外国人達を連れてやってきたのだ。ノブツナの後ろにいる警察とスーツを着た外国人達が異様な圧を放っていて俺とアリアは圧される。

「の、ノブツナ……そいつらは何だよ」

「……キンジ、アリア、騙して悪いが仕事なんぞな。黙って通してくれねえか?」
「どういうつもりよ!?!ちゃんと説明しなさい!」

異様な事態に小夜鳴先生が慌てて駆けつけてきた。まさか生徒が警察を連れてくるとは思ひもしなかつたであろう。

「い、犬塚くん!!これは一体どういうことなんです……!?!」

「小夜鳴先生、説明をする前に先に紹介しておきますね。こつちが警視庁の方々と渋川剛氣先生、そこでこちらがルーマニア大使館とバチカン大使館ローマ法王庁大使館の方々です」

和服姿の分厚いべつ甲の眼鏡かけた男性が軽い笑みで頭を下げ、後ろのいかつい警察官達もそれに続く。大使館の人間たちはじつと館の方を見ていた。渋川と名乗った男性が前へ出て口を開いた。

「詳しい内容はわしが説明しましょう。小夜鳴さん、この館の主であるブラドさんをご存知ですかね?」

「え、ええ……ですがお会いしたことがないので詳しい事は分かりません……その彼が一体何を?」

渋川がちらりとノブツナの方を横目で見つめ、ノブツナは静かに首を横に振る。

「実はですな、そのブラドという男はルーマニアを始めあらゆる国から宝を奪い盗んでいるのですよ。その宝は各地の拠点にコレクションとして置いている……この紅鳴館もその一つだと。そしてそんブラドが日本におるとバチカン教会からバチカン大使館を通して知らされ、ルーマニア大使館の方々が被害届を出してわしらと犬塚に依頼してきたわけですよ」

話を聞いてまさかとアリアがノブツナを睨んだ。あの時紅鳴館へ訪れたのはその捜査が本当の目的だったのか。

「で、ですが……その物品があるとは思いませんが……」

「小夜鳴先生、それがあるんですよ。ここへ訪れた日、捜査して見つけました」

ノブツナは懐から真鍮の燭台の写真を見せた。その写真は間違いなくノブツナが食堂で撮ったあの燭台が写っていた。

「ルーマニア大使館の方に確かめてもらったところ、60年前にブラドが奪っていったという教会の燭台と一致しました」

「他にもこの紅鳴館にブラドが奪ったと思われる物品がある可能性がある。悪いですが家宅捜査させていただきます、物的証拠として押収させてもらいますよ？ああ勿論令状もありませんがね」

警察の一人が令状を取り出して俺達に見せてきた。令状がある限り門前払いにするわけにはいかない。小夜鳴先生は苦虫を噛み潰したような顔をして彼らの中へと入れていく。何だろうか、嫌な予感がしてきた。アリアも同じ予感をしているようで額に冷や汗を流している。ノブツナはずかずかと進んでいき、ちらりと小夜鳴先生の方へと視線を向けた。

「それじゃみなさん……まずは地下金庫から行きましょう。小夜鳴先生、案内をお願い

してもよろしいですか？」

「「!?!」」

俺とアリア、小夜鳴先生は目を見張って驚愕する。何故ノブツナが地下金庫の事を知っているんだ?! いや、それよりも非常にマズイ、地下金庫にある理子のロザリオまでもが押収されてしまう。

「な、何故犬塚くんが地下金庫の事を……?」

「バチカンにブラドを追ってる腐れ縁と優秀な潜入捜査官がいましたね。彼らの情報で地下金庫にブラドが奪った宝を保管していると聞きました……開錠をお願いしてもいいですか? あ、できなかつたら俺らで爆弾とかで爆破してこじ開けますから、鳩ちゃーん!」

ノブツナが呼びかけるとノブツナの背後から金髪の少女がひよこりと出てきた。いつの間にいたのか、気配すらしなかつたぞ……!?

「鳩、用意できた?」

「モチの論つス! ドリルと火薬……あ、C4はダメつスよね?」

「んー……いいんじゃない? 小夜鳴先生?」

「……今すぐ開けますので待ってくださいね……」

屋敷内が爆破されて大惨事にはなりたくないだろう、小夜鳴先生は静かに警察官と大

使館の人間を地下金庫へと案内していった。ノブツナと鳩も向かおうとする前にアリアがノブツナの腕を掴んで睨み付けた。

「あんた……最初っからわかっててやってたの?」

今すぐにも殴り掛かる勢いだったので慌ててアリアを止める。アリアがここで手を出し怒りに任せてしゃべってしまおうと自分達が地下金庫のロザリオを盗もうとしたことがバレてしまう。

「何の事かわらんな……まあお前らのおかげでルーマニアの奪われた宝が戻ってくるんだ、協力感謝するぜ」

明らかに皮肉だ。これには俺もムツときて睨み付ける。ノブツナは苦笑いして首を横に振った。

「あー……悪い、これはヒドイ言い方だったな。だがこれも武偵として仕事をしたまでだ」
ノブツナと鳩はそのまま地下金庫へと向かっていった。理子にどう伝えるべきか……今、理子にこの状況を伝えるべきじゃない。すると立ち尽している俺にアリアが思い切り蹴ってきた。

「いでっ!!? ちよ、何すんだよ!?!」

「突っ立ってる暇はないでしょ!! 私達も行くわよ。隙をつけてロザリオを盗るしかないわ……!」

もう泥棒作戦は失敗して滅茶苦茶になっている。意地でもなんでもロザリオを取り返すしかない。急ぎ俺達も地下金庫へと向かった。

セキュリティがすべて解除された地下金庫では警察官や大使館の人達があれやこれやと写真や資料を見比べながらブラドが奪ったであろう品々を段ボールへと入れて押収していた。言つては悪いと思うがまるで魚市のようにだ。

「こんなにも奪われた宝があるとはのう……犬塚、ブラドつて何もんじや？」

「あー……渋川さん、気にしない方がいいです。絶対に徳川さんとか愚地さんとか喰いかかってくるから、面倒になるから」

その中にノブツナも混じつて物品を調べるながら押収していつていた。ノブツナがあんな苦笑いして誤魔化そうとしているのは珍しい。

「ノブちゃん！これはどうするっスかー？」

ふとそこへ鳩がノブツナに駆け寄つて奪われた物品を見せた。それは青い十字架のロザリオだった。ふとそこへ携帯が鳴つてた。おそらく理子からだろう、本当は聞くべきじゃないのだが……俺はインカムをつけた。

『キーくん……状況は最悪だよね……滅茶苦茶だよね……？』

理子の声に力がない。いつもなら茶化してくるが、理子も外から状況を察しているの
だろう。

『どうして……どうして!? 理子の計画にミスはないはずなのに!! なんて、なんであいつがいるんだよ!!』

「理子、落ち着いてくれ……!」

『キーくん……お願い……理子の大事なロザリオをあいつらに押収される前に奪って……!!』

無茶な頼みだ。だが、もうこれしかチャンスがない。確か理子の大事なロザリオは……青い……十字架のロザリオ……最悪だ、最悪の状況だ。今そのロザリオはノブツナが持っている。

「どうすつかなーこれ」

ノブツナはまじまじと青いロザリオを見つめている。どうする……どうやってあいつから奪う……警察や大使館の人達に渡ってしまったらおしまいだ。するとノブツナは懐から小さな小箱を取り出してその青いロザリオをしまった。嫌な事に俺達を見ながら、だ。

「渋川さん、ちよつとバチカン協会から来た腐れ縁に確かめてもらわないと分からないものがあつたんでこれだけ押収して先帰りますね」

「おう、でも調べたらちゃんど返すんじやぞー」

ノブツナは鳩を連れて先に帰ろうとした。

「待つてくれノブツナ！そのロザリオは……！」

帰ろうとするノブツナを止めようとしたがアリアが腕を掴んで止められる。アリアは悔しそうに首を横に振る。俺達は表向きではハウスキーパーとして来ただけでロザリオの事なんて知らない。この場には小夜鳴先生もいる、もしロザリオの話でもしたら怪しまれてしまう。

ノブツナはピタリと止まって俺達の方へとちらりと顔を向ける。

「ロザリオ……これにどれだけの価値があるのかは俺は知ったこつちやねえがな」

これ絶対理子が聞いたら怒り狂うだろうな……インカムからは理子の涙の慟哭の声しか響いてないから聞こえてはないだろう。悔しいが今は何も言い返せない。

「……だが、誰かの大事な家族の大切な物だったのなら、謝つて返すさ」

「それはどういふ……」

ノブツナがどういう意味で言ったのか、分からなかったがノブツナは俺の耳元でささやいた。

「——深夜、人工浮島の南、道路工事現場に來い。持ち主連れて來いよ？」

それだけ告げるとノブツナは手を振つて歸つていった。ノブツナが何て言ったのかアリアは不審そうに首を傾げて尋ねてきた。

「キンジ、あいつなんて言ったのよ……？」

「くそっ……あいつ、全部知ってやがった」

「ノブちゃんも甘すぎっスよー。」

鳩は相変わらずギザギザの歯を見せてゲスな笑みを浮かべる。鳩の嫌いなイ・ウーの奴等に一杯食わせたのだから上機嫌のようだ。

「別に蹴落とすつもりもないし、助けたままでだ。それにこれでブラドが釣れるんらいいじゃねえか」

「まあそうっスね。でも今夜が山場っスよ?」

たぶんブラドの野郎は怒り狂ってるだろうな。間違いなく今夜あいつは殺しにやってくるだろう。

「後は餌に誘き出されてくれればいいさ……準備は怠らねえよ」

25話 ひと狩りいこうぜ（ゲス顔

もう間もなく約束の時間だ。人工浮島の南、深夜の無人となっている道路工事現場にて外灯の真下で待ち惚けていた。欲を言えば30分前ぐらいには来てほしいと思ったのだが取引じゃないからいいか。時間ジャストに無線が繋がる。

『ノブちゃん、撒き餌がもう間もなくそっちに到着するっス』

「おっけー……」

鳩の連絡を受けて軽く背伸びをする。今はボディーアーマー重ね着してポーチに手榴弾をいくつか入れ、普段使っているLARGRISリーに加えてS&WM500、グレネードランチャーM203を装着したM727、そして愛刀八房と装備は多めにつけた状態だ。ほんとこれからハンティングでもするのかといたい気分だがこれが冗談ですまされない。

『みなさん、配置はちゃんとしてきてるっスかー？今夜の天気は曇り時々雨！雨や風、天候を含めて仕留めるタイムリミットは30分、張り切っていきましょー！』

『必ず仕留めます』

『フハハハハ!!任せておけ!吸血鬼と戦えるなんてもうドキがムネムネ!』

『ぬかりはない』

レキ達の返事に全員やる気満々であることを確認する。これなら30分でも十分に仕留めることができるだろう。

「おし……最終確認ができればいいかかれよ?」

全員に伝えて無線を切る。深呼吸入れて足音のする方へと視線を向ければキンジとアリア、そして理子がやって来たのが漸く見えてきた。3人とも無言のままじつと俺を睨んでいる。見るからして怒ってるなこれ。

「よう、時間通りにちゃんと来てくれたみたいだな。ちなみに持ち主は……聞くまでもねえか」

「そんなことはどうでもいい!それをさっさと返しやがれ!」

どうしよう、普段の理子ちゃんなら絶対に言わない口調だ。こっちがイ・ウーでの峰理子か、随分とワイルドなことだ。ゆっくり近づくと3人に懐からロザリオの入っている小箱を取り出してLARGRグリーズの銃口を小箱に当てる。

「ちよつとノブツナ!何の真似よ!?!」

「このままはいどうぞって渡すわけにはいかないんだ。彼女からの報復が怖いんでね、理子はそのまま待ってキンジとアリアが受け取りに来てくれないか?でないとしたらこのロザリオを壊さなきゃならん」

キンジとアリアは理子に伺う。理子はイラツと俺を睨み付けてから頷き、二人が俺の下へと向かつて来た。

「ノブツナ、どういうつもりなのか後でちゃんと説明しろよ……？」

「その前に一発殴っていいかしら？」

「ドードー、そんなに怒るな。俺だつてこんな真似したくはない……が、友人の頼みは断れない」

俺は理子めがけて小箱を投げた。一瞬呆気にとられた理子はハツとなつてこちらに飛んできた小箱を慌ててキャッチする。理子は小箱を開けて中身を確認した。中身は真正正銘、理子の大事な青い十字架のロザリオだ。

「よかつた……帰つて来た、私の大切な、お母様の大切なロザリオが帰つて来た……!!」
理子は嬉しそうにロザリオを胸に抑えるように抱きしめてからロザリオを身に着けた。そして可愛らしい表情が失せ、悪魔の様な表情へと変わる。完全に俺達を殺す気満々という表情だ。

「紆余曲折あつたがこれで遠山キンジとオルメスを倒せる……それから私のプライドを散々傷つけた邪魔者も殺せる……!」

「ようやく本性現したか、でもまあ……けじめつけさせてもらうな」

その直後、理子の背後でバチバチと小さな雷鳴が響いた。小悪魔的な笑みの表情が一

変、苦痛な表情を見せた理子は前のめりになって倒れた。俺はジト目で彼女の背後にいる人物を睨んでやつと来たかと苦笑いする。

「来るの遅すぎじゃないですかねえ……小夜鳴先生？」

彼女の背後に立っていた小夜鳴はにこりと笑って手に持っていた大型のスタンガンを捨てて懐からクロージル・モデル74を取り出して理子の後頭部に銃口を向けた。どうしてこの場に小夜鳴がいて何故理子に攻撃をしたのか、キンジとアリアは驚いていた。小夜鳴はやれやれと呆れながら理子を見下す。

「まさか……ここまで愚鈍であったとは、つくづく失望させてくれますねえ、リュパン4世」
「うる……さい……その名で、呼ぶな……！」

苦痛に震えるからだで睨む理子に小夜鳴は容赦なく彼女の頭を踏みにしつていく。あいつの目は完全にサディストな眼差しだ。いたぶるのがお好きなようで

「つくづく愚かで無能ですなえ、凡人に出し抜かれその上私を誘き出す餌として利用されていることすら気付かなかったなんてねえ！」

小夜鳴は理子を嘲笑いながら何度も踏みにしり、横腹を蹴つていく。

「4世、人間は遺伝子で決まる。優秀な遺伝子を持たないお前がいくら努力をしようが所詮はこの程度だ！」

「や、やめなさい！理子を虐めて何になるのよ！」

耐えに耐えきれずアリアが怒ってガバメントを引き抜いて撃とうとした。威嚇射撃だろうが俺はアリアを止める。

「なっ……!? なんのつもり!? もしかしてあんたもグルなの……!?」

「んなわけねえだろ。俺だつて早くぶん殴つてやりたいさ……でもまだだ、まだ耐えろ」
今すぐに助けたい気持ちにはわかる。でもそれでは意味がない、奴の化けの皮が? がれのとあいつがちゃんとけじめをつけるまでは動いてはいけない。

「いい加減化けの皮を剥がしたらどうだ、ブラド? それとも女の子虐めないと気がすまない小物なのか?」

俺の発言にアリアとキンジが目を丸くして驚き、小夜鳴は理子を蹴るのをやめてこちらをジロリと睨んできた。小夜鳴、いやブラドの野郎も相当俺にキレてるみたいだな。

「の、ノブツナ、小夜鳴がブラドつてそんなでたらめな話……」

「ブラドの野郎は絶滅寸前の吸血鬼だ。吸血する相手の遺伝子を取り組んで生き延びてるようだな、ブラドは人間の血を吸って今は小夜鳴という人間に成りすまして潜んでい。最初からお前らの泥棒ごっこを一部始終見てたつてわけだよ」

「ブラド。ルーマニア、吸血……そういう事だったのね。なんですぐに気がつかなかったのかしら、イ・ウーのNo2はドラキュラ伯爵だったなんて」

俺の簡略した説明にキンジは戸惑っていたがアリアは納得してくれた。流石は

シャーロックホームズの曾孫娘つてところだ。小夜鳴の方は俺を殺さんと言わんばかりに睨み付けている……心なしか獣の様に鼻息が荒くなつてちよつと体格がでかくなつてません？

「どうして私がブラドだと分かった……？」

落ち着いた口調が一変、野太い声へと変わっている。スヴェンが言っていた本性現す兆候つてやつか、ならもう少し気を逆撫でてやつか。

「お前を捕まえたい奴がいてな、協力したまでだ。ところでどんな気分だった？ 下等と見下していた人間に、目の前でお前の宝がどんどん奪われていく様は。お前も凡愚と見下していた人間に出し抜かれたボンコツじゃねえのか？」

ねえどんな気持ち？ ねえどんな気持ち？ 挑発し続けていくと、先ほどまで理子をいたぶつて嘲笑っていた小夜鳴がギンギンと獣の様な牙を見せて歯軋りしてギロリと睨んできた。眼光がもう獣そのもの、それから一段と体格が大きくなっていく。うん、やっぱり気のせいじゃなかった。

「だまれ……！」

「それで理子をいたぶるつて……お前、それ八つ当たりつてやつだけ？ イ・ウーのNO2がこんな小物だとはおかしくてたまらねえや、なあ吸血鬼（笑）」

「だまれ!!」

小夜鳴が大声で叫んだ。もう小夜鳴の声じゃない、獣が咆哮するかのような化け物の声だ。もう少し挑発してやりたいがアリアが焦って俺を止める。小夜鳴、いやブラドの奴が怒り任せに理子をついやつちやうしれないからな。

「いちいち気に障る野郎だ！そんなにオレに殺されてえのなら、喜んで成つてやるよ!!」
そう叫ぶと小夜鳴が変貌した。洒落たスーツが紙のように破れ、黒く剛毛のついた獣の肉体へと変わり巨軀な化け物へと変貌した。目の前で姿が変わったことに俺達は驚きを隠せなかった。そんな姿を見た小夜鳴：もうブラドか、ブラドは汚い笑い声を飛ばして嘲笑う。

「ガハハハ：：よう、オレがブラドだ。どうだ？初めて見る吸血鬼に足がすくんだか？」
「めつちやゴリラじゃんお前!!」

はつきり言わせてもらおう、全然吸血鬼じゃない。顔が狼で体格がゴリラって：：吸血鬼の風貌は何処へやったんだよ!？俺の発言にブラドは青筋を浮かべ、キンジとアリアはずっこけそうになった。

「お前それ言う事か!？」

「いやだつてあれゴリラじゃん！筋肉の塊じゃん！吸血鬼つぼくねえし！遺伝子組み換えすぎだバカ野郎このやろう！」

「思ったとしても言わないの！私も吸血鬼がどんなのかと期待したらなんか脳筋だ

なーってがっかりしたけど！」

「アリア!？」

まさかアリアまで言うとは思ってなかったようでキンジは慌ててアリアにツツコミを入れた。たぶんキンジも思ってたんだろうなあ。出鼻をくじかれてブラドさんはかなり機嫌が悪い模様。

「お前ら……目の前でトマトを潰したらどうなるか見てみたいのか……?」

ギロリと睨んだブラドは大きな獣の手で理子の頭を鷲掴みにして持ち上げた。あのでかさと筋肉だから間違いないく強く握られれば理子の頭はトマトのように潰される……

「4世は知らなかったみてえだな、俺が人間になれるってことを」

「ブ……ラド……! 騙した……なあ……! お、オルメスの末裔を倒せば……解放……! してくれるって……約束したのに……!」

怒りと悔しきで睨む理子をブラドはニヤリと嘲笑う。

「お前、犬とした約束を守るのか?」

そしてブラドは薄汚さそうな獣の笑い声を放った。ゲババババて、耳障りな笑い方をしやがるな……

「無能なお前は所詮優良種を産むための種馬がお似合いだ! お前はオレから一生逃げら

れない！何処へ行こうとも何処へ逃げようとも、お前の居場所はあの檻の中なんだよお！！」

ゲババババとまた獣の声で理子を嘲笑う。振り回される理子は言い返す力さえなく強がることすらできなかつた。キンジもアリアもブラドに怒りを燃やしている、今すぐに拳銃を引き抜いて撃ちたくてたまらないようだ……だがまだだ、ブラドの化けの皮は？がれた。後はアイツのけじめだけだ。

俺達の視線に理子は泣き顔を見せまいときつく目を閉じるが、それでも彼女の頬には大粒の涙が流れていた。

「あ、アリア……キンジ……の、ノブツナ……」

本当はライバルであつたであろうアリアとそのパートナーのキンジ、そして今すぐぶん殴りたかつたであろう俺にに向けて声を振り絞る。

「……た、す、け、て……」

「言うのが遅い！！」

理子の本当の声に待っていたかのようにキンジとアリアが拳銃を引き抜く。その間に俺は無線を取り出す。

「お許しがでたぞ……遠慮なくやれ」

アリアとキンジがブラドに向けて撃つよりも速く、ブラドの背後からスヴェンが飛び掛かり携えている刀を引き抜いて理子を鷲掴みしている方の腕を斬り落とした。

「……っ!？」

腕を斬られブラドは苦痛に顔をゆがめる。解放され落ちる理子をスヴェンが抱き留めアリア達の方へと下がる。その間に俺はM727に装着しているグレネードランチャーM203の引き金を引く。放たれた弾はブラドの体へと当たり爆発を起こした。

「ちよ、あんた達やりすぎじゃないの!？」

ブラドの腕を斬り、グレネードランチャーをぶつけたことにアリアはギョツとしていた。確かに武偵としてはやりすぎだが問題はない、スヴェンは首を横に振った。

「心配すんな、弱点を攻撃しない限り奴は死なん」

「そうだぜアリア、相手は人間じゃない。理子、動けるか?」

「……遅すぎだっつうの……バカが……」

キンジに支えられよろよろと立ち上がる理子は俺になんども足蹴してきた。これなら問題はなさそうだな。そんであっちも問題はないようだ、体に大穴を開け片腕を斬り落とされたブラドは苦痛に歪みながらもこちらを睨んでいる。そして体の大穴が赤い煙を立ち上らせながら塞がり、腕は問題がなかったように接合された。

「よう、久しぶりだなブラド。随分と落ちぶれたな、お前」

「そうか、バチカンの協力者は貴様だったのかスヴェン……だから奴がオレの正体に気付いていたわけか。この汚れた血めが、一族の恥さらしめが!!」

「汚れた血……? どういう事……?」

「理子、スヴェンは吸血鬼と人間のハーフ、ダンピールだ。ダンピールは吸血鬼の臭いが分かっててな、ブラドが小夜鳴に成りすましてるのをいち早く気づいていた」

そういう事だったのかとアリアと理子は納得してくれたようだ。キングはまだ分かってないみたいだが。おらあ、早くいちやついて本気になれよバカ。

一方のスヴェンはブラドの罵詈雑言になんの怒りも感じていないようで、寧ろ呆れていた。

「俺の母は人間と共存する道を選んだ。お前達はどうだ? 人間を下等と見なしていたお前らは今風前の灯火の存在となってる。生きるために優秀な遺伝子に拘り必死にかき集めているお前の方が随分と無様だと思うがなあ」

「黙れ!! 今ここで貴様らを殺せば、オレが正しいとあのクソアマを嘲笑うことができる!」

「母は人間に恋をし人間を愛した。俺を嘲笑うのはいいさ、母を侮辱するのなら俺はてめえを許さん……!!」

スヴェンは一気にブラドへと迫り斬りかかっていく。ブラドに向けて振り下ろされ

た刃はブラドの片手に食い込む。ブラドは片方の拳でスヴェンへと殴りかかろうとした。

「させつかよ、ゴリラ野郎が!!」

俺はすかさずM727を掃射していく。ブラドは体に被弾しつつも片腕で防ぎ、剛腕を振るってスヴェンを下げさせる。

「そんな豆鉄砲、オレに効くかよ!!」

「そんなもん百も承知だ!!だから手始めにてめえをいたぶるんだよ!!ジーク!!」

俺の合図にアリア達の背後の物陰からジークが飛び出してブラドめがけて突っ走る。ブラドが爪で引き裂こうと腕を振り下ろす、その前に俺はホルスターからS&WM500を引き抜いて一発撃った。反動は大きい放たれた弾丸はブラドの片腕に穴をあける。

「デッドリイイイレイブ!!」

ジークはブラドの体に何度も何度も殴る蹴ると乱舞を撃ち込んでいく。

「HAAッ!!」

最後に気合いで撃ちこんだ両手の掌底から気の衝撃波が放たれブラドはぶっ飛ばされた。予定通り、決められたポイントに飛ばされたな。俺は無線機を取り出して無線を繋ぐ。

「鳩、ゴリラがポイントについた」

『りようかーい！では、爆破っ!!』

無線機からカチカチとスイッチが押される音がしたと同時にブラドがぶっ飛ばされた場所で爆発が起きた。鳩曰く、ミョウジヨウ学園で爆弾作ってた生徒を真似て作った爆弾だとか。というかどんな爆弾作ってたってどういふ学園なんだよ。

見事な爆発にアリア達は啞然としていた。我に返ったアリアと理子が俺に足蹴していく。

「ちよ、ちよっと!?やりすぎでしょこれ!？」

「そ、そうだよ!?確かにブラドさまあつて思うけどさあ!？」

「大丈夫、死なない程度にしてっから」

「いや絶対あれ死ぬでしょ!？」

あの爆発でも火力は控えて目にしてるんだぞ?ブラドを殺さない程度に痛めつける、これが俺達の目的だ。案の定、立ち上る煙の中でブラドのシルエツトが見えた。肉体をぶっ飛ばされても魔蔵を潰さない限り再生をするか……厄介な相手だ。

「俺達でブラドを弱らせる。キンジ、アリア、理子、倒して逮捕するのはお前らの役目だ。

理子、あいつの倒し方はちゃんとわかってるな?」

「え……う、うん……」

戸惑い、自信なきそうに俯く理子にデコピンをしてやる。

「心配すんな、今のお前にはキンジとアリアがいる。自由に慣れるチャンスだ……キンジ、後は任せませ」

俺は肉体が再生され襲い掛かってくるブラドと対峙しているスヴェンとジークの援護をすべく駆けつけて行った。

「理子、理子は理子なんだ。お前は数字なんかじゃない。過去に怯えちゃダメだ、過去を塗り替えるんだ！」

「キーくん……」

「ノブツナも言ってたろ、俺がいる。理子、俺達であいつを倒すぞ……」

「キーくん……い！」

理子は強くキンジを抱きしめた。その様にアリアはムスツとしたがふんと照れ隠してそっぽを向く。

「……今回だけ、今回だけよ！キンジを貸すのはね！さっさとブラドを倒してアンタとの決着をつけるんだから！」

26話 ブラドとの戦い、嵐の前の静けさ

ブラドの傷の回復は思ったより速い。刀剣による切り傷も弾丸による銃創や風穴も見る見るうちに傷が塞がれていく。

「ゲババババ！何度やっても無駄だぞガキ共!!」

「んなもん知ってるつってんだろ！」

ブラドは傷一つすらつけることができていない俺達を嘲笑う。弱点である魔蔵を潰さない限りこいつは倒れない、そんな事は知ってる。というよりもそれが目的で攻撃をしてるわけではない。

「スヴェン！腹の辺りかっ捌けるか？」

「容易い！」

俺の合図にスヴェンがブラドの真正面へと駆けていく。無駄な事をとブラドはほくそ笑んで爪で斬り裂こうと腕を振るう。

「ジャエーケンっ!!」

ブラドの爪がスヴェンに当たる寸前、ジークの気を込めた肘打ちの突進により腕を弾き受け流した。スヴェンは勢いを止めずブラドの腹部を狙って十字に切り刻んだ。ブ

ラドは一瞬の苦痛に顔を歪めるがこの程度の傷もすぐに修復される、無駄の事の繰り返しだと嘲笑おうとした。

しかしスヴェンの後ろからノブツナが続いていた。ノブツナはポーチからM67破片手榴弾のピンを引き抜いて傷が修復されている最中のブラドの傷口めがけてM67手榴弾をぶち込めた。ノブツナとスヴェンは一気に後ろに下がったその直後、ブラドの体の半分が爆発で吹っ飛んだ。

あちこちに肉片を散らし、右半分の方が消し飛んでいてもブラドは健在でノブツナ達を絶対に殺すと言わんばかりに唸り睨む。

「これでも元氣ピンピンとか：しばらくゴア表現のあるクソ映画を見ないで済むな」

「なぬう!?キノコ人間は別の意味で面白いだろ！ワスカバジだぞー！」

「次はどうするんだノブツナ！回復させる暇を与えない方がいいぞー！」

散らばっていた肉片が血の煙を出しながら消えていき、みるみると筋肉と骨が修復され傷と怪我が治っていていた。スヴェンの言う通りだとノブツナはキノコ人間を語りだすジークを無視して無線機を繋げた。

「鳩、次の爆発だ」

『ラジャーッス！巻き込まれないように注意してくださいねー！』

鳩が楽し気に応え、再びカチカチとスイッチが押される音が聞こえた。その直後にブ

ラドの背後にあった工事中のビルから爆発が起きた。すぐ下の辺りで連続した爆発が起きていたようでぐらりと工事中だったビルがブラドめがけて倒れていった。こちらめがけて倒れてきたビルに気付いたブラドであったが傷の修復の最中だったため動けず、ビルに叩き付けられ瓦礫に埋もれてしまった。鳩は爆弾を仕掛けていたと事前に言っただけだがここまで派手にやるとはとスヴェンは呆気にとられ、ジークはガッツポーズをとっていた。

「やったか!!」

「いややってねーって」

「こんなのでくたばったら本当に落ちぶれたとしか言いようがねえよ」

ジークは喜んでいたがノブツナとスヴェンはいつでも迎撃態勢であった。二人の予想通り、瓦礫が蠢くとブラドが吠えながら勢いよく飛び出して来た。もはや吸血鬼というよりもこれではまるで狼男だ。

「いくらやっても無駄だと言っておろうが!! 小賢しい真似をしおつry」

「うっさい」

ブラドが言い切る前にノブツナはTH3焼夷手榴弾を3つピンを抜いて投げ込んだ。放り投げだされたTH3焼夷手榴弾はすぐさま爆炎を発生し、ブラドの体を業火で焼き包んだ。

「グウオオオオオッ!？」

炎に包まれたブラドは火だるまになって体をよじらせ悶えだす。その間にノブツナはM727を立ち続けに撃ち込んでいく。

「いやいやいやいや!?! あんた達やり過ぎでしょ!？」

漸く準備が済んだようでありア達がノブツナ達の下へ駆けつけるとアリアはギョツとしてノブツナにツツコミをいれようとした。爆発で倒れたビルを叩き付け、出てきたところを焼夷手榴弾で焼き尽くす、ハチャメチャな戦い方に流石の理子も引いていた。「十分すぎるだろ。相手は吸血鬼、幾十年も人間の血を吸い剩え理子を奴隷にしてたんだ。ツケを払うにはまだまだ少ない方だ」

「そうだぞー!りこりんを痛めつけて……りこりんファンクラブ会長の俺が絶対に許さん!」

「いやジーク、あんた白雪ファンクラブの会長じゃなかったのよ」

そんなやり取りをしている間にブラドが喧しい程の咆哮をあげた。身を焦がした炎は方向の勢いで消し飛び、全身の火傷が血の煙をあげながら修復されていった。だが傷の回復はできて受けた痛みまでは消えなかったようで歪んだ顔のままノブツナ達を睨み付けていた。

「ハア……ハア……図に乗るなよクソガキ共がああ!!」

ブラドは叫ぶと瓦礫の中へと片手を突っ込み何やら手探りで何かを探し出した。そして勢いよく手を戻すと4mほどの長さの鉄骨を握っていた。金棒のように持ち迫ってきた。流石にあの鉄骨を馬鹿みたいな怪力で振り回されたらまずい、ようやく本腰を入れてきたかとノブツナはキンジの方へ視線を向ける。

「キンジ！俺達でブラドの注意を逸らして弱らす、その隙にお前らは魔蔵を狙い撃て！」
「分かっているさ、だが見る限り3か所しか見えてないが……」

ブラドの弱点である魔蔵は4か所存在し、同時にその魔蔵を潰さない限りブラドは倒せない。一か所でも仕留め損ねたらほんの数秒で3つの魔蔵を修復させ振り出しに戻される。

今視覚で分かるとすれば右肩、左肩、右の脇腹の目玉の様な模様が付いた箇所。4つ目の魔蔵の箇所が分かっている。ブラドの何処かの箇所に4つ目の魔蔵が隠されているはずだ。すると理子がびよこんとキンジとノブツナの間割って入って来た。

「視線でバレないようにするためにあえて言わないけど……理子は4つ目の箇所を知っている、アイツとずっと暮らしてたから……」

「……分かった、それじゃ頼んだ。チャンスは俺達で作る、弾の無駄使いはすんなよ？特にアリア」

「わ、分かっているわよ！ちゃんと狙い撃ってやるんだから！」

「ノブツナ、無理すんなよ……?」

ノブツナはニツと笑ってブラドと応戦しているスヴェンとジークに加勢しに駆けていった。

「まずは汚れた血! 貴様から叩きのめしてやる!!」

ブラドは怒り任せに鉄骨をスヴェンめがけて叩き付けていった。スヴェンは刀で受け止めるが相手の怪力による打撃に腕に振動と鈍い痛みが響く。

「つーこれだから脳筋はむかつくんだ!!」

スヴェンは力を込めて鉄骨を弾かせる。だがその刹那、正面からブラドの拳が迫った。隙をつかれたスヴェンは目を見開く、直撃するかと思いきやノブツナが刀を抜いて受け止めた。

「ノブツナ! 助かった、流石は俺のライバル!」

「———つーめっちゃ痛てえ!?! 受け止めても痛いとかどんだけ怪力なんだよこの脳筋ゴリラは!?!」

スヴェンの嬉しい一言を無視してノブツナは痛そうに怒鳴っていた。その隙にブラドは思い切り鉄骨を横へと薙ぐ。二人で防ぎ受け止めるが、それでもブラドの力が強く力任せに吹っ飛ばされた。さらに追い打ちをかけようと二人へと迫っていく。

「つってえなあ!」

ノブツナは起き上がってM727を撃つていくが弾丸を両腕で防ぎながら迫っている。その刹那、ノブツナの背後から火の付いた酒瓶が弧を描くようにブラドめがけて飛んできた。酒瓶はブラドの顔面に当たると轟々と燃えだした。

「ふう……ちよつと焦った。サンキュー、鳩」

ノブツナが後ろを振り向くとモロトフカクテル片手に可愛げにウィンクする鳩の姿があった。鳩はもう一本モロトフカクテルをブラドに投げ込んでノブツナに歩み寄った。

「ノブちゃん、ちよつと時間が押してきてるツス」

気づけば遠くで雷が鳴っており、雲行きが怪しい。いつすぐ近くで雷が響いてもおかしくはない、鳩の言う通り時間が徐々に押してきている。

「キンジ達もいつでも撃てるようだし……一気に短期決戦で終わらす」

十分に痛めつけられた、後はもう仕留めるだけ。ノブツナはS&WM500をホルスターから引き抜きロードする。

「ジーク、強い一撃をぶち込め。俺とスヴェンであいつを足を止める、鳩は援護を」

「OKっす！」

「ふつ、俺の足を引つ張んなよライバル！」

「任せておけ！」

「……せめて返事を統一してくれ」

ノブツナの呟きは虚しくスルーされ、ジークがいの一歩にブラドへと迫った。顔に焼き付く炎ををかき消し修復をし終えたブラドは正面から迫るジークを嘲笑う。

「わざわざ潰されに来たか、虫めが!!」

「白雪ちゃんファンクラブ会長兼りこりんファンクラブ会長の怒りの鉄拳を舐めるなよ!!」

思い切り叩き付けようと振り下ろされた鉄骨を躲し、ジークはブラドの懐まで一気に迫った。

「フドオオオオケンツ!!」

ブラドの鳩尾にめがけて愛と怒りと力と気を込めた両手の掌底を叩き込んだ。強力な一撃を撃ち込まれたブラドはカハツと乾いた悲鳴を上げてよろめいた。回復させる暇を与えさせまいとノブツナとスヴェンが駆ける。ブラドは態勢を建て直そうとするが顔面にカラーボールが当たり、視界を遮られ鼻に悪臭がまとわりついた。

「うちの特性カラーボールス、獣のお前にとってはちよー臭いだろうなあー!」

カラーボールを投げつけた鳩はギザギザの歯を見せてゲスな笑みを浮かべる。獣の姿となっているブラドは視覚も嗅覚も人よりも優れている、だがそれが仇となり人よりも倍の悪臭はブラドを苦しめた。

ブラドが悶えている隙にスヴェンはブラドの左脚の脛に峰打ちで思い切り叩き込み、ノブツナは右脚を狙ってS & W M 500で撃ち込んだ。両足を損傷したブラドはガクリと膝をついた。

「今だ！ぶちかませ!!」

ノブツナの合図でキンジ達はブラドの魔蔵に狙め、引き金を引いた。だが最悪のタイミングかいたずらか、引き金を引いたと同時に稲光が起き、雷が轟いた。アリアは雷が苦手だったようでその刹那彼女は驚いて銃口が逸れた。2丁のガバメントのうち1丁はブラドの右肩に当たる、しかしもう一発の弾丸は逸れてしまう。

アリアは雷が苦手だったことを既に知っており、彼女の撃った弾丸が逸れてしまう事に気づいたキンジはすかさずその弾丸を狙って撃った。キンジの撃った銃弾はアリアの撃った弾を掠め、彼女の弾丸の軌道を修正させた。

修正はできたが焦りを募らせた。同時に4つ魔蔵を狙い撃たなければならぬ。今の一発で4つ目は当たらない、このままでは仕留めることができない。

「———今だ、奴の舌を狙え」

キンジ達を見ていたノブツナは無線機を繋げていた。理子とアリアが撃った銃弾はブラドの左肩、右肩、右脇腹の目玉の模様へと撃ち込まれたその直後、何処からか飛んできた銃弾がブラドの分厚い目玉の模様がついた舌を射抜いた。

「ウグウ!?ウヴウウオオツ!」

射抜かれたその直後にブラドは苦悶の表情を浮かんで叫び、体中から血を噴かせ悶えたのちに大きな音をたてて倒れた。

一体何が起きたのかとキンジ達はポカンとしていたがノブツナは満足そうに4つ目の弾丸が飛んできた方向に顔を向けて満足げな笑みを見せて無線機を繋いだ。

「ビューティフォー、上出来だぜレキ」

『私は一発の銃弾、貴方の銃弾。必ず仕留めます……』

4つ目の銃弾を撃つたのはレキだった。最初から離れた場所で待機しており、4つ目の魔蔵の場所が分かるまでずっと狙いを定めていたのだった。ノブツナが撃っていた銃弾をブラドは頑なに顔だけは撃たれまいとガードをし、焼夷手榴弾や火炎瓶を顔に受けた時は只管顔を優先的に炎を消そうとしたため、4つ目の魔蔵が顔の何処か、或いは内にあると気付いた。

武器を取めた頃には遠くからパトカーのサイレンとヘリの音が聞こえこちらに近づいているようだ。ようやく吸血鬼を倒せたとノブツナは安堵した。

やっとひと段落ついたと学園島の公園のベンチでリーフパイを食べながらため息を漏らす。吸血鬼、ブラドの逮捕の手柄はアリアに譲った。スヴェンがバチカンへと連行

しようとしていたところをアリアが『こいつはママの裁判の為の重要参考人!!』と怒鳴り散らして譲ろうとしなかったので面倒なので其方を優先させた。お前の母ちゃん、イ・ウーと何か関係あんのかよと思ったが変に突っかかるのはやめた。面倒事はもうこりこりだ。

「また授業をサボってるのか、お前は?」

そこへスヴェエンが呆れながらやってきた。よし、セロリは持ってないな……? スヴェエンはそのまま俺の隣にどかりと腰をかける。

「良かったのか? あのツイインテピンクロリにブラドを譲っちまって?」

「いいさ、バチカンに連れてこられるよりかは大分マシだ。俺の先輩のシスター・メーヤさん、容赦なく首ちよんばするだろうし」

首ちよんばって……バチカンのシスターは怖いなおい。そうだとすれば日本に収容されるのは大分マシだと思えてきた。

「久々にお前と組めて楽しかったぜ、ライバル」

「次来るときはセロリ持ってくんじゃねえぞ」

正直言つて久々にスヴェエンと組んでドンパチやったのは楽しかった。セロリを持ち込んでなければの話だし『レキの方がもつと楽しいがな!』だがもうバチカンに帰るのは少し寂しいな、せめてもつとゆっくりしていけばいいのに。

「……まだ帰らんぞ?」

「む?何かやる事があんのか?」

「ああ、大使館に行つて報告した後、公安0課に言伝をしに行く」

公安0課?確か警視庁公安部にある職務上殺人を容認している『殺しのライセンス』を唯一持つ公務員達のことだ。全員化け物と言わんばかりの強さを持つてるし、一度無理矢理と言わんばかりのヘッドハンティングをくらつたことがある。チュドつて逃げたけど。そんな公安0課に何か用事でもあるのだろうか……

「言伝つて何を言うんだ?」

「ああ……『アーカムが動いた。奴等は日本に来る』つてな」

「アーカム……?」

アーカム?聞いたことがないな……まさかそいつもイ・ウー関連じゃないだろうか?

「スヴェン、そのアーカムってなんだ?」

「……ノブツナ、悪い事は言わん。もし武偵を続けたいのなら、アーカムには関わるな」
いつもふざけているスヴェンがここまで真剣な表情で言ってくるとは思ひもしなかった。スヴェンの形相に俺はたじろいでしまった。

「そ、そんなにヤバイ奴なのか……?」

「ハツキリ言つてイ・ウーがごっこ遊びなら、アーカムはガチだ。アーカムは中東、アフ

リカの裏社会を牛耳り、各地でテロや破壊活動をして暗躍している」

テロや破壊活動で……そんな派手なことをして何故公に明かされない？ 俺の疑問にスヴェンはポンと肩を叩いて立ち上がる。

「ノブツナ、世の中には諸事情で公に明かされない事件や戦いが起きている。アーカムはそういった戦いをする、『N』と並ぶヤバイ連中だ」

今度は『N』とか知らんワードまで出てきた……そんなヤバイ連中が日本に来るって……

「何でそいつらは何で日本に来るんだ」

「考えるとすれば恐らく、緋緋色かウルス……いや、これ以上話すとお前が首突っ込む」

緋緋色？そしてスヴェンも『ウルス』と口にした。もしかしてスヴェンなら『ウルス』の何か知っているんじゃないのか？

「なんだよ、ブラドを手伝えって言ったくせにそいつは手伝えって言わねえのか。俺でも力になるぞ」

「……願わくばそんな事がねえといいがな。じゃあな」

俺に関わってほしくないようで、スヴェンは軽くあしらって去ろうとした。が、ピタリと止まってジロリと俺の方へ顔を向けた。

「……もし、アーカムやN……世界に喧嘩売れる覚悟があんのなら、力を貸してくれ」

そのままそっぽを向いてスヴェンは手を振って去っていった。世界に喧嘩を売る……あいつはそんなにヤバい連中と戦うつもりなのか。あいつ一人だけ戦わせるわけにはいかない、俺も何かできないのか。

悩んでいると携帯が鳴った。こんな時に電話を掛けてきたのは誰かと確認したら、電話の主は鳩だった。

場所を移動して今度は人工浮島の南端の廃ビルの屋上へと向かった。ドアを開けると風が少し強く吹いており、屋上には鳩がメロンパンを食べながら待っていた。

「ノブちゃん、遅いっすよ。待ちきれなくてノブちゃんの分も食べちゃったっすよ」

「いらねえよメロンパン……」

こんな事の為に呼んだわけじゃないだろうに。肩を竦めて呆れていると、鳩は察したのかいそいそとメロンパンを食べて完食させた。

「……さて、ノブちゃん。うちとの約束覚えてる?」

「忘れた」

「ひどすっ!?!」

ジョークだジョーク、そのしよげたアホ毛をどうにかしろ。鳩との約束は覚えている。ブラドの一件を手伝ったら鳩が俺の知りたいたい事を教えてくれる、という約束だ。

「つっても知りたい事ねえ……思いつかないがな」

「またまたー、とぼけちゃつてー………ノブちゃんはレキレキの秘密とウルスの事を知りたいんでしょ？」

鳩はふざけた表情から一変して企みを込めた笑みを見せた。凶星はできない、本当はレキの事やウルスの事を知りたい。だがもしレキの秘密を知ってしまったら俺はレキにどう表情を見せたらいいのだろうか、今だに迷いがあった。

「ノブちゃん……避ける事はできないっすよ、もう片足突っ込んでるんだから。レキレキをずっと傍にいさせたいのなら、知っておくべきっす」

「……鳩、教えてくれ。ウルスってなんだ、ウルスの姫ってなんだ？」

もう引き返すことはできない。スヴェンもウルスの事を知っていて、鳩もウルスの事を知っている。俺だけ知らないという訳にはもうできないのだ。

「そうっすね……まずはウルスから。ウルスってのはロシアとモンゴルの場所に隠れ住んでいる少数民族。ウルスは弓や長銃に長けた部族であり、レキレキはその出身っす」

本当に存在していたとは。レキが時々言っていたので中二病的なものかと思っていたが彼女が本当にウルスの民とかの存在だとは思ひもしなかった。

「レキはウルスの姫と言っていたが……」

「どっかにいるとは思ってたけどうちもレキレキがウルスの姫だったとは知らなかったス。これはびびくりしたけど……ウルスの姫の役目は知ってるっすよ」

役目……？レキに何か役目か何かあったのか？

「まあ簡単な役目ツス。ウルスの姫は『ある物』の為に共にあらなければならなかった。それは心を無にする必要があつたツス。いわば無感情、無表情つてこと、そうじゃないと『声』を聴くことができないと」

声……？まさかレキが言っていた『風』というやつなのか？そんな物の為にレキは無表情になっていたというのか……なんだろうか、考えるだけでなぜかムカツときた

「鳩、その『ある物』つてのは知ってるのか？」

「モチの論……でもノブちゃん、それを知ったらノブちゃんは世界に喧嘩を売る事になるけど、覚悟はできてるっす？」

世界に喧嘩を売る……スヴェンも言っていた。それはそんなにヤバイのか？もし知ったらレキはどうなる……何故かどこかで心の迷いが生じた。迷いに気づいたのか鳩はヤレヤレと肩を竦めた。

「ま、腐れ縁のよしみで特別サービスで教えるっす。レキ、これは漢字で『蕾』と『姫』と書いてモンゴルじゃ超有名な人の直系の姫の名前で、そしてウルスの民は彼女を奉り『ある物』と姫の為守り戦ってるっす。そんでそのある物つてのが……璃ry」

鳩が告げようとしたその時、俺の背後からハイマキが鳩めがけて牙を剥いて飛び掛かって来た。鳩は慌てて避けて距離をとる。ハイマキは唸り声をあげ、牙を剥いて殺意を込めて鳩を睨んでいた。いきなりのことで俺は驚いていたが鳩はヤレヤレと肩竦めて苦笑いをした。

「ノブちゃんごめん……これ以上話すとうちがレキレキに殺されるつす。てなわけで後は自分でググってくださいねーっ！」

鳩はウインクして懐から煙玉を取り出して俺とハイマキの足下に投げつけた。パフンと白い煙が噴き上がり視界を遮った。風が吹いてやつと視界が鮮明になった頃には鳩の姿は無かった。

レキが鳩を殺す勢いとか……よっぽど知られたくないことでもあるのだろうか。あの程度の事は知れたが、まだまだ知らない事が多い。どうやって調べるか……立ち尽して考えていたらハイマキがワン！と吠えてきた。分かったって、今は調べないから吠えるなって

「ノブツナさん、大丈夫ですか……？」

気が付けば俺の後ろにレキがいた。ハイマキがいたという事はレキもいるだろうと考えていたがこんな近くにいたとは……レキはドラグノフのスコープを覗きながら辺

りを見回す。

「鳩さんはもうこの辺りにはいませんね……次、ノブツナさんに近づこうとするのなら今度こそ仕留めます」

ちよ、レキ、怖いよ!? 本当に殺す気満々じゃねえか!? ギョツとしている俺にレキは歩み寄つて来た。

「けがはないですか?」

「あ、ああ……大丈夫、です」

「私は貴方のモノ、貴方の武器であり銃弾。私は貴方に害するものには守る為に容赦なく戦います」

レキさん? それを世の中ではヤンデレっていうんですよ? お願いだから物騒な事は言わないで……と言おうとしたら、レキがポンと俺の胸へと寄りかかって来た。

「……ノブツナさん、私の事を知ろうとしていましたか?」

「つーあー……ナンノコトカナー」

今はレキに本当の事を話してもらおうとは思えなかった。もし知ってしまつたら……俺はどうなるんだ。俺にそんな覚悟があるのか……心の中では迷いがぐるぐると渦巻く

「ノブツナさん、約束してください……私を、本当の私を知ろうとしないでください」

レキは俺の顔を見上げて告げた。無表情で無感情と言われた彼女の琥珀色の瞳が揺らいでいた。これは不安だ、不安と何か怯えているような表情をしていた。心がないなんて嘘だ……彼女には今、感情があつた。

「今……今の私は貴方を失いたくありません」

レキが静かに懇願してきた。だが今後、俺は本当の彼女の事を知らなければいけないはずだ。知るべきなのか、知らない方がいいのか……迷いは止まることがなかった。

「……もし知ろうとしたらどうなる」

『風』が告げてきました……貴方が本当の私を知ろうとするのなら……貴方は死ぬと」

また死ぬて……風さん、相当俺を殺したいらしいな

7月クライシス

27話 予兆

「はあ……どうしたもんかなー……」

今日も授業をサボって食堂のテーブルに突つ伏す。ようやく初夏の暑さが近づいた今日この頃、憂鬱気味にこれで数百回目のため息をつく。気分がどうも授業とか任務どころじゃない、色々と悩んでいるせいで何も気乗りがしない。

原因はレキのことだ。レキからは私の事を知らないでくれと無表情ながらも真剣な眼差しで言われたのだから今は無下に調べようとはしていない。彼女の事もあって最近はいつがいている屋上へにも行つてはいない。でも気になるし、知らなければいけないという事は分かっている。

知っているであろう鳩からは電話しても留守電になるし、スヴェンとも連絡が取れない。ジークは……そういえばあいつどこいった？最近会ってないような気がする。

重要そうな情報を手に入れたがそれはほんの一握りで後は自分で調べろと言われても彼女の裏に潜む物がなんだか巨大すぎてどこから手をつければいいのか明け暮れている。本当のレキを知りたい、でも本当の彼女を知って俺はどうすればいいのか迷って

いる。

「はあ……」

今日はよくため息をつく、自己新記録が更新しそうだ。いや、ここでよくよしている場合ではない。本当の事を知らなければいけないんだ。そうと決まれば……どうやって調べてようか。さっそく出だして行き詰った。

鳩という最大の情報源がない今、手っ取り早く情報が得られそうな相手はあるか記憶を辿る。いや確かにいるっちゃいるけどさ、素直に聞いてくれるかどうかが問題か。兎に角当たってみるしかないと立ち上がって情報を持ってそんな奴の所へと向かおうとした。

いや待て、ふと思いついた俺は辺りを見回す。前回、鳩から聞き出そうとしていたところにハイマキが現れ、その後すぐさまレキがやってきた。もしかしたら俺の行動を監視しているんじゃないやねえだろうか……やっぱりもしかしてヤンデレ!?! いやいやいや、レキがヤンデレなわけが無い、はず! どうにかしてレキの監視を避けて行けれないか思考を張り巡らせ、敢て遠回しして向かうことにした。

遠回りに遠回りして、ハイマキが尾行している事を考えて匂いの強い香水を振り撒いて時間をかけて漸くあいつがいるであろう音楽室に辿り着いた。

音楽室に近づくとピアノを弾く音が聞こえてくる。音楽は詳しくはないが結構上手に弾いているな。今日もあいつが弾いているのだろうなと窓を覗く。

音楽室に武偵校のセーラ服を着た銀髪のポニーテールの少女、元イ・ウーのジャンヌ・ダルクがピアノを弾いていた。随分とまあ上手な事。彼女はこの武偵校に転入してからテニス部に入るわ、ピアノの練習するわとアグレッシブで瞬く間に女子の人気者になったとか。理子といいこいつらつて相手を順応させるのは得意だよな……

「よお、騎士様。久しぶり」

さつそく音楽室に入って気さくにジャンヌに声をかけると、ジャンヌはピアノの弾く手を止めて声に気づいてこちらに顔を向けた途端親の敵とでもいたくらしいの凄く嫌そうな顔をしだした。

「貴様……何しに来た」

ずいぶんと嫌ってんなあおい。敵意？き出して、ここが戦場だったら間違ひなく襲い掛かってくる勢いの剣幕で立ち上がる。

「別に嫌がらせしに来たわけじゃあない、少し聞きたい事があつて尋ねてきたまでだ」
「貴様に話すことはない、と言いたいが理子をブラドから救ってくれた件もある。理子に免じて話ぐらいは聞いてやろう……だがその前に」

ジャンヌは俺を睨んでずかずかと歩み寄つてくると思い切り俺の頬をひっぱいた。

パーンと乾いた音が音楽室内に響く。

「私を騙した事と理子のプライドを傷つけたツケだ。これで水に流してやる」

「お、おうふ……」

ビントは結構痛かったがグーパンじゃなくて良かった！取りあえず話は聞いてくれるということで俺はすぐさま音楽室のカーテンを閉め、ドアと窓のカギを全てロックした。これでよし……って、ジャンヌが顔を引きつらせて身構えだした。

「な、何のつもりだ!?!私にナニをするつもりだ!?!」

「ナニもしねえって。こうしないとレキに見つかっちゃう」

「レキが?確かお前とバディを組んでいる奴のことか」

「ああ、目が利く上に鼻も利くからな」

鷹の眼と言わんばかりの彼女の眼でどこへ隠れていようとも見つかってしまう。そんな目が利く彼女にハイマキという鼻も利くセツトがついてからこの上なく厄介になった。付け焼き刃な隠れ方だからここもバレるのも時間の問題、兎に角本題に乗ることにした。

「元イ・ウーのお前なら知っているかもしれねえと思つて尋ねる。ジャンヌ、『ウルス』って知っているか?」

怪盗リユパンとかジャンヌダルクとか吸血鬼とかトンデモ人材が揃うよく分からん

秘密結社だ、恐らくウルスの事も知っているに違いない。それを狙って尋ねてみたらジャンヌはピクリと反応した。よし、アタリだ。

「……なぜお前がウルスの事を知っている」

「あまり他の奴等にも口外すべきじゃないのだが、レキがそのウルスの民でしかもウルスの姫なんだ」

するとジャンヌは驚いて目を見開くと俺の胸倉を掴んで揺らして来た。

「う、ウルスの姫だと……!? 貴様、事の重大さを分かっているのか!」

「分かるも何も知ったのは先週だぞコラ!! どのくらいヤバイのか分かんねえからお前に聞いてるんじゃないか!」

鳩の話から聞いてひとまずヤバイ一件だという事は自覚している。その規模を知りたいから尋ねて来た。ジャンヌはため息を漏らして興奮を沈める。

「……すまない、気付かなかった私も落ち度もある。だが、レキがウルスの姫だとは……いや、十分納得はできるか」

「ウルスの民は狙撃が得意な所とか?」

「……ちよつと聞くが何故知ってる?」

「あー……今は行方知れずでこういった事に詳しい腐れ縁から聞いた」

鳩さんはレキから出禁をくらって音信不通だ。たぶん生きてるだろうけど顔を出し

たらレキに狙い撃たれるだろうなあ……

「あとレキは何かの直系の末裔だとか？」

「ウルスの民はもともと弓と矢でアジアを席卷した蒙古の王、チンギスⅡハン。彼の戦闘技術を濃く受け継いだ末裔の一族なのだ」

……は？チンギスⅡハンってあのチンギスⅡハン!? 衝撃の事実を知ってもう愕然とするしかない。同居しているバデイがスーパー有名人の末裔でしたー、って笑い事じゃねえ。

「マジか……いやマジか!？」

「大マジだ。何故そのウルスの姫が此処にいるかは分かり兼ねるが……私の憶測だが婿を探しに来たのかもしれないな」

「たしか今女性しかいないんだっけか？」

……これも鳩から貰った情報だ。何故女性しかないのかは分からないが。ジャンヌは「なぜお前がそれを知っている」というような疑いの眼差しを向けるが頷いた。

「ウルスは元々閉鎖的な民族だからな、同族の血が濃くなりすぎて異常をきたし女しか産まれなくなったかもしれない……だがそれが原因なのだろう」

「どゆーとっ？」

「今、ウルスは『藍幫』という中国の武装組織と抗争が起きている。『藍幫』の狙いはそ

のウルスの優秀な血、それとウルスの奥に在る物だ」

つまりはブラドと同じように優れた遺伝子を欲しいというわけか。連中のことだから拉致や略奪もやろうとしているのだろうな……ん？ウルスの奥に在る物……？それは後から聞くとしよう

「レキはお前か、力のある者との子を成してウルスを建て直そうとしているのやもしれん」

「そうさな……あいつの行動を考えると心当たりがありまくるな」

これまでの行動と言動を振り返ると、レキは自分の意思で動いていない。どちらかと言えば『誰か』に命令されて動かされているような……そうだ、『風』とか言うクソ野郎だ。

「レキは『風』っていうクソ野郎に言われるがまま、自分の意思で考え動いたことがなかった。だから俺は自分の意思で選ぶよう教えた結果、ヤンデレ寸前なことになっちまったんだが……」

「恐らくレキは迷っているのではないか？『風』とやらが痺れを切らして今すぐにお前を奪えとでも言ったのだらう。だがお前に自分で考えろと教えられたレキはどちらに従えばいいか考え、悩んだ結果そのような行動をしたのだらうな」

確かにレキは俺を失いたくなくとも言って、自分に関われば俺が死ぬとも言った。無

表情、無感情故に誰とも繋がりを持たず孤独だったレキがやっと仲間ができて自分だけの自分の道を歩もうとしているところを『風』がまた孤独の道へと連れ戻そうとしているわけか……

「ジャンヌ、どうやったらレキを『風』のクソ野郎の呪縛からひっぺ剥がすことができる？」

「お前、本気で言っているのか……いや、お前だからだろうな。ノブツナ、一つ方法がある。レキの、ウルスの姫としての役目を奪え」

「奪えて……まさかはじめてを!？」

「バカ」

ジャンヌは呆れて俺に再びビンタをした。顔を赤らめるところお前もウブのよう

で
「ウルスの姫は『声』を聴くために心を無にして育てられたと聞く……『声』を聞こえなくさせるためにレキに感情を芽生えさせればいい」

「感情ねえ……難しくね？」

「難しいが、難しく考えるな。そうだな……レキを笑わせると考えればいい」

笑わせる、か。確かに一度もレキが笑う所は見たことがねえな。『笑えばいいと思うよ?』と言えるシチュエーションを造れば勝ち確だが……レキの場合は難易度が高そう

だ。だがその分きつといい笑顔になってくれるはず。

「いいだろう、やってやろうじゃねえの。散々俺に死ね死ねっていつてる『風』のクソ野郎に仕返しができる」

この作戦を考案してくれたジャンヌに感謝せねば。まず最初のお礼にさつきからジャンヌの足の周りに飛んでいる奴を思い切り蹴とばす。

「む、どうかしたのか？」

「いや気づいていなかったのか？ お前の足の周りにカナブンみたいな虫が纏わりつこうと飛んでたぞ？」

のびている虫をティッシュで何重にも包んでゴミ箱へ放り投げる。なんだろうかこの虫、フンコロガシみたいな見た目をしてんな……新種か？

「だからさつきからちらちら私の足を見ていたのか……」

睨むな睨むな、スカートを抑えて睨むな。見たいとは思うけど今は見ている場合じゃねえって。それはさておき、少し気になっていた事をジャンヌに聞かなくては。

「イ・ウーの場合、そんな情報はどうやって手に入れてんだ？」

「私は聞いたまでだ。イ・ウーのリーダーが一度ウルスを訪れた事があったようだな、あの時はイロカネ絡みの交渉だった……」

「『イロカネ』？」

なんだそのイロカネとか言うのは。こればかりは初めて聞いたな。ジャンヌは『余計な事を言った』というような顔をしだす。

「もしかしてそのイロカネとやらがウルスの奥に在る物とか『声』の正体なのか？」
「い、いやそれは……」

ジャンヌがどもりながら何か喋ろうとしたその時、ドアを激しく叩く音とワンワンと吠える声が聞こえた。

「くそっ！ハイマキの野郎、もう嗅ぎ付けやがったか!!」

こうしちやいられない、このままだとジャンヌまでもがレキの狙撃対象にされちゃう。貴重な情報源を失う訳にはいかない。最後のガラスをぶち破るような勢いで窓ガラスへとぶち破って音楽室から脱出した。

「ジャンヌ・オルタ！貴重な情報サンキューな！今度飯奢ってやつからな！」

「オルタじゃない、普通のジャンヌ・ダルクだ!!」

ハイマキの追跡はなし、レキの狙撃もなし……何とか逃げ切れそうだな。ジャンヌのおかげ他にも情報が手に入りそうな人を見つけた。ウルスは中国の藍幫と抗争……こういつた事情とか、あの人が知ってそうだ。

あとはレキを笑わせる、か……いつちよやってみるか

ドアが開く音とハイマキの呼吸の音が聞こえる。レキがハイマキの散歩から帰って来た。リビングへと進む足音が近づいてくる、さあここから本番だ。

「ノブツナさん、ただいま帰りました」

「Hai、レキ！待ってたYO〜！」

俺は鼻眼鏡をかけて、某海産物家族のジャンケンをする面白い髪型の人のカツラを被って、両手に某夢の国のネズミの手袋をはめて、ドテラを着てヘリウムガスを吸って変な声をだしてレキを迎えた。このいきなりの場面でレキはきつと吹き出すだろう、どや!!

「……………」

が、ダメ。レキは笑う事無く無表情でじつと俺を見つめていた。

なんでや！なんで笑わないねん！渾身のギャグやぞ!?というかハイマキ、お前までそのチベットスナギツネみたいな顔をして俺を見るんじゃない。

ええい、こうなったらゴリ押して吹かしてやる！

「お、お帰り！御飯にする？お風呂にする？それともお、わ・た・し？」

「ノブツナさん」

「あつはい」

「今日、音楽室でジャンヌさんと何かお話されていたようですが……何を話していたの

ですか？」

レキは俺のギャグをことごとくスルーしてずいずいと俺に歩み寄って来た。怖い!? 無表情だけでもじつと見つめるその瞳がなんか怖いよ!?

まずいぞ、このままでは本当にレキがヤンデレ少女になつて俺が安心して寝ることができなくなる……!

そして何よりも本当のレキを調べようとしている事がバレればレキはジャンヌを本気で殺しかかるかもしれない、これだけは避けなければ……!

「じ、実はなー、レキの誕生日プレゼント何がいいかなーって相談してたんだ!」

「誕生日プレゼント……?」

俺の疑いの眼差しがふつと消え、レキはキョトンと不思議そうに首を傾げた。

「……私は誕生日なんて無縁に育てられたのでいつ生まれたのかは覚えていません」

「だ、だからさ! それも踏まえて俺が決めていいのかなーってジャンヌに相談したんだ」
「ノブツナさんが決めてくれるのですか……?」

レキはどこかハツとした顔で俺を見つめる。よ、よしまずは回避はできたか……?

「お、おうよ! そろそろ俺の誕生日が近いからそれに合わせてプレゼントしよっかなーってな。楽しみにしてろよ?」

「……」

レキは静かに頷いた。どこか安心と不安が混ざった複雑そうに迷っているのか瞳が泳いでいる。ジャンヌの言う通り、レキは悩んでいる。不安を払ってあげるように俺はレキを撫でた。

「サイプライズは後ほどにして……今日はレンタルDVDが半額の日だったんだ。これでもみて気分を吹き飛ばそうぜ！」

俺は『エンタメ』をはじめ『爆笑ヒット○レード』や『笑ってはいけない武偵校24時』、『20時だよ、全員集合！』そして『○本新喜劇』のDVDを用意して上映することにした。よし……！これならきつとレキも大爆笑間違いなしだ！

DVDの上映中、うんと笑った。大爆笑した、腹を抱えて大笑いした

主に俺が

レキは笑うどころか顔色一つ変えることなく何も言わずじつと映像を見続けた。
ハイマキは爆笑している俺をチベツトスナギツネのような顔をして見つめていた。

「——つてなことがあつてな、レキは笑わなかつた」

「お前はバカか」

電車内で俺の報告を聞いたジャンヌは呆れてため息をついた。早朝からジャンヌは部活の朝練に向かうので俺もそれに合わせて朝早く起きてアドバイスを貰うために彼女の下へと向かったのだ。

「そんなので笑うと思うかバカ者」

「笑うと思うけどなー、24時の蝶野にビンタされるところとかエンタメは陣内さんとかおススメだぞ」

「お前の情報なぞいらん！というかお前が女心を知らないと予想はしていたがそこまでとは……」

「レキはラーメンが好物だけど？」

「そういうことじゃない!!」

ジャンヌは怒鳴ると呆れて頭を抱えた。うーん、乙女というものはよく分からんな。

「お前じゃなくてレキが喜びそうな事をしろ。そうだな……贈り物とか何か美味しい物を奢るとか」

「ラーメン」

「ラーメンから離れろ!! スイーツ! 甘くておいしいものとか!!」

ラーメンはダメ、とジャンヌはプンスカ怒りながら頑なに言ってきた。ラーメン好きな女子も可愛いと思うんだけどおどなあー。まあジャンヌのおかげで女性が喜びそうな物を贈るとか選択肢が増えた。

「ありがとなジャンヌ。ところでさ、朝から人が多すぎじゃねえの?」

「お前は通勤時間に学校に来ないからわからないのだ。少しは早起きして早めに登校しろ」

それなら誰もいない教室で朝からダラダラすることができるからいいな。だがこうも人が沢山乗り込んでくるのは……ん?

電車が駅に着いて扉が開き、電車を待っていた人達が乗り込んでくる中俺は奇妙なものを見た。

乗り込んでくる人混みの中、一人だけおかしい奴がいる。鎖帷子のついた顔まで覆う忍び装束を着て、日本舞踊に着ける仮面……あれは翁とか言うやつだっけか、そんな仮面をつけた変な奴がいた。何故誰も気づかないのか、変に思っただけと眺めていたら――

———　　そいつと目が合った。

「———　　っ!？」

「?どうしたノブツナ？」

「な、なんか変な奴と目が合った……」

「変な奴?通勤のサラリーマンや武偵校の生徒しか見えないが……?」

もう一度そいつがいた方を見たら、そいつの姿はなかった。確かに俺は見たはずなんだが……いや気のせいだったのか?変に朝早く起きたからまだ寝ぼけているのだろうか……

電車の扉は閉まって出発をする。やっぱり朝の電車は乗り込んでくる人が多い、ジャンヌは早起きはいいものだと言うが明日から普通通りに遅く起きてのんびり歩いていこう。

そう考えて今だ眠たいあくびをしながらちらりと後ろを振り返った。

背後には忍び装束を着て翁の仮面をつけた奴が俺とジャンヌの首を狙って分厚い刃を持った小太刀を薙ごうとしていた。

いたじやねえか!?

俺はすかさずジャンヌを押し倒して躲す。小太刀は空を切ったが翁の仮面の奴は俺めがけて刀を振り下ろそうとしてきた。慌てて避けて凶刃から逃れる、空振りに終わったが空席の場所は見事にバックリと割れていた。どんだけ鋭い切れ味なんだよ!?

異変に漸く気付いたのか、女性の悲鳴で辺りが騒然となり乗客はパニックになつて逃げ惑いだす。翁の仮面の野郎はゆつくりと俺とジャンヌの方へ顔を向けて小太刀を構えた。

「じゃ、ジャンヌ? あれイ・ウーのお知り合い?」

「し、知らん! あんな奴、見たことがないぞ……!」

ジャンヌも知らないとなると……一体誰だ? すると翁の仮面の野郎は俺の方へと視線を向けてきた。

「君が……犬塚、ノブツナくんでしたな……?」

ゆつくりとした落ち着いた男性の声だ。いやそれ以前に何で俺の名を知っているんだ?

「子供相手に大人げないと思うが、これも命令だね。君を殺させてもらうよ?」

28話 再会

朝から忍者みたいな奴に襲われた。やっぱり早起きは碌な事がない。

早朝から通勤通学の人々の悲鳴が電車内に喧しい程響く。乗車していた武偵の幾人かが一般人を安全な車両へと避難誘導していき、他の幾人かは銃を構えて仮面の忍者に動くなど銃口を向ける。

「……ふん」

仮面の忍者はそんな彼らを鼻で嘲笑い、ゆっくりと俺に近づいていく。あいつは俺が狙いで周りの相手は眼中にない、いや銃で撃たれるよりも早く相手を仕留めることができる自信があるのだ。

「銃は人の命を奪う事もできる……君達は自分が死んでも構わない覚悟があるかね？」

仮面の忍者は挑発しながらゆっくりと近づく。俺は絶対に誰も撃つなよと他の武偵達に睨みをきかす。

「ジャンヌ、お前エクスカリバーはどうした」

「エクスカリバーじゃない、デュランダルだ。生憎だが今は修理中で持っていない、だが剣以外にも銃の心得はある」

ジャンヌは剣の代わりとC z・C z100を引き抜きロードをする。どちらかと言えば劍の方がありがたかったががないよりかはマシか。

「そういうお前は刀はどうした？」

「早起きしたせいで忘れた。ったく、こんなんだつたら早起きすんじゃないかった」

L A R グリズリーを引き抜いて銃口を忍者へと向ける。仮面の忍者はゆつくりと歩んでいた足をぴたりと止めた。これ以上進んだら撃たれると悟ったのか、軽くため息を漏らした。

「私もこんなぐっご遊びをしている連中に舐められたものだ、死と隣り合わせだということは今一度教えなくてはな……！」

仮面の忍者は肩を竦めて声を低くした。あいつ怒っているのか？

そしてそいつは身を低くし、握っている小太刀を突き構えのままゆつくりと手を引いていく。

このまま突進して突いてくるのか？ いやそれならば動いた瞬間銃を構えている此奴らのハチの巣にされる、それじゃあなせ……？ 考えている合間に武偵の生徒の一人が痺れを切らして構えている銃の引き金を引こうとした。

仮面の忍者は瞬時に小太刀の後ろ先端を左手でトンツと押したような動作をした。その刹那、あいつが持っていた小太刀が消えた……

いや、消えたんじゃない、飛んだんだ……!!
「伏せろ!!」

咄嗟に後ろにいる連中に叫んだ。が、叫ぶよりも早く勢いよく飛んだ小太刀は引き金を引こうとした武偵の顔面に突き刺さった。彼は銃を撃つことなく鮮血を飛ばして倒れた。倒れた武偵の隣にいた武偵の女子は悲鳴を上げた。

「ほら言わんこつぢやない」

仮面の忍者はやれやれと肩を竦めて呆れたようにため息をついた。俺とジャンヌはただ驚くことしかできなかつた。どうやってあの構えのまま飛ばしたのか、ジェット噴射のような勢いを出して飛ばしたのか想像もつかない。

「あいつの狙いは俺だ!死にたくなかつたら下がれ!!」

これ以上被害を出すわけにはいかない。朝ツパから武偵が死にまくったらシヤレになんねえって!仮面の忍者はフンと鼻で笑って他の武偵達が下がるのを待った。なかなかめられてる……

「ノブツナ、どう出るのだ?相手はもう得物は持つていないぞ」

ジャンヌはそう言うが俺はうかつに手を出せない。ああいった奴はまだ他に武器を隠し持っているはずだ。こちらは銃を持つてるから距離は牽制できる……と思いきや、仮面の忍者はどこから取り出したのか両先端に重量のある分銅がついた長い縄を取り

出した。

「……大人げないと思わんでくれよ?」

仮面の忍者は嘲笑うかのように告げると、両手に紐をもって勢いよく振り回した。ただ手で回しているだけで風が巻き上がるだなんて……しかも速い!先端につけられている分銅が全く見えねえ。

「……ふんっ!」

仮面の忍者が投げるような動きで腕を伸ばした。飛んでくる分銅は速すぎて見えねえが相手の腕と手で軌道を読むしかねえ……!俺は急ぎ身を屈めたその刹那頭上で空を切るような音が二度通り過ぎた。間違いなく分銅が俺の顔面を狙って飛んできたのと忍者がすぐに分銅を引き戻した。急いで動かねえと次が来る……!

仮面の忍者は低めを狙うかのように手を横へ薙いだ。次は膝だ、後ろへと飛んで避けて先手を打たれる前にLARグリーを撃った。放たれた弾丸は俺の顔面を狙って飛んできた分銅を弾かせる。

「……いい目だ」

仮面の忍者は関心したかのように呟いた。紐や鎖を介して使われる武器は先端の速度が目にも止まらぬ速さになるが、全ての軌道は術者の手に伴われる。武器本体が何処から飛んでくるか、術者が教えてくれる……本部師匠から教わったいつ使われるのか

なーって思ってた賜物だけど今すつごく役に立ってる。

そして今回はジャンヌがいる。とても都合だ。

「ジャンヌっ！」

「分かつてる！銀氷よっ！！」

俺の横でジャンヌは床に手を置くと床が凍り付き始め、彼女の能力で発現された氷は忍者の足下めがけて広がっていく。相手に異能者がいる事に気づいた忍者はすぐさま後ろへと下がる。相手の足に氷を張り巡らせて足止めさせる作戦は失敗したが牽制はできたはずだ。

「ふむ……異能者もいたか」

相手は想定内だともいうかのような余裕綽々な様子だ。ちよつとなんか本当にムカつくな……

「残念だ、少しは遊んでやろうと思ったが時間はなさそうだね」

「当たり前だこの野郎!! てめえはもう袋のネズミだつての！」

ここは今も走行中の電車、そして行先は学園島。もう連絡はされているだろう、他の武偵も向かっていたり待ち構えていたりしている。俺とジャンヌがいるし、こいつには逃げ場はねえ。どういった料簡で俺を殺そうとしたのかとっ捕まえてみっちり絞つてやらねえと。

「それならば——」

忍者は持つていた長い縄のついた分銅を投げ捨てた。何をするつもりだ？このままお手上げか？ふと不審に思ったその直後、忍者の雰囲気が変わった。一瞬、冷たい殺気を感じた。

「——本気で殺さなければね」

言いだしたと同時に仮面の忍者が一気に動いた。1歩、2歩、そのわずかな歩数で間合いを一瞬にして縮ませ数秒でジャンヌへと迫って来やがった。

忍者は右手を貫手の構えにしてジャンヌへと突こうと動く。まずい、忍者野郎はジャンヌを殺す気だ……！すぐさまLARグリズリーを奴の右手に狙いをつけて引き金を引いた。放たれた弾丸は奴の右手を——貫かず弾かれた。

俺は見開いて驚くが忍者はそれを待つていたかのようにジャンヌの体を貫こうとしていた右手を大きく開かせ、腕を脱力させたようにしならせて体を横に動く勢いで俺の体めがけてその右手を打ち込んだできた。

「つつでえっ!？」

その威力は引つ叩かれたのと比べ物にならない程の威力だった。ピンタじゃない、まるでデカイ鞭で思い切り叩かれたような痛さだ。

「ノブツナっ!？」

ジャンヌはすぐさまCz・Cz100を撃とうと引き金を引こうとしたが忍者は彼女よりも速く右手による掌底を打ち込まれ吹っ飛ばされた。やばい、本当にマジで殺しかかってきている……起き上がろうとしたが忍者が俺を抑え込んできた。

「つ……何が目的なんだ、てめえは……!!」

「君が知る必要はない。君が死ねば好都合だと言われているだけだ」

俺が死ぬと好都合……いやいやいや、本当に心当たりがないんですが!?!いや、あるとすればまさかレキ関連か!?

「少しくイズを出してあげよう……この地球上で最も強力な毒ガスは何か分かるかね?」

最も強力な毒ガス?それって一体……と考えている間にも忍者は左手をゆつくりと俺の顔へと近づけようとしてきた。その左手を見た瞬間、ぞくりと冷たい気配が……いや、気配じゃない。これは予感、これをくらったら間違いなく死ぬかもしれない予感だ。
あ、やばい——これマジで死ぬ

「——朝から早々事を起こすだなんて、相変わらずねノブツナ君」

どこからか聞き覚えのあるような声が聞こえた瞬間、忍者の仮面と体に何か弾丸の様

なものが当たった音が聞こえた。忍者は痛みを耐える声を漏らして俺から離れる。拘束された身が自由になったと同時に俺はすぐさま転がって離れ、声のした方へと振り向いた。

武偵校の女子制服を着た、茶髪の綺麗な三つ編みと絹のように白い肌に華奢ながらも力強さをも感じる凛々しさを持つ人物がいた。どこかの馬の骨とかいうレベルじゃない、あいつは間違いなく見覚えのある人だ。

「カナ……さん!?!」

「久しぶりね、ノブツナ君。キンジとは仲良くやつてるかしら?」

カナは驚く俺にウインクをした。彼女、否彼は遠山金一、あの遠山キンジの兄である。どういう訳かは分からないが女性に変装している時は遠山カナと……なんかややこしいがれつきとしたキンジのお兄さんである。驚くのも当たり前だ、彼女……いや彼は、いや今は彼女か……ああもうややこしい、カナは一年前の豪華客船沈没事件で行方不明になっていたんだ。メディアや他の武偵は死んだとされていたが……まさか生きてて帰って来たとは驚きだ。

カナは微笑むと持っているコルトS. A. Aの銃口を仮面の忍者へと向ける。

「何方か知らないけど……次は狙いを外さないわよ?」

見たことはあまりないのだがカナの撃つ銃弾は仕掛けは分からないのだが不可視レ

ベルの速さで放たれる。いわば不可視の銃弾、軌道を読まれることなく確実に仕留める超強力な技だ。静かに見つめるカナに対して仮面の忍者はため息を漏らすと左手を電車の扉へとペタリと密着する様に押し付けた。

「邪魔が入ったか……まあいい、まだ時間と余裕がある」

左手を強く押し込んだ直後、電車の扉がベコン!!と大きなお音を立ててひしゃげて吹っ飛んだ。な、なんつう力だ……!?!?というかどうかやって左手だけで扉をぶち開けたんだ!?

「また今度会いに行くとしよう」

忍者はそう言い残して飛び降りていった。追いかけてしようとしたがカナに止められた。電車はかなりの高さのある場所を走ってる。ここから追跡は不可能ってか……

「ノブツナ君、取りあえず今は人が人の手当てと事態の收拾をしましょう」

「……カナさんの言う通りっすね。それと、この後時間があります?」

カナがどつか消えてから色々と面倒な事が起き続けているんだ、積もりに積った鬱憤を聞かせてやらなければ。察したカナは苦笑いして頷いた。

「なんで死んだふりしてたんです? おかげでメディアに騒がれてうざかったんですか

ら

学園島の公園のベンチでリーフパイを食べながらジト目でカナを睨む。勿論、学校はサボりだ。それよりもカナが死んだと思われたその後が本当に面倒だった。メディアは武偵を叩いてマスコミ連中はキンジの部屋の前まで押しかけてきやがった。おかげでキンジはノイローゼになりかけるし、隣に住んでた俺は連中がうるさくて居眠りすらままならなかった。まあ腐った生卵ぶん投げて追い払ったけど。

「ノブツナ君やキンジには迷惑かけたのは謝るわ、でも死んだふりをした理由は話せない」

「俺にも言えない理由っすか？」

「ごめんなさいね……どうしてもやらなきゃいけないことだから」

様子から見てとても重要な事なんだろうな。キンジのお家にキンジを奴隷扱いしてやるピンクツインテロリ、ドエロい下着を身に着けてる幼馴染の巫女と最近じゃ金髪ロリ巨乳な怪盗までにも色使つてて修羅場になってるし……ああ多分それがお兄さんにバシって家族会議ものになったんだろうな。

「……なんとというか、お察しします」

「？」

「そうだ、カナさん。今朝の忍者野郎、心当たりはありませんか？」

「あの忍者ね……」

カナは静かに首を横に振った。武器や暗器の使い手の上に徒手空拳もかなり強い曲者、いったい何者だったのか。気になるのはあいつの手。右手は弾丸を弾いたことから恐らく頑丈な義手だろう。そして蹴り開けることすらできない電車の扉をぶつ飛ばした左手。あの左手からはぞくりと嫌な気配を感じたが一体何を仕掛けていたのか……

とうか、また今度会おうと言つてきやがったし下手したらすぐにでも再会しそうで怖い。どういう理由かは分からないが俺を狙っている。

「次はいつ貴方に襲いかかってくるか……警戒しておいた方がいいわ」

「勿論つす。トラバサミや地雷とかトリップメインとか仕掛けておきますからー」

警戒は万全にしておかければ。カナは苦笑いして頷く。

「さてと、私はそろそろキンジに会いに行くわ……そうだ、ノブツナ君。貴方に伝えなければいけない事があるの」

するとカナは真剣な表情で俺を見つめてきた。去年、一度手合わせをしてくれた時と同じ様に、キンジの前からいなくなる前日の時と同じ様に、重大な事をやる覚悟を決めたような顔をして見つめる。

「急ぎなさい、世の中は貴方を待つててくれない。貴方がやるべき事を、決断を下す日はもう目の前に迫つて来ているわ」

「それって……もしや」

「ごめんなさい、貴方に力を貸してあげたいけれど私にも時間がないの。教えてあげれる事はこれだけ……」

カナはそう述べて武偵校に向かって去っていった。ジャンヌといい、仮面の忍者といい、カナさんといい、誰もかれも意味深な事を言い残すよなあ

急ぎなさい、か……はやくレキを笑わせないとな